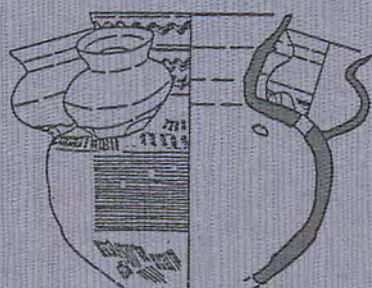


熊本県文化財調査報告第86集

# 京塚古墳

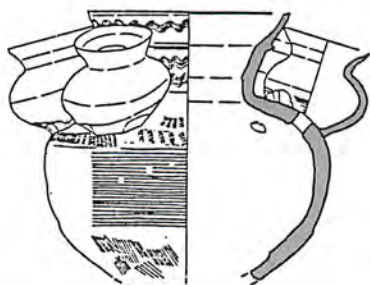


1987

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第86集

# 京塚古墳



1987

熊本県教育委員会



# 口絵写真 I



復元された京塚古墳遠景



復元以前の周辺地形



## 口絵写真Ⅱ



周溝内の遺物出土状況



周溝内に落ち込んだ円筒埴輪



鈴付き高坏と子持ち壺

# 序 文

自然と歴史的風土を保存し、かつ心の憩いの場および学習の場としてご利用いただくため、県では菊池川流域風土記の丘（仮称）構想に基づいてその設置を進めております。

その設置予定地のひとつ菊水地区には、全国的にも著名な江田船山古墳（国指定史跡）をはじめ多くの遺跡が所在し、古代文化の一大集積地となっております。これらの遺跡の整備・復元は、風土記の丘設置事業の中心となるものであります。

さて、遺跡の整備に先立ち、昭和59年「京塚」の地名の残る所に試掘を実施したところ、すでに消滅した古墳の周溝を発見、その後の発掘調査で、この古墳の全貌をほぼ把握することができました。

この調査結果を踏まえて整備復元したのが、現在風土記の丘（菊水地区）に所在する京塚古墳で、その調査結果をまとめたのがこの報告書であります。本報告書が、文化財保護についての理解を深める一助となれば幸甚です。

発掘調査および報告書作成にあたっては、地元菊水町をはじめ関係各位のご理解と多大のご協力をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

昭和62年 3月31日

熊本県教育長 伴 正 善

## 例 言

1. 本書は、風土記の丘整備事業に伴い、熊本県教育委員会が単県費で昭和59年度に実施した京塚古墳（菊水町）の周溝確認調査の報告書である。
2. 調査は第一次が昭和59年6月18日～7月31日、第二次が昭和59年10月5日～31日の期間で実施した。
3. 現地での発掘調査及び発掘資料の整理は、文化課参事桑原憲彰があたり、坂本重義氏（山鹿市立博物館勤務）の協力を得た。なお、「石人の丘」の項は、文化課課長補佐隈昭志氏に、出土埴輪の整理、論考については、菊水町資料館学芸員の池田道也氏にお願いした。遺物の実測、トレスは、勝又俊一・藤崎伸子の両氏がこれを行った。
4. 本報告書の執筆と編集は、主として桑原憲彰が担当した。

# 本文目次

## 第1章 序 章

- 1. 調査に到る経緯 ..... 1
  - (1) 過去の京塚古墳関係調査 ..... 1
  - (2) 調査組織と調査経過 ..... 2
- 2. 位置と環境 ..... 4
- 3. 地形上から見た京塚古墳と船山古墳 ..... 8

## 第2章 調査の内容

### 1. 遺 構

- (1) 古墳の内部主体 ..... 13
- (2) 周 溝 ..... 13
- (3) 墳 丘 ..... 17
- (4) 土 橋 ..... 17
- (5) 周溝部に残る柱穴 ..... 17
- (6) 送葬儀礼と遺構 ..... 21
- (7) その他の遺構（中・近世） ..... 24

### 2. 出土遺物

- (1) 遺物の概略 ..... 27
- (2) 須 恵 器 ..... 28
- (3) 土 師 器 ..... 37
- (4) 埴 輪 ..... 39
- (5) 装 身 具 ..... 56
- (6) 古墳築造以前の遺物 ..... 56
- (7) 中世時の遺物（瓦器・陶磁器） ..... 58
- (8) 近世時の遺物 ..... 58
- (9) 遺物から見た台地の変遷 ..... 58

## 第3章 古墳と周辺の現状

- 1. 古墳の復元 ..... 60
  - (1) 復元への経過 ..... 60
  - (2) 計画と現況 ..... 60
  - (3) 整備の基本方針 ..... 60

(4) 機能及び展示構成 .....	61
(5) 京塚古墳復元計画 .....	61
2. 石人の丘 .....	64
(1) 風土記の丘整備計画の概要 .....	64
(2) 石人の丘の整備 .....	64
第4章 総括	
1. 京塚古墳の概況 .....	71
2. 京塚古墳の終焉 .....	75
付. 関連文献抄	

## 挿 図 目 次

第1図 清原古墳群周辺の遺跡（古墳時代） .....	5
第2図 清原台地古墳群 .....	7
第3図 京塚古墳と船山古墳との位置関係 .....	9
第4図 整備復元以前の京塚古墳周辺地形図（折り込み） .....	11
第5図 京塚古墳出土舟形石棺棺材実測図 .....	14
第6図 京塚古墳所在推定地の試掘坑設定状況（折り込み） .....	15
第7図 周溝北側に残る柱穴群 .....	18
第8図 周溝断面図 .....	19
第9図 周溝断面図 .....	20
第10図 建物プランの復元例 .....	23
第11図 道路遺構と土壌墓 .....	26
第12図 鈴付き高坏 .....	29
第13図 甕口縁および高坏口縁部 .....	30
第14図 周溝内出土の高坏の脚部破片および甕口縁部 .....	31
第15図 子持ち壺と甕 .....	32
第16図 大・小甕破片（その1） .....	34
第17図         〃         （その2） .....	35
第18図 土橋部右側周溝底出土の土師器 .....	38
第19図 周溝内における埴輪の出土場所（折り込み） .....	41
第20図 周溝内各所における円筒埴輪の出土状況（その1） .....	43



第21図	周溝内各所における円筒埴輪の出土状況（その2）	44
第22図	〃（その3）	45
第23図	円筒埴輪実測図（その1）	50
第24図	〃（その2）	51
第25図	〃（その3）	52
第26図	〃（その4）	53
第27図	円筒埴輪・形象埴輪実測図（その5）	54
第27図-2	形象埴輪片（その6）	55
第28図	表採黒曜石剥片	57
第29図	復元整備された京塚古墳	61
第30図	京塚古墳墳丘復元計画断面図	62
第31図	墳頂部芝生保護体図	63
第32図	新設された石人の丘	65
第33図	石人据付け工事風景	67
第34図	菊池川流域所在石人（その1）	68
第35図	〃（その2）	69
第36図	京塚古墳の周溝全体図	73
第37図	台地開墾の記念碑	75
第38図	同・先亡五人塚碑	76

## 表 目 次

第1表	清原古墳群周辺の遺跡	6
第2表	土壙墓の規模	25
第3表	風土記の丘整備計画	66
第4表	熊本県下の石製品出土地	66
第5表	事業概要（主要文化財等）	67
第6表	墳丘の規模と形態	72

# 卷末図版目次

- 図版 1 (全段) 試掘によって全貌を現した京塚古墳
- 図版 2 (上段) 調査前の京塚古墳一帯 (南方より)  
(下段) 京塚の地名が残る同所一帯 (東方より)
- 図版 3 (上段) No-1 試掘坑東断面  
(下段) No-2 試掘坑 (道路と周溝)
- 図版 4 (上段) 豪雨で雨水の溜った東側周溝 (北方より)  
(下段) No-5 (手前) と No-1 試掘坑 (南方より)
- 図版 5 (上段) 南側周溝内に落ち込んだ円筒埴輪群  
(下段) 北側周溝と巨大柱穴群
- 図版 6 (上段) 東側周溝内に落ち込んだ円筒埴輪群  
(下段) 同上円筒埴輪拡大写真 (埴輪 8)
- 図版 7 (上段) 南側周溝落ち込み円筒埴輪 (埴輪 2)  
(下段) 北側周溝落ち込み円筒埴輪 (埴輪 11)
- 図版 8 (上段) No-6 試掘坑の埴輪片の出土状況  
(下段) 同上拡大写真
- 図版 9 (上段) 東北側周溝内巨大柱穴群 (手前は土師盃)  
(下段) 同上出土の土師盃拡大写真
- 図版 10 (上段) 北側周溝斜面に掘り込まれた巨大柱穴群 (西方より)  
(下段) 同上巨大柱穴拡大写真 (東方より)
- 図版 11 (上段) 方形の巨大柱穴  
(下段) 同上
- 図版 12 (上段) No-4 試掘坑出土の円筒埴輪  
(下段) 同上埴輪拡大写真
- 図版 13 (上段) 西側周溝の状況  
(下段) 通路脇を固めていた割石群
- 図版 14 (上段) 排土前の南側周溝部 (北方より)  
(下段) 完掘のなった同上周溝部 (南方より)
- 図版 15 (上段) 5号土壙墓内に落ち込んだ割石群  
(下段) 完掘のなった5号土壙墓
- 図版 16 (上段) 鈴付き高坏 I (3鈴共に欠落)

- (下段) 鈴付き高坏II (3 鈴中 2 鈴欠落)
- 図版17 (上段) 鈴付き高坏の部分拡大  
(下段) 同坏部破片
- 図版18 (上段) 高坏 I  
(下段) 同上裏面部
- 図版19 (上段) 甕破片  
(下段) 同上の内面部
- 図版20 (上段) 甕破片 (同一個体)  
(下段) 同上の裏面
- 図版21 (上段) 甕破片  
(下段) 高坏脚部破片
- 図版22 (上段) 子持ち壺  
(下段) 同上を上面からのぞむ
- 図版23 (上段) 子持ち壺 (下方より)  
(下段) 同上内面の状況
- 図版24 (上段) 甗  
(下段) 同上 俯瞰図 (右は口縁部)
- 図版25 (上段) 土師盃  
(下段) 土師甕
- 図版26 (上段) 円筒埴輪破片  
(下段) 同上裏面の状況
- 図版27 (上段) 土師質土器破片  
(下段) 同上底部
- 図版28 (全段) 円筒埴輪 (No 1 ~ No 5)
- 図版29 (全段) 円筒埴輪 (No 6 ~ No 10)
- 図版30 (全段) 円筒埴輪と形象埴輪 (No 11 ~ No 17)





# 第1章 序 章

## 1. 調査に到る経緯

### [1] 過去の京塚古墳関係調査

船山古墳の北西一帯の畑地に、京塚という下げ名が残るところから、地元には京塚という消滅した古墳が存在したのではという推測が、以前からあった。また地名の京塚に因んでか、かつて当所より金属製の経筒が出土したとの風聞もあり、盛土を持った何らかの遺構の存在を暗示していた。

菊水町教育委員会が、この場所に初めて試掘坑を設定して、その有無の確認調査に着手したのは、1975年のことであった。翌年この調査結果は、町教委文化財報告書第1集「船山」としてまとめられた。調査は、京塚古墳推定地のみに限った調査ではなかったが、調査者は、京塚古墳の南西方向の周溝部分に十字状に試掘坑を設定している。この時の2つの試掘坑は、東西方向の試掘坑が京塚古墳の周溝を横断し、南北方向の試掘坑が周溝外縁をかすめた。

この結果に鑑み、調査者は、西方向に弧を描く周溝の存在を推定し、現京塚古墳の位置の西側一帯に京塚の墳丘を想定した。そして1980年発行の「江田船山古墳」収載の清原古墳群周隍調査概要には、「石棺が出土したり、伝承的に塚があったとされている地は①京塚、②首塚、③オクボサンの墓の三か所である。①京塚からは、既知三古墳から出土した埴輪とは全く異質の埴輪が出土し、古墳の周隍らしき遺構も検出され、壊滅古墳の存在がほぼ確実視された。」とし、出土した埴輪については「埴輪の焼成は、本台地中の最高級品で、土管状の口縁部と底部の差がなく、タガは高く調整は入念である」という記載がなされた。

次に、1981年県教育委員会が風土記の丘設置構想に基づき、史跡整備の資料とするため実施した「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」では京塚古墳について、「過去に発見された溝を追跡し、古墳周溝か否かの確認をすることになった。」として、1号～8号のトレンチを設定し試掘を行っている。

しかし、当該地から隔っていたため、京塚古墳の周溝確認迄には到らず、同報告書の「調査のまとめ」には、「京塚・伝古墳周辺では、1・2号トレンチ遺構なし、50年度調査で性格不明の溝と報告された遺溝は、古い時期の土壌と考えられる。また菊水町歴史民俗資料館入口付近に設定した7・8号トレンチで50年度調査時検出の溝が発見されたが、これは古墳周溝でないことが判明した。」と記載している。

この県教育委員会の調査は、8月3日より開始し、可能な限りの古墳周溝確認を実施したものの、いくつかの溝、落ち込みが検出されただけで「50年度調査で確認された消滅古墳の一つ京塚古墳については、今回は調査し得なかった。」という結論に達し、50年度の町の調査結果を

再評価する形で、8月21日調査を終了している。

これは私有地であるため、当該地にトレンチ設定の承諾が得られなかったことや、50年度の調査時の周溝想定が西側方向へ行われたため、56年の調査では7号～8号のトレンチ設定をうながし、結果的には、京塚古墳の正確な位置の確認迄に到らなかったものと思われる。

このため、今回の調査は、再び50年度の町調査時の振出しに戻り、西に弧状を描く落ち込みの存在を踏えての調査開始となった。

## [2] 調査組織と調査経過

### ○調査組織

調査主体	熊本県教育委員会	
調査責任者	文化課長	米村 嘉人
調査総括	同 主幹・文化財調査係長	隈 昭志
調査担当	同 参事	桑原 憲彰
調査事務局	文化課長補佐	林田 茂一
	同 主幹	大塚 正信
	同 参事	花田 隆一
	同 主事	谷 喜美子
	同 主事	木下 英治
調査指導員	熊本県文化財保護審議会委員・山鹿市立博物館長	原口 長之
調査協力者	坂本重義（山鹿市立博物館）・大森洋子（同）・福永光隆（菊水町教育委員会）・池田道也（同）	
作業協力者	仲島実明、野田辰起、小林ツヨミ、前川一丸	

### ○調査経過〔第一次調査〕

59. 6. 18 (月) ・ブルによる当該地の掘削開始。面積は約600平方米、深さは約30cm～40cm。・山鹿市と地元菊水町に作業員の手配。・旧地主の池田知義氏から、戦前における地貌および舟形石棺の位置等についての聞き取り調査を行う。・本日の採集遺物、土師器片、埴輪片各々一点。

59. 6. 22 (金) ・ブルを使用し発掘区域の北方表土を厚さ30cm排土。・表土はぎ終了部分で半円形の周溝と円筒埴輪片を確認。福永氏（町教委）、池田氏（同）より発掘の手伝いを受ける。緒方勉氏より昭和56年度の「清原古墳群の周溝確認調査」時の状況を現地で聞く。

59. 6. 25 (月) ・調査区内の周溝落ち込み部に交叉する形で、南から5か所に試掘坑を設定し、順次発掘を開始する。



59. 6. 27 (水) ・京塚周溝南側 No-2 試掘坑の排土、江本直氏来訪。
59. 6. 28 (木) ・午前中南側落込みの排土作業、午後は雨のため遺物水洗い。
59. 6. 29 (金) ・1号溝の確認、溝の長さ6 m、横幅198cm、深さ21cm、溝の底部近くより中世の瓦質摺鉢の口縁部と底部の一部が出土。
59. 7. 3 (火) ・昭和50年時町調査の試掘坑跡の再排土。・100分の1の遺構平面図の作成。
59. 7. 4 (水) ・昭和50年度調査時の試掘坑および1号～2号溝の完掘清掃。・No-3 試掘坑の周溝部掘り下げ。・No-4 試掘坑出土土師器（供献土器）の清掃写真撮影など。なお、古墳南の畑地造成時の客土の厚さは20cm程度と判明。
59. 7. 5 (木)晴 ・No-5 試掘坑の掘り下げ。・周溝内より一辺が30cm前後の花崗岩4～5個出土、葺石が周溝内に転落したものか。・㊦の小溝を発見、時期用途共に不明。・㊧の試掘坑の設定。
59. 7. 6 (金) ・No-4 試掘坑内の新しい溝部分より、江戸期の黄色茶碗の高台部、瓦質摺鉢片、円筒埴輪片、須恵器等が出土、周溝を切る新しい掘り道の時期が把握できた。今日の成果により古墳周溝上に後世の掘り道が重なり合って存在することを確認、数日來の疑問点が解ける。
59. 7. 19 (木) ・No-6 試掘坑の排土および断面実測。・丸英スカイフォート事業部に依頼し、高さ50mの気球より遺跡全体の写真撮影。(A.M 11:00～3:00)。・文化庁、県文化財保護審議員、文化課職員その他の調査現場視察 (P.M 1:00～3:00)。
59. 7. 20 (金) ・No-7、No-8 試掘坑の排土、同試掘坑の断面実測。・No-4 試掘坑の遺物・礫類の取上げ。・近世土壌墓の落込みの確認、発掘用具の水洗い。
59. 7. 24 (火) ・遺構プランの測量、図面へのレベル値の記入。・図面の整理等。
59. 7. 31 (火) ・発見遺構のライン引き (A.M 9:30～10:00)・菊水町教育委員会で打ち合わせ会議 (A.M 10:00～12:00)・清原現地での検討会 (P.M 1:00～4:15)・調査区と工事区の境界線の現地杭打ち。
59. 8. 10 ・京塚古墳の位置が確定したため、文化庁に遺跡発見通知書を提出した。

#### 〔第二次調査〕

第一次調査によって伝・京塚古墳の存在と正確な位置を把握することができた。同調査が、古墳の南半分の調査に終始したのに対し、第二次調査は、北半分(355-1番地)が主要調査地区となった。

第二次調査は調査準備を経て、10月から発掘作業を開始、まず10月前半に周溝落ち込みの追跡を行い、後半で周溝全体の完掘を目指した。

59. 10. 5 (金) ・調査機材の準備点検、運搬。
59. 10. 8 (月) ・発掘調査開始。
59. 10. 9 (火) ・発掘予定個所の表土をブルにより約50cmほど掘削する。
59. 10. 11 (木) ・第一次調査時に設けた4か所の試掘坑を目印に、北半分の周溝を5区画に分割し、二班編成で順次発掘を開始する。収蔵庫より不足機材の搬入。
59. 10. 12 (金) ・周溝落込みの排土。
59. 10. 16 (火) ・周溝落込み土の排土。周溝内落ち込み遺物の実測。
59. 10. 26 (金) ・最後の東南部分の排土終了。古墳の周溝部の排土はすべて完了した。
59. 10. 29 (月) ・南側周溝に掘削された井戸の排土の継続。周溝部の柱穴の排土。
59. 10. 30 (火) ・井戸の深さは4.50mに達し危険となったため、午前中で作業を中止。周溝部の柱穴の排土終了。完掘した周溝の平板測量を開始し、周溝柱穴の約半分程を終了。
59. 10. 31 (水) ・調査終了。京塚古墳の周溝全域を清掃後、写真撮影を済ませ、周溝内の出土遺物を取り上げ調査を終了した。4時現場撤収。

## 2. 位置と環境

京塚古墳は、熊本県玉名郡菊水町大字江田の清原台地上に位置する(第1図参照)。この台地は、木葉、江田を扼する小山塊の北西に舌状に広がる標高約30m、北側水田面との比高差が約20mの低丘陵地である。西は南流する菊池川、北は西流する江田川の流路で区切られている。行政区画のうえから台地は、大字江



清原遺跡全景(右手の木立は江田船山古墳)

田、大字瀬川にわかれ、さらに、それぞれ大久保原、清原(以上大字江田)、および清水原(大字瀬川)の小字に分かれている。また、古墳群の位置を国土地理院発行の5万分の1(昭和47年編集4色刷)図に求めれば、図幅「玉名」の北より約7cm、西より約19cm付近に相当する。

この清原台地上には、当古墳の他、江田船山古墳、虚空蔵塚古墳、塚坊主古墳など数基の古墳があり、この他に石棺(大久保、清水原石棺)もいくつか発見されており、消滅したものも含めると少なくとも5基以上の古墳が築造されていたと考えられる。船山古墳の北西約80mに



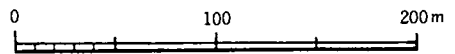
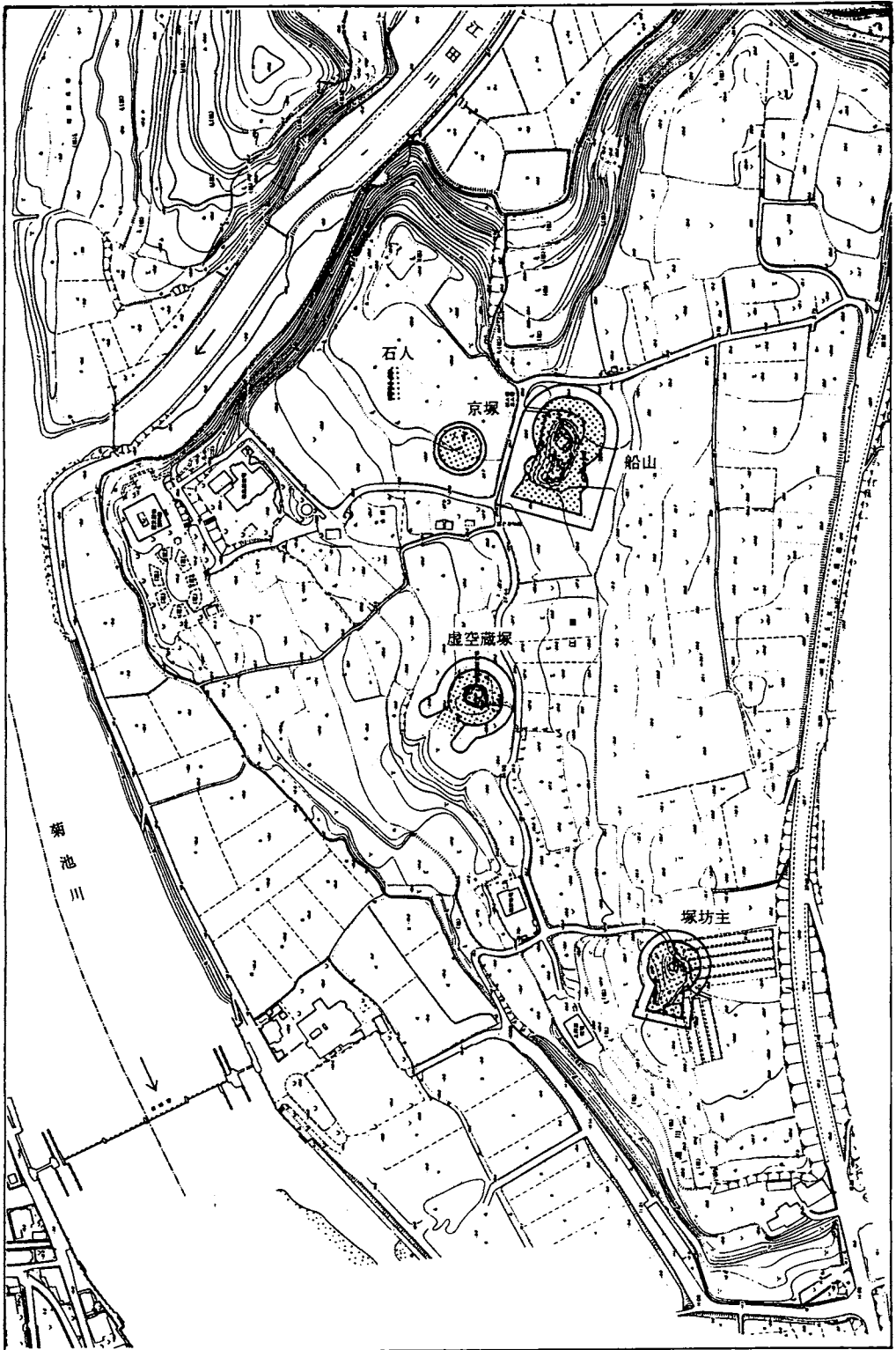
第1図 清原古墳群周辺の遺跡 (古墳時代)

(1/25000)



第1表 清原古墳群周辺の遺跡

	遺 跡 名	所 在 地	種 別	特 記 事 項
1	江田船山古墳	菊水町大字江田字清原	前方後円墳	国 横口式家形石棺
2	京塚古墳	〃	円 墳	舟形石棺 墳丘直径22m
3	虚空蔵塚古墳	〃 〃 清原平	前方後円墳?	国 帆立貝式か 墳長44.5m
4	塚坊主古墳	〃 瀬川 清水原	前方後円墳	国 横穴式石室 墳長44.3m
5	江田穴観音古墳	〃 江田 中小路	円 墳	国 横穴式石室 石室長約9m 墳丘直径17~18m
6	若宮古墳	〃	前方後円墳	国 家形石棺(1基) 残存長約30m
7	姫塚古墳	〃 瀬川 松坂原	円 墳 ?	原形はない 土師片
8	椿山古墳	〃 瀬川 古寺原	円 墳 ?	円墳状をなす 内部主体不明 埴輪片
9	清水原家型石棺	〃 瀬川 清水原	?	家形石棺(1基)
10	大久保舟形石棺	〃 江田 大久保	?	舟形石棺(一基)内部に人骨2 体
11	中原北池の元石棺	〃 瀬川 池元	?	横口式家形石棺(1基)
12	若宮舟形石棺	〃 江田 中小路	?	国 舟形石棺(1基) 若宮古墳 の東裾 竹林の中にある。
13	天神平石棺墓	〃 〃 天神平	?	箱式石棺(1基)
14	土喰箱式石棺群	〃 〃 土喰	?	(箱式石棺2基) 鉄鏃、鉋
15	北原横穴群	〃 瀬川 北原	横 穴	国 8基
16	長力横穴群	〃 〃 長力	横 穴	国 2基、装飾文様連続三角文 と円文の線刻が見られる。
17	鶯原入口横穴群	〃 〃 東長力	横 穴	現存するもの十数基
18	中原帽子下横穴群	〃 〃 北帽子	横 穴	〃 4基 破損
19	寺山小原坂横穴群	〃 江田 小原	横 穴	現存するもの5基
20	牧野横穴群	〃 〃 牧野	横 穴	〃 7基 昔は町内 最大の横穴群であった。
21	寺山宮の東横穴群	〃 〃 寺山	横 穴	完形1基、部分のみも残って いる。
22	いご浦横穴	〃 〃 氏無	横 穴	現在消滅 土師の残欠
23	皆行原狸が浦横穴群	〃 〃 狸ヶ浦	横 穴	現存2基
24	とんご山横穴群	〃 原口 浦谷	横 穴	
25	日置氏イッチョ墓	〃 瀬川 鶯原		古代豪族日置氏の墳墓 火葬墓に伴った銅板墓誌が寛 政6年(1794)2月に発見され る。



第2図 清原台地古墳群

は、石人や石製品も発見されており、福岡県八女の岩戸山古墳の石人石馬との関連を考えると興味深い。

また、台地の北側を流れる江田川対岸の丘陵には、巨大な切石積の複室からなる江田穴観音古墳や若宮古墳があり、さらにその北側の諏訪原・皆行原の台地上には、<sup>すわのはら</sup>諏訪原の遺跡群に弥生集落や甕棺群がある。この他、清原台地の南東の標高60m前後の鶯原台地北東端からは、火葬墓に伴った銅板墓誌が寛政6年2月に発見されている。この銅板には「開白七道西海道太宰府 玉名郡人権擬少領外少初位下日置郡公 又治地高野山」と書かれていたという。この火葬墓の年代は奈良時代後半と考えられ、玉名郡日置郷（現玉名市立願寺一帯）を領した豪族であるとされている。

さらに菊池川を少し下ると玉名平野で、その北側山麓に永安寺東、永安寺西、大坊、石貫穴観音およびナノギの横穴群等の装飾古墳があり、下流域には繁根木古墳、あるいは山下古墳などの重要遺跡も集中している。

江田船山古墳は、明治6年（1873）に発掘された。内部主体は、後円部に設けられた横口式の家形石棺で、内容豊かな副葬品が出土している。主な遺物は、75字の銘文が刻まれている銀象嵌大刀をはじめ、銅鏡、勾玉、管玉、ガラス玉、衝角付冑、短甲、頸鎧、大刀、剣、槍、刀装具、鉄鍬、金銅製冠帽、垂飾付耳飾、金環、金銅製沓、轡、鏡、須恵器などがあり、昭和50年度の調査で周溝内より、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪が出土している。これらの遺物は大陸的な色合いが強いことが大きな特徴である。

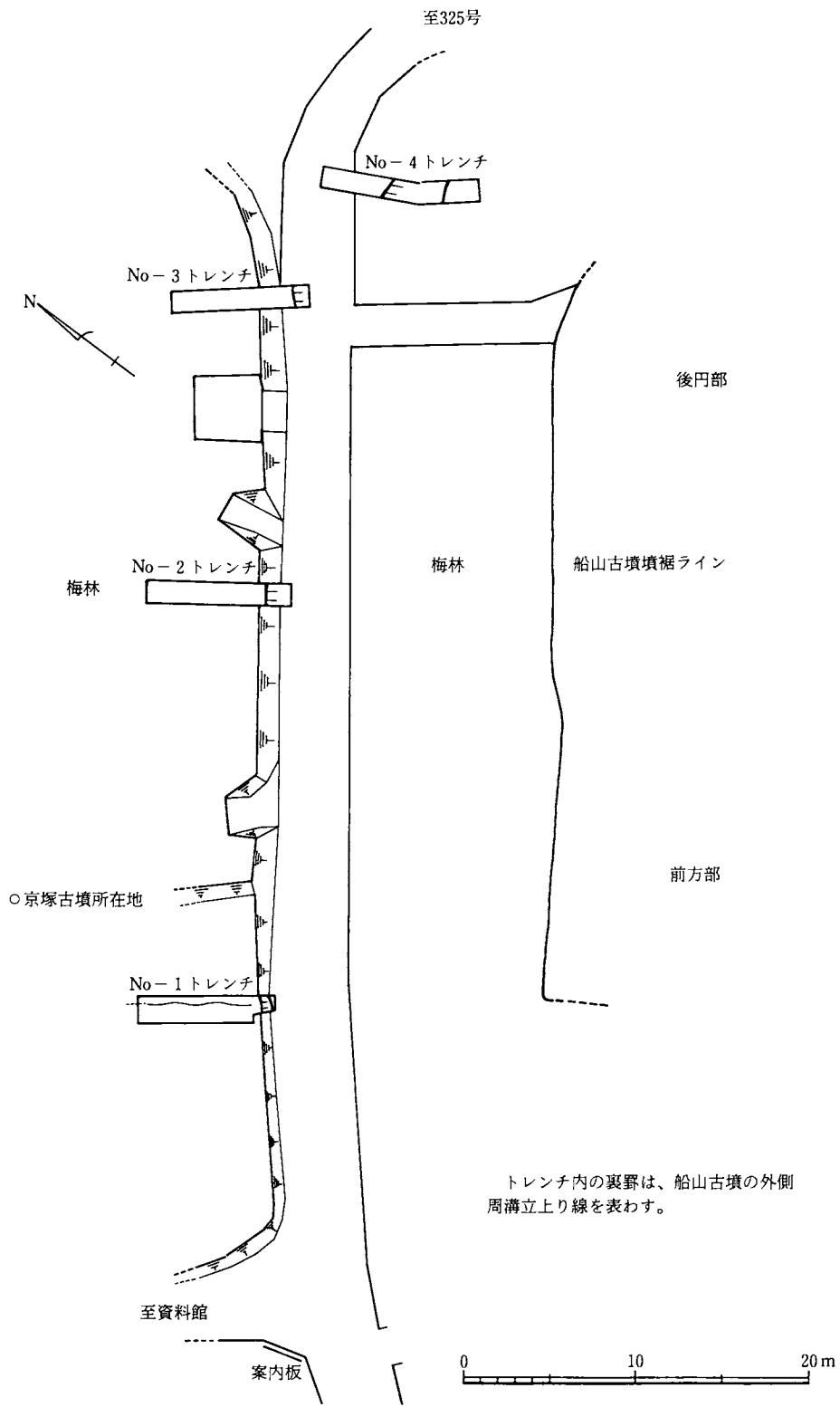
### 3. 地形上から見た京塚古墳と船山古墳

京塚古墳の所在個所の確定ができていない昭和50年頃から、清原台地上に所在する清原古墳群の成立順位を地元では、京塚→船山古墳→塚坊主古墳→虚空蔵塚古墳（註1）とし、その後これは京塚→虚空蔵塚古墳→船山古墳→塚坊主古墳（註2）と訂正されている。これらは内部主体の構造、出土遺物等が年代の決め手となっているが、いずれにせよ京塚古墳を最古に位置づけている点では同じである。

今回の調査で京塚古墳の正確な位置が確認できたので、地形上から見た両古墳の前後関係を考えてみたい。（第4図参照）

両古墳の距離は、船山の周溝外側縁から京塚古墳周溝外側縁まで約13.50mの至近距離にある。至近距離にありながら整然と位置している点、両古墳の成立年代の如何にかかわらず、意識しつつ墳丘が築造されていることを感じる。石人の丘設置以前、船山古墳と京塚古墳の間には、北東方向に伸びる高さ130cm前後の土手が走り、その土手によって両古墳は画されていた。この土手がいかなる意味を持つものであるか、つまり船山古墳の周溝外縁の立上り部を留める





第3図 京塚古墳と船山古墳との位置関係

ものか、緩傾斜を利用した畑地造成時の単なる土手なのか、まったく不明であった。

このため土手に直交して長さ8m、幅1.2mの試掘抗(No-1~No-4)を4か所に設定し、深さ1m前後の地山層(黄色土層)まで掘り下げた。(第3図)

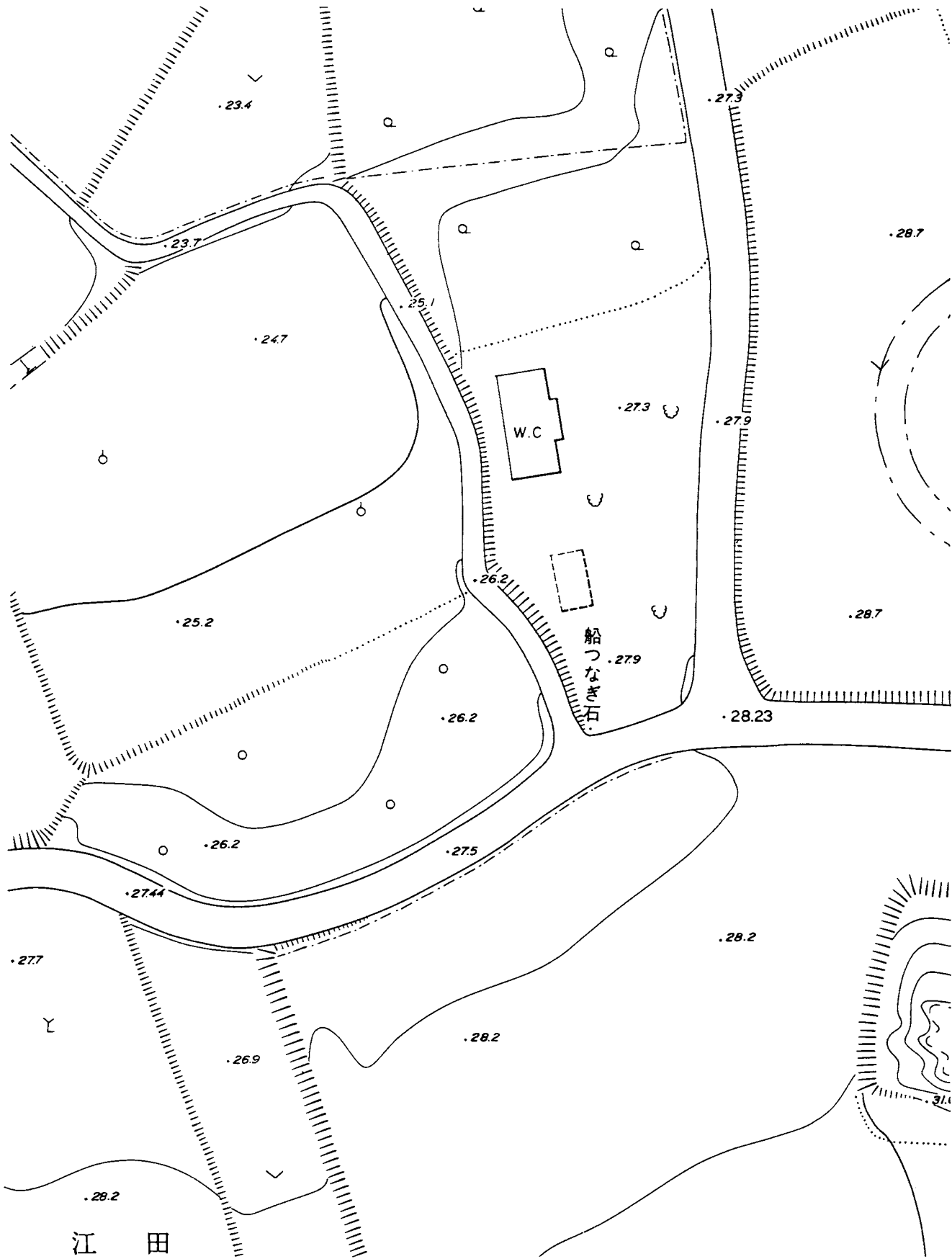
その結果、No-1では地山に掘り込まれた堀り道と、それに伴う瓦質の摺鉢片数点が検出された。No-2、No-3では共に、畑地造成時の盛土のため土手部分近くにおいては、地山上にのる後世の客土が厚く、内に円筒埴輪の小片が若干認められた。No-2トレンチからは完形礪臼の上部と人頭大の石塊4~5個が出土した。いずれにしても中世時に関連した遺構、遺物が若干出土したのみであった。しかし、設定したNo-1からNo-3の試掘抗が土手の線と交る部分では、いずれの試掘抗においても黄色土の地山に掘り込まれた落ちこみが見られた。

この事実から、この一直線に延びる土手の基礎部は、船山古墳の周溝の外縁線であり、近世時の畑地造成時にこの周溝外縁線に沿って、畑地造成時の土手が築かれており、土手即江田船山古墳周溝立上りではないが、その下部では周溝線を留めるものであることが明白となった。この周溝線がどの部分で土手部と分れ、周溝線として後円部円周に沿って回るかを、追跡するため設定したのがNo-4試掘抗である。No-3試掘抗では、やや土手基礎部から離れ、現在の道路部分に喰い込みNo-4試掘抗設定個所では、明らかに後円部に沿って弧を描き始める。

以上の状況から、京塚古墳と船山古墳との切合い関係はなく、時代的にも併行して存続していたことが判かる。地形的に見ると、両古墳とも起伏の多い清原台地のなかでは、北東方向から南西方向に微傾斜する台地の南西末端に位置しているが、船山古墳がこの傾斜をカットし、地貌の変形をきたすほどの大工事によって成立しているのにくらべ、京塚は、簡素な周溝の掘削によって築造されていることなど大なる相異点といえよう。地形上と工事施工の状況から見た前後関係は、京塚古墳の築造後、船山古墳が築造されたと推定される。

(註1)「船山」菊水町教育委員会文化財調査報告書第1集(1976)

(註2)「清原古墳群周隴調査概要」菊水町教育委員会



第4図 整備復元以



## 第2章 調査の内容

### 1. 遺 構

#### [1] 古墳の内部主体

京塚古墳の内部主体は、舟形石棺であったと推定される(第5図参照)。昭和60年の風土記の丘整備事業施工以前は、墓地となっていた樁の根元に、縄掛突起のついた舟形石棺の石材が放置されていた。しかしこの場所に移転されたのは戦後の事で、それ以前は現京塚古墳の墳丘中央部付近(第6図)にあったと伝える。

旧地主の話によると、当時350番地と355-1番地の境の畦部に茶樹が数株あり、その横に凝灰岩よりなる、石棺の石材が積まれてあったという。現在は、石棺身部の一部と他一点しか見当たらないが、当時は石材点数も多かったとのことである。その所在場所からすると、この舟形石棺が京塚古墳の内部主体であったことは明らかで、江戸時代の開墾時に出土し破却されたものと思われる。周辺の畑地内には、埴輪片に混って凝灰岩の面取りをした切石片が見られるが、これらは石棺材の破片であろう。当然墳丘内の内部主体は、この舟形石棺一基のみでなく数基の石棺が埋納されていたようで、周辺からも数点の縄掛突起部が出土している。

現在残る舟形石棺は、縄掛突起を持つ棺身の一部と他石材の2点のみである(第5図)。石材は軟質の凝灰岩であり、樹木の下に放置されたり、今回の工事で移動したりで20年前に比べると損傷が激しい。昭和42年3月25日「船山石人調査」の時の、隈昭志氏図面による石棺の法量は、以下のとおりである。

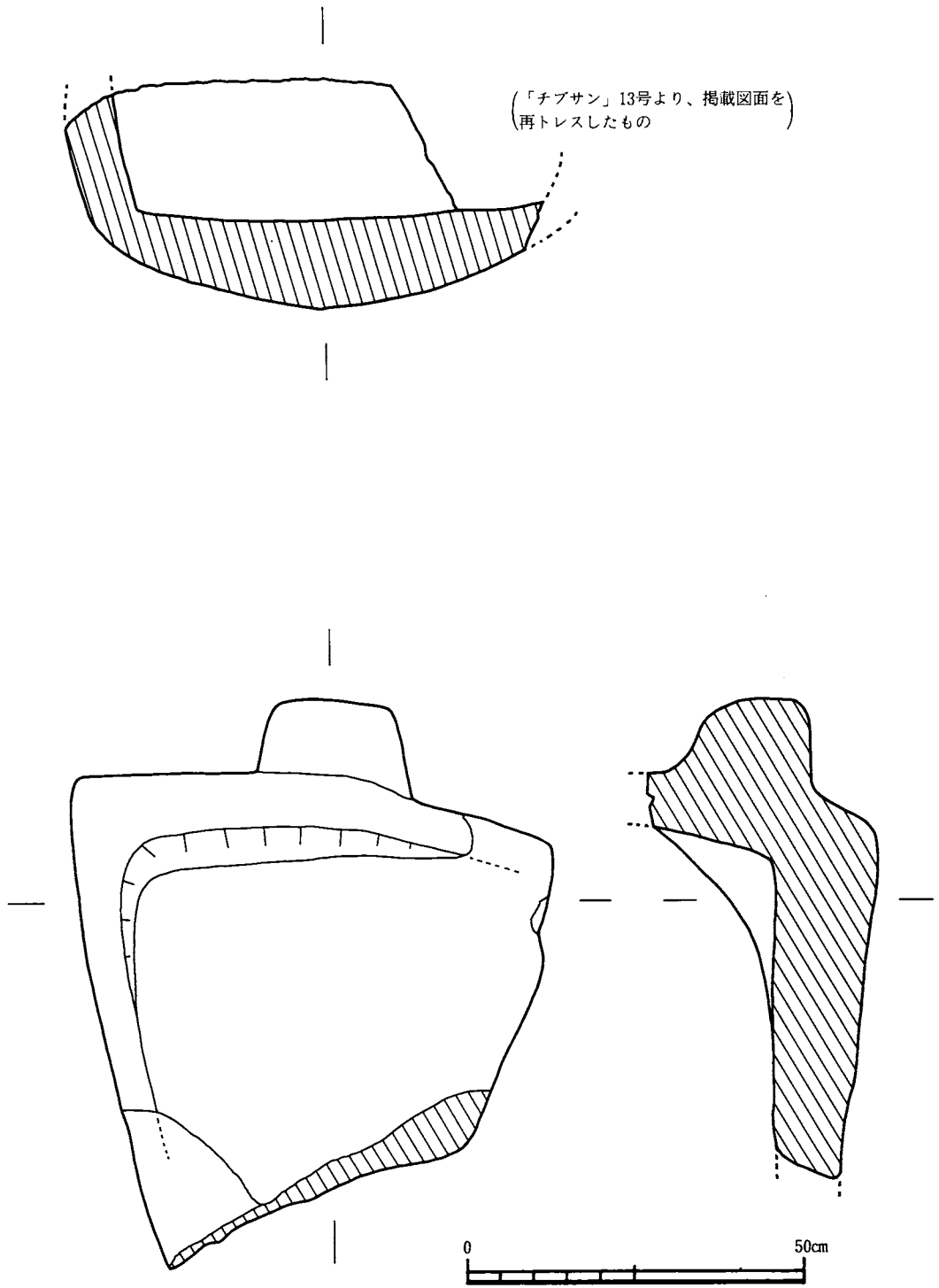
主軸方向で縄掛突起突端から破損部分まで約73cm、縄掛突起根部における横幅が約73cmである。この部分は、若干の破損が見られるものの製作時の棺の横幅の数値に近いものであろう。縄掛突起の長さは約13cm、同横幅が約20cmで、装飾・象徴的なものとなっている。全体的に風化が激しく、朱が施されていたか否かは不明である。

#### [2] 周 溝

京塚古墳周溝は、350番地と355-1番地から発見された(第6図)。当該個所は船山古墳前方面右手一帯で、近世時に削平を受け畑地となっており麦畑として使用されていた。350番地と355-1の境は約1.90m前後の土手が北西方向に走り、段落ちとなっているが、周溝はこの段落ちをまたいだ状態で設けられていた。このため、上段の355-1の畑地と下段の350番地の畑地とでは、近世時の削平状態も異なり、周溝の幅および深さ等に異なりが生じ、周溝も正円とはなり得ないが、現況での周溝の法量は以下の如くである。

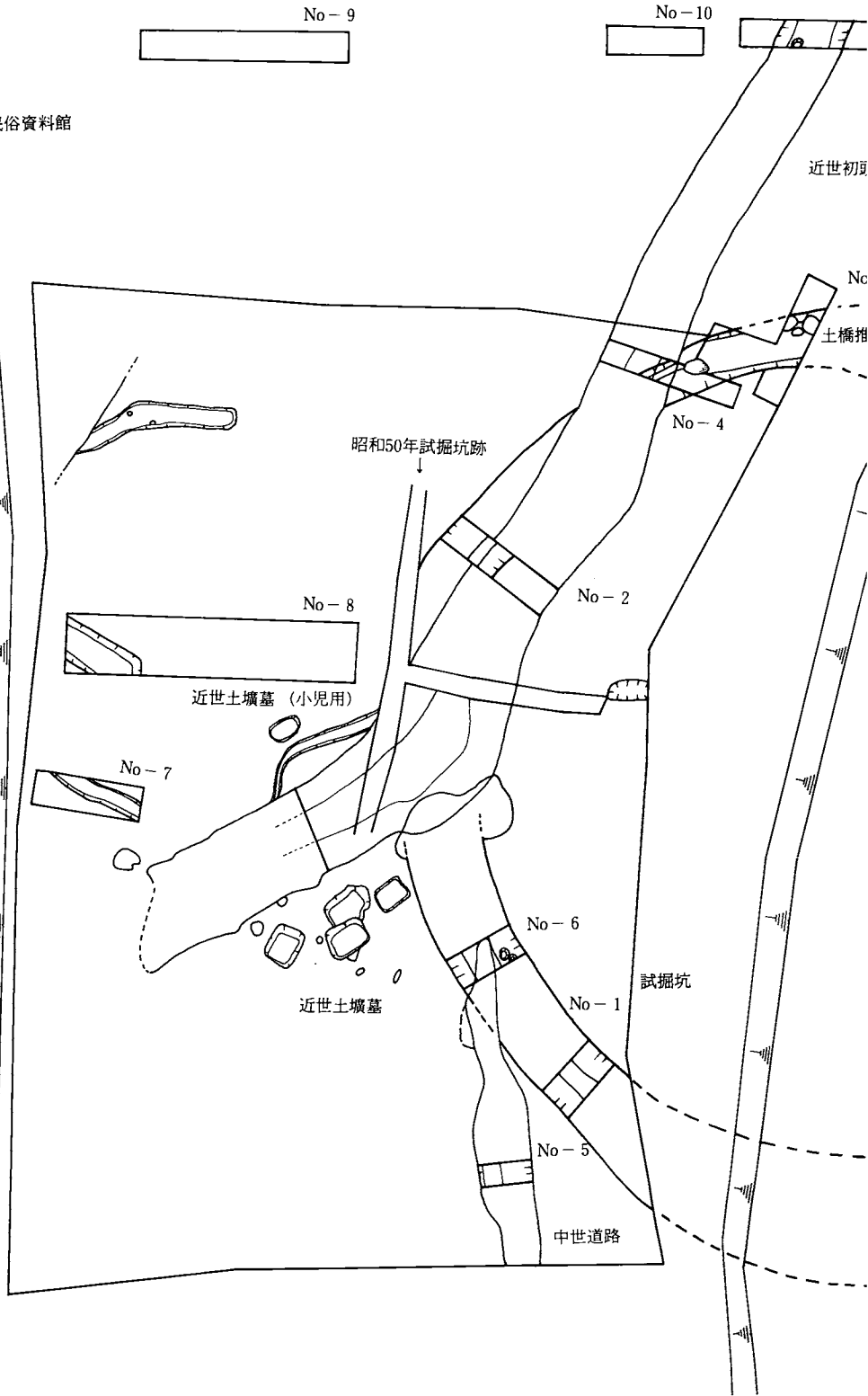
周溝直径は南北22.30m、東西21.40m、周溝幅は3m(最大3.70m、最小2.10m)前後、深さ





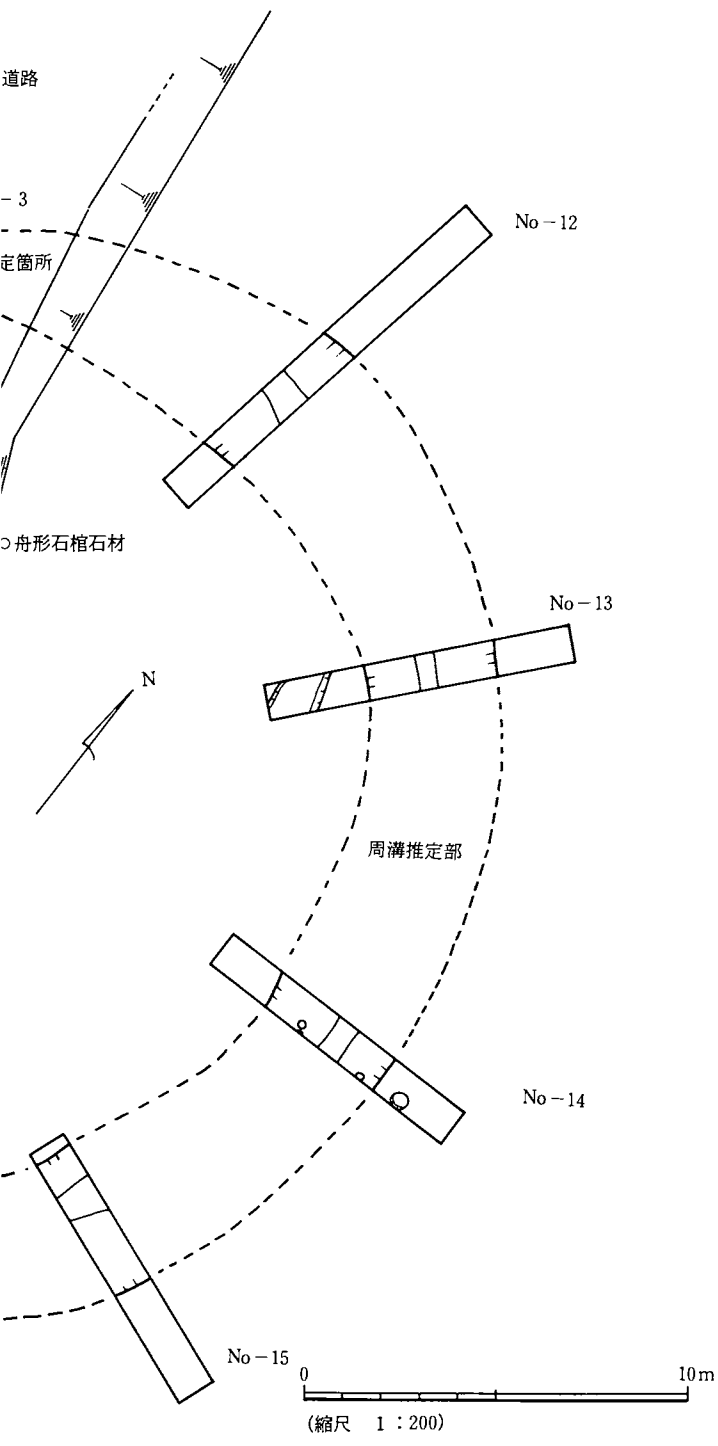
第5図 京塚古墳出土舟形石棺棺材実測図

至・菊水町歴史民俗資料館



第6図 京塚古墳所在推定地の試掘坑跡

No-11



墓坑設定状況

は上段畑で現表土下 2 m を数える。

周溝断面は、逆台形状に近く、底部には幅50cm程の平坦面がある。地山掘り込みでも1.50m、下段畑では削平が激しく現表土より50cm、地山掘り込みが20～30cm程度で、かろうじて周溝の底部近くが残存しているといった状況であった。直径は東西と南北とでは50cmの差があるが、元来は同数値で、かなり正確な設計により築造されたものと思われる。

これらの数値から、当古墳は直径22m、墳裾に掘られた幅 3 m の周溝も含めると、直径28mの規模を持つ古墳であったことが判る。

周溝内部からは、葺石に使ったと思われる人頭大の花崗岩の割石、円筒埴輪片、須恵器片、土師甕片等が出土した。

### [ 3 ] 墳丘について

周溝所在部分は畑地造成されているため、墳丘の高さ、形状等については不明であるが、350番地と355-1番地境の土手の段差は、かつての墳丘を均した際の名残りとも見える。また周溝南の畑の表土のなかにも円筒埴輪小片が混っているので、墳丘の土を均したものであろう。

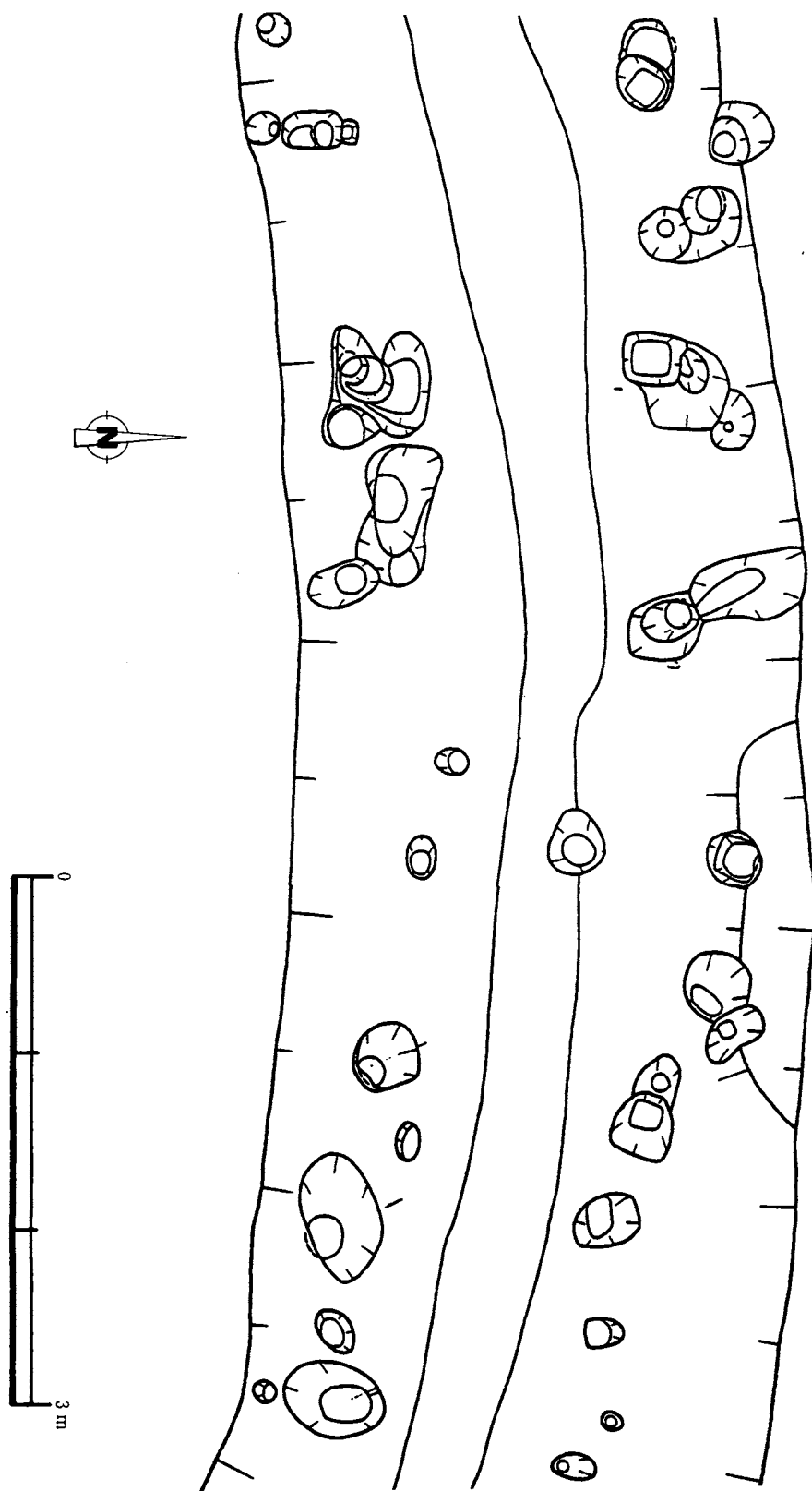
周溝直径が22mほどで、内部主体が舟形石棺であった可能性が強いことなどから、高さ5～6 m程度の截頭形の円墳であつたろうことが推定される。また墳丘には葺石が施され、円筒埴輪が立て巡らされていたことが、周溝内に転落した円筒埴輪からも推定できる。落ち込んだ葺石の量は少ないので、墳丘全般に施された量も少なかったのであろう。

### [ 4 ] 周溝通路（土橋）部遺構

周溝北西部から、墳丘入口部と考えられる遺構が検出され、この部分に、野面積により土手部を固めた通路が設けられていたことが判明した。石材は、清原台地北西部一帯に見られる、直径50cm前後の花崗岩塊である。これを2～3段に積み上げ入口部を形成していたようである。排土中のブルの爪により若干原位置がずれたため、数値は正確ではないが、長さが3.0m、幅2.50 m前後、周溝底部よりの高さが約 2 m前後であったことが推定される。なお、墳丘に向って右手の周溝底より、土師の壺が原位置を保った状態で出土した。復元された京塚古墳の墳丘入口部分が、土橋所在場所に当る。

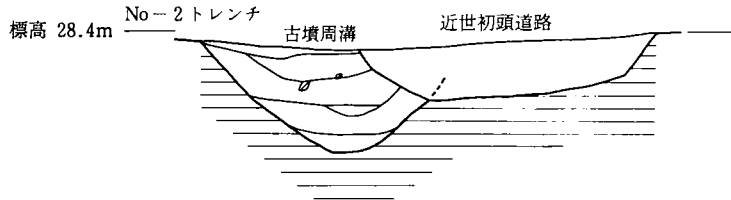
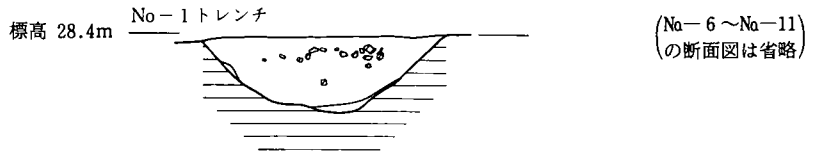
### [ 5 ] 周溝部に残る柱穴

古墳の北北東および北東方向の周溝内外斜面から、大形の柱穴群（第7図）が発見された。柱穴群は、古墳の北北東から北東部一帯の周溝の内外斜面に集中しており、これら柱穴の直径は南北で40～50cm、深さも50cm以上に達する大形のものばかりである。殆んど柱穴が正方形を成しており、住居跡等に見られる円形の柱穴と比べ特異である。また、周溝の内外斜面の双方

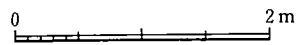
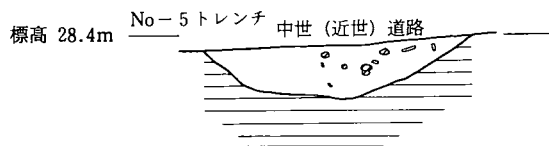
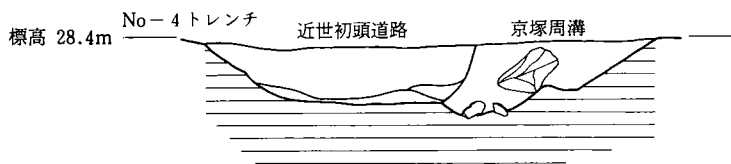
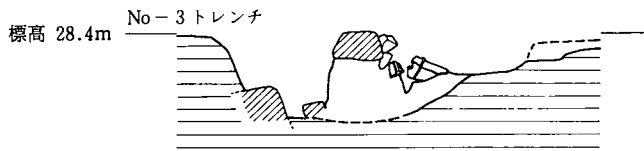
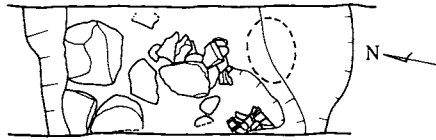


第7図 周溝北側に残る柱穴群

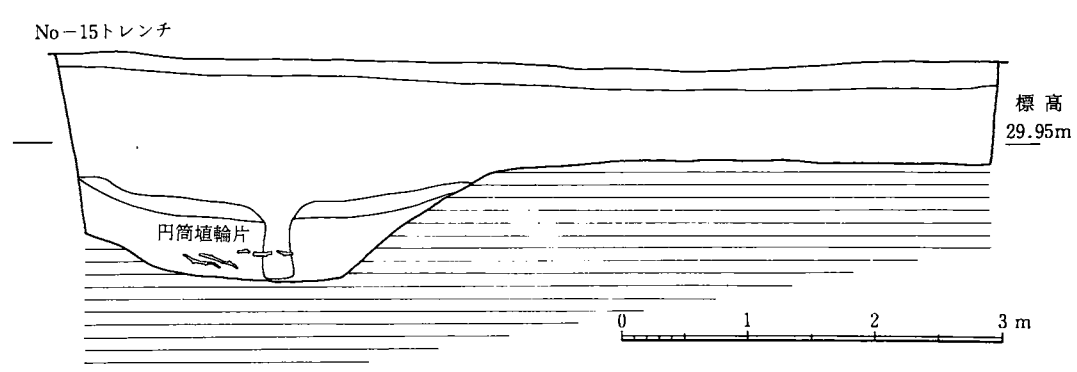
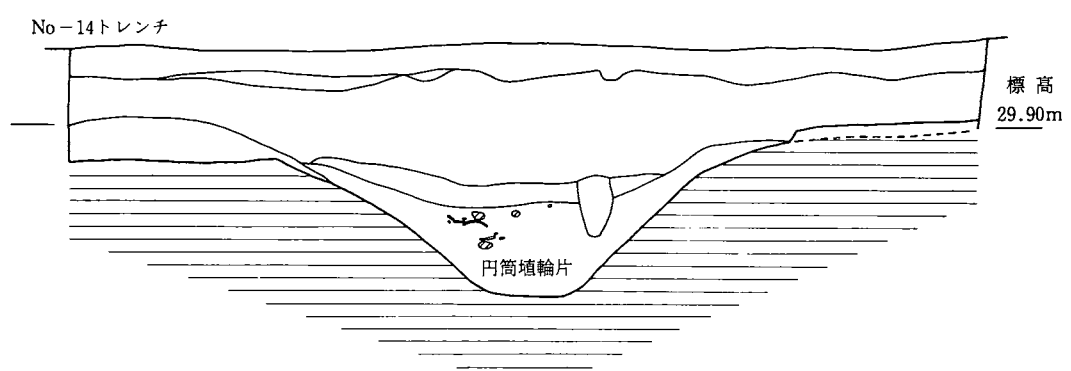
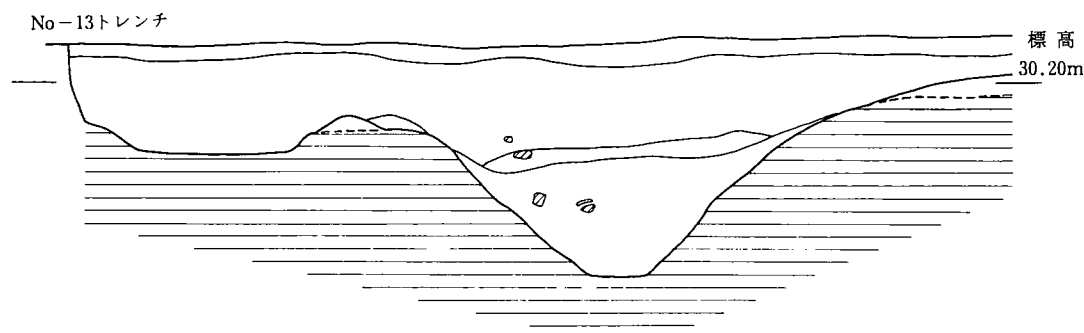
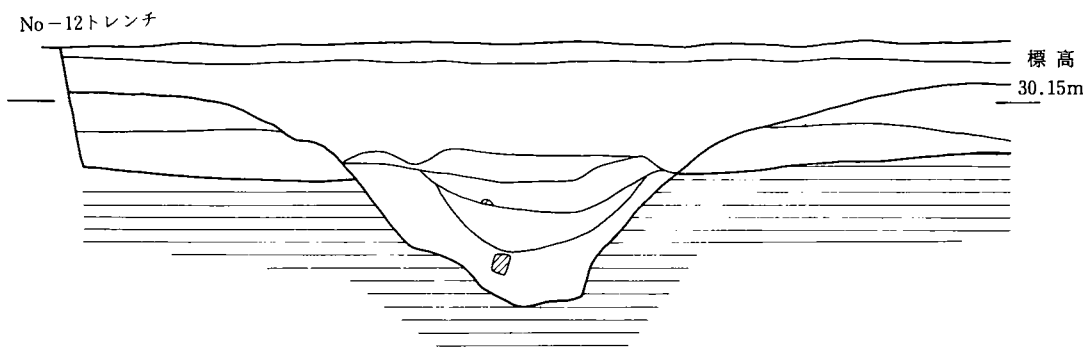




No-3 (平面図)



第8図 試掘時の周溝断面図 (No.1 ~ 5)



第9図 試掘時の周溝断面図 (No.12~15)

に相対して掘られている点も注目すべきであろう。古墳周溝部斜面に残る柱穴の事例は少ないが、その設置目的については、従来、(1)周溝掘削の際、排土のために設けた三脚の丸太受けの跡、(2)作業時の昇降用に設けられた足がかり、(3)古墳の外周溝縁に設けられた柵用の杭跡、(4)その他が推定されている。

今度発見された柱穴が、後世のものでなく築造時期のものという前提に立つと、(1)であればあまりに規模が大きく深すぎるし、(2)の足がかりでも到底あり得ない。まして(3)の杭跡であれば小さく浅くてもいいし、穴と穴との間隔に規則性があってもいいことになる。当、京塚古墳の場合、北側一帯の周溝外縁に、約2 m 間隔の杭跡と推定される規則正しい小穴が確認されており、その可能性も考えられない。また、内部主体である舟形石棺搬入のための、足場といった可能性もあるが、周溝の南西部に設けられた土橋を使えば、その必要もない。残るのは(4)のその他ということになる。これら大形柱穴群と共に注目されるのは、この周溝内から出土した3個体分の鈴付きの高坏である。須恵器の高坏は、腰の部分に3個の鈴を持つもので、管見では本邦初出土であったと思う。鈴は鎮魂の道具で神事に使用されたもので、現在も神楽に用いられることは周知のとおりである。神楽の鈴が12個、もしくは奇数の7・5・3の三段から構成されていることも、奇数である3個の鈴の伝統を残すものであろうか。これら3個の鈴付の高坏は、船山古墳出土の金属製の環鈴（3個の鈴付き）とも関連を持つものと思われる。

周溝の北東一帯に残された四角形の深い柱穴群と、鈴付きの高坏3個体やその他の子持壺の須恵器等から、我々は今、この場所に墓前における儀式的に行われた何らかの建造物の存在を想定せずにはおられない。

これら相対する柱穴群のなかから、重なり合った縦約3～4 m、横約1.5m～2 mの簡略な構造を持つ建造物のプラン(第10図)が確認できるのである。3 m×1.5mの、面積にすれば約4.5 m<sup>2</sup>程の、しかも古墳の周溝を跨いで建てられた建造物は、いかなる性格と用途を持つものであったろうか。今ここで推定される具体的な用途として、喪屋、墓前祭の祭壇（年忌祭）等の建造物が考えられよう。少なくとも、深さ2 m前後の周溝の上に跨がる、細長い4.5m<sup>2</sup>ほどの建造物が、家屋として使用されたとは考え難いからである。

## [6] 送葬儀礼と遺構

殯宮、喪屋等の殯行事関連名称が、数多く見られるのは、日本書紀においてである。天孫降臨の項で、喪屋が1件3か所。天孫降臨から持統まで、喪葬、喪禮、弔喪便、喪儀、喪服等の語句が24件。四神出生から天武まで、殯(般)、殯庭など21件。允恭から持統まで、殯宮、殯宮大夫など18件が見える。古代において殯行事関連の名称が数多く見られるということは、朝廷をはじめとする多くの有力豪族の間で、広く行われた儀式であったことを物語っている。また、巻25、孝徳天皇の項（大化2年丙午）の、大化の薄葬令の「凡王以下及至庶民不得營殯」の項

目に見られる如く、身分を問わず世間一般にも布く行われた儀式であったことが判る。この大化の薄葬令（殯禁止令）の発布において、殯行事は一応の終息を見るに到り、殯に伴う呪術は形骸化していく。

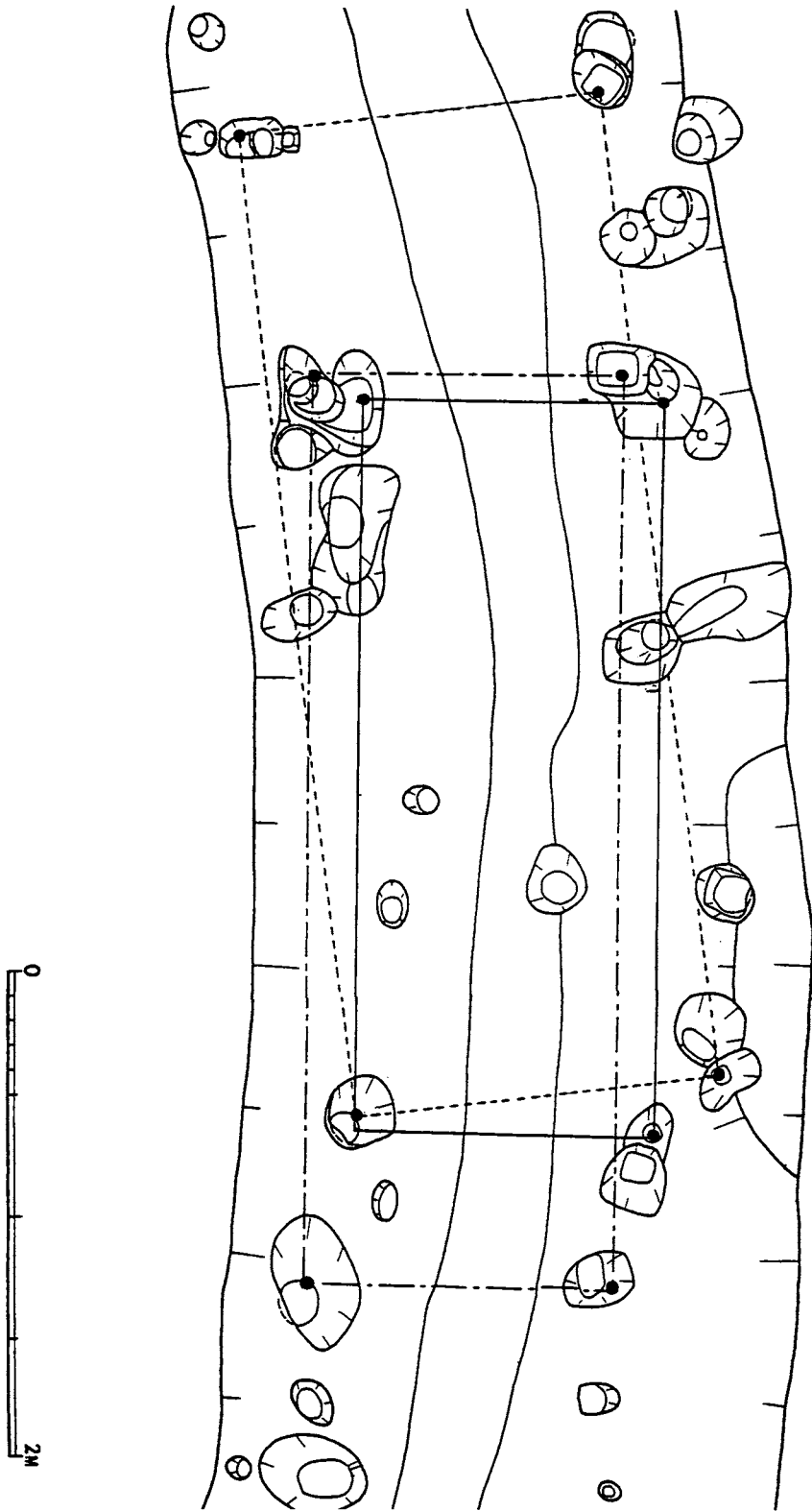
殯行事は、古くは中国の古文献にも見られるというが、民俗学上から見た喪屋等名称の遺制は全国的かつ広範囲に分布しており、名称もモンガリ（奈良）、モガリ（茨城）等よく知られる所で、殆んど同一の名称として残る。

また、現在の我々の日常生活の上においても、本葬前（葬式前）の通夜、忌服、夜伽等にその名残を見ることが出来る。当時の具体的殯行事としては、当事者の死後、近親者は死者のため喪屋を作り、中に柩を安置し、食膳を供し歌舞飲食を行うわけであるが、これら一連の行為は、死者復霊への期待から行われるものである。現在県内にも<sup>たまよばい</sup>風習が残る所があるが、これらの名残であろう（註1）。ところが、このように殯が、古代の文献上に頻繁に現われ、現在の日常生活の中にも名残りを留めているにもかかわらず、現在まで殯に関する遺構は殆んど検出されていない。

現在、古墳等の古代の墳墓の発掘件数は、全国で年間相当数に及ぶが、古墳の周囲その他より、殯宮、喪屋の遺構を確認したという情報は殆んど聞かない。大化の薄葬令で、「凡王以下及至庶民不得營殯」という禁止令まで出さねばならない程、身分を問わず布く行われた儀礼であったにもかかわらず、その遺構が考古学的に把握できないのは、如何なる理由によるものだろうか。

恐らく、研究者自身が書紀に見られる天皇家の殯宮の巨大な遺構の存在を意識しすぎているのではあるまいか。禁止令を出さねばならない程、全国的、普遍的に行われていた儀礼であったとすれば、地方の末端の小豪族や庶民の埋葬に到るまで殯が行われ、多数の小形で粗末な仮小屋（喪屋）等も築造されたに違いない。それらは、我々が想定している以上に小さく粗末なものだったのではなからうか。

これらの喪屋の規模については、日本書紀巻2、神代下天孫降臨の項に、天<sup>あめのわかひこ</sup>稚彦の死を知った友人の味耜高彦根神が、<sup>あじすきたかひこねのかみ</sup>弔問に訪れた時、死者と容貌が似ていたため、近親者に死者の蘇生（註2）と間違われ、怒って乱暴をするくだりがある。怒ったその男は「則拔其帶劔大葉刈。以研仆喪屋。」といった行為に及ぶ。つまり帯びていた劔でもって切りつけ打ち払い、喪屋をなぎ倒したというのである。この行為から推測すると、喪屋というのは、ごく小さく粗末な仮小屋であったことになる。天皇の殯宮ならいざ知らず、急死した場合緊急に大々的建造物を築造することは困難であろう。応急的に設けられた喪屋に柩を置き、食膳を供し、歌舞飲食を行うわけであるが、これらの一連の儀式が、天皇家の殯宮と称される巨大な建物ならともかく、地方の小豪族、一般庶民の狭い家屋もしくは堅穴住居の内で遺体を安置し、歌舞飲食が行えるものであろうか。やはり本葬地近くの屋外の野辺に、草葺の簡素な仮小屋つまり喪屋を建て、本



第10図 建物プランの復元例



葬前の遺体の仮安置場所としたのではなかろうか。従って、屋根も草葺、周囲の壁も簾状のものか、草を竹で押さえた程度のものであったのであろう(註3)。このように考えると、今後古墳等の発掘調査時には、内部主体・墳丘のみならず周溝及びその周囲の周庭部や小平坦地等見られる柱穴等にも十分注意を向けるべきであろう。

今後、このような全国の事例の積み重ねが、殯行事、殯宮、喪屋の普遍的概念を形成させ、実体の把握に連なるものとする。

さて古墳が本葬の場とすると、喪屋は、復霊を期待しての遺体の仮安置場所である。卷一神代上(四神出生)に見える「一書曰、伊弉諾尊欲見其妹。乃到殯殿之處。是時伊弉冊尊猶如生平出迎共語」は、將に遺体の仮安置場所である喪屋の状況を描写したものであり、それに続く伊弉冊命の腐れ爛れた死体の場面は、本葬後の横穴式石室内部の状況を描写したものと見ていいと思う。また、古墳の築造は「死者の本葬の場であると同時に、支配権の次期継承者が、自己の支配権の正しき継承を、普く人々に知らせるための儀式の場である」とする学説が説えられて久しいが、もしそうであれば、当柱穴遺構がそれら儀式を行う祭壇、または、周辺から追葬時の祭事の際の遺構(註4)である可能性も考えられよう。いずれにしても当周溝部に設けられた柱穴群が、当古墳の儀式に関連する遺構であることは疑いない事実であろう。

(註1) 死者があると、屋根に登って大声でその名を呼ぶ風習が一般的ようであるが、県内の場合、臨終の者の耳元でその名を呼ぶ場合が多い。

(註2) 死者に対する復霊への期待が窺える。

(註3) 戦前位までは、土葬した上部の土饅頭の上に板で作った宮殿状の小屋形を置いたが、これらは中世時の<sup>なまき</sup>靈屋の名残りであろうし、元来は、喪屋にその起源を持つものと思われる。

## [7] その他の遺構(中・近世)

### (ア) 道路遺構

京塚古墳調査区から、ほぼ南北に走る道路跡が発見された(第11図参照)。この道路は、調査区のN-23°-E方向にむかって掘り込みが始まり、12m進んだ所で京塚古墳の墳丘にさえぎられ、N-5°-W方向に進路を変え、同古墳周溝に重なり合いながら弧を描き北方へ抜ける道である。この道路跡は、昭和51年町が発行した報告書「船山」には、古墳の周溝の可能性ありと記載され、現京塚の南側に円墳の所在を想定している。

道路の掘り込みは、現民舞館方向に到る北側の道路際より5.10mの所から始まる。道路幅は2.75m、北に向うほど地形の緩傾斜に従って道路の掘り込みは深くなり、古墳周溝部付近では、当時の表土より72cmの掘り道となっている。道路底の路面幅は1.30m前後で踏み固められている。現在確認された道路総長は34m程で、その末端は北方へと続いている。京塚古墳北側の微

高地一帯には、近世時民家4～5戸が存在したらしく、日用雑器類や、凝灰岩の切石による石垣等が、石人の丘設置整地工事中に発見されているが、この小集落へ到る道路だったようである。南は昭和50年町業実施した京塚古墳の周辺調査時、北に向う道路跡がSM04-03の試掘坑上で発見されており、今回発見の道路と連なるものと思われる。(関連文献抄参照)

道路底より、近世陶磁器片数点が検出されているので、中世から近世中頃まで清原台地を南から北へ抜ける道路が、現在の道路とは別に存在したことは明白である。また、船山古墳前方部方向より幅約1.60m、深さ0.22mほどの掘り道が、北西方向に延びているが、これも周溝部で当道路と合したものであろう。現存部分は9.65m、路面より中世時の遺物が出土している。これらの道路が消滅したのは、清原台地の大开墾が行われた寛延年間(1748～51)のことと思われる。

#### (イ) 土 壙 墓

道路が周溝と交わる手前に、道を挟んで北に向って左側に1基、右側に4基計5基の土壙墓が発見された(第11図)。道路と土壙墓が切り合ひなく存在している点、墓は意識して道傍に設けられたものであろう。各土壙の詳細は以下のとおりである。

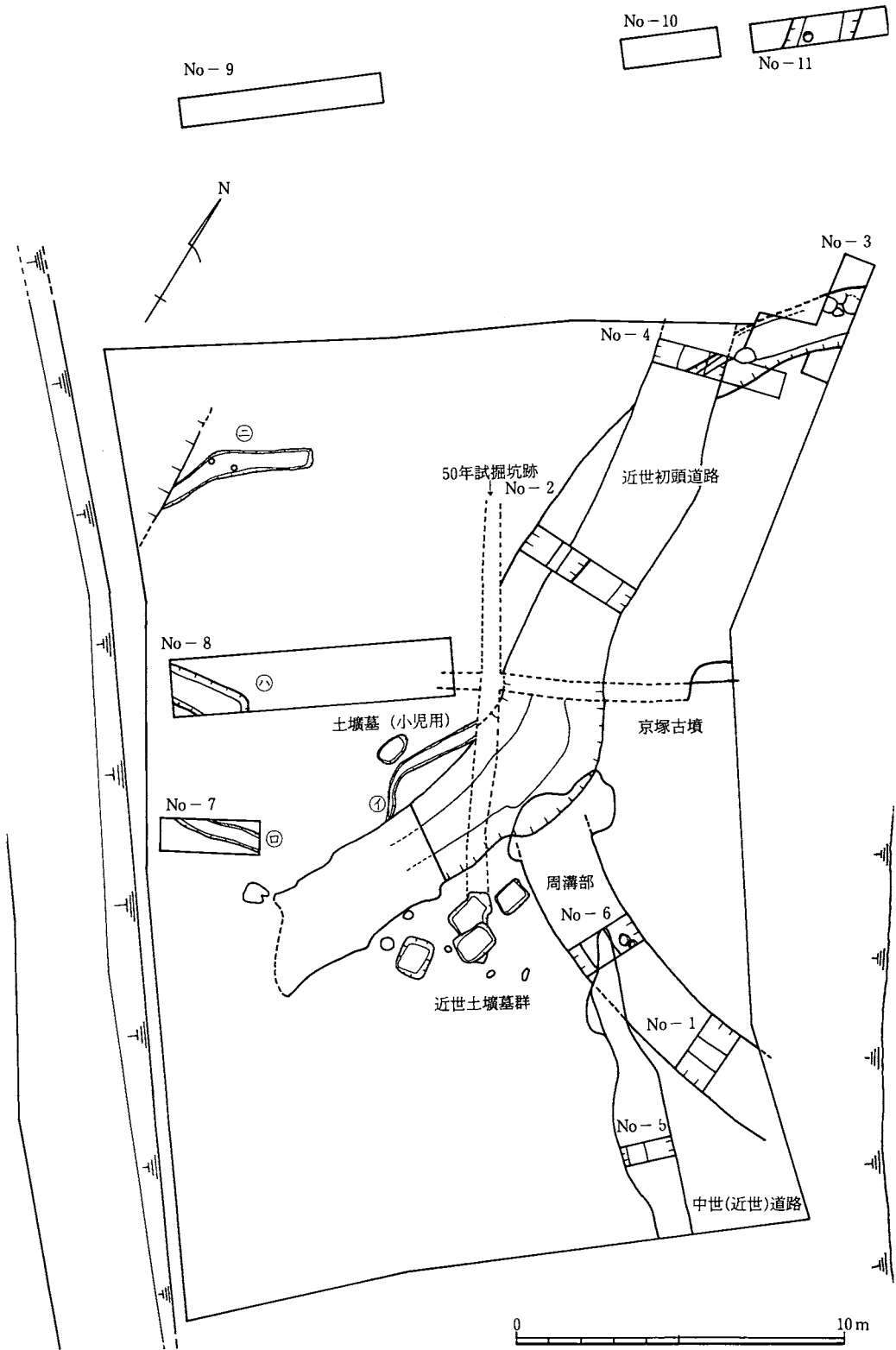
第2表 土壙墓の規模

番号	形 状	長 軸	短 軸	長軸方向	深 さ	出土遺物	備 考
1号	楕円形	100cm	60cm	N-23°-E	45	なし	頭部南・小児用か
2号	長方形	95cm	70cm	N-16°-E	19	なし	人骨消滅
3号	〃	120cm	90cm	N-12°-E	29	なし	〃
4号	〃	123cm	90cm	N-24°-E	66	なし	〃
5号	〃	117cm	95cm	N-6°-W	79	陶器片	〃

なお、土壙墓の深さは、上面が畑地造成等によって削平されているため、現在残る土壙の深さである。殆んどが120cm×90cm前後の長方形の土壙墓であり、埋葬姿勢は側臥屈葬であったと推定されるが、人骨は腐蝕しており確認はできなかった。副葬品等は認められなかったが、5号土壙排土内より江戸初期の陶器片等が出土した。また、5号墓の土壙上部には人頭大の割石が積まれていたようで、土壙内にその落込みが見られた。このため、土壙墓の上部遺構は、石塔などを持たない、積み石または土饅頭に木製墓標を立てた程度のものであったろう。築造年代は出土陶器片等から江戸中期頃と推定される。

#### (ウ) 溝および落込み

道路遺構周辺には4つの溝状遺構(㊶～㊸)と9つの落込み(A～I)が発見された(第11



第11図 道路遺構と土墳墓

図)。溝状遺構は長さ、大きさ共大小様々であるが、長さ等は上部が削平によりカットされているため、本来の長さは掴めない(第11図)。ただ溝であるため、ほぼ4溝とも東西方向、つまり地形の傾斜方向に掘られている点は共通している。①の溝は小児用土壇墓の東側をくの字状に通っており、墓所の排水を考慮して設けられているものであろうが、他の㊸～㊾の設置目的は不明である。9つの落込みも、土壇墓に接しており墓との関連が考えられるが、他は不明のものが多い。溝内や落込みには、円筒埴輪の破片や中・近世時の遺物が紛れ込んでおり、近世時のものであることは明らかである。

## (二) 井戸跡

京塚古墳の南周溝部の底部より井戸跡が発見された。井桁等の井戸囲施設は認められない素掘りの井戸で、直径が80cm、井戸壁面に見られる層序は表土近くは黄色粘土層で、下部は殆んどが花崗岩が風化した砂層が縞状に続いている。

井戸の径が小さいため、スコップが自由に使えず排土に難渋した。約4.5mまで排土したが、砂を主体とする土砂で崩れやすく危険であるため作業を中止した。

井戸の上部に井戸囲いや排水溝などの施設が見られないことや、周辺に遺物等が全く見られないこと、また台地上で菊池川水面からの高さに程遠く、表土下4.50mの深さでも殆んど井戸壁面に水分が認められない点等から、井戸として使用された可能性は薄い。恐らく近世時の清原台地の開発時に野井戸として掘削を開始したものの、水脈に達し得ず中断放棄されたものであろう。井戸の掘削個所が古墳の周溝内部にあることや、周溝内に堆積した土砂より掘り始められている点などから、古墳築造後のものであることは明らかである。

## 2. 出土遺物

### [1] 遺物の概略

京塚の古墳跡地から出土した遺物には、須恵器、土師器、埴輪、玉類等がある。また古墳築造以前の遺物としては、縄文時代の石器、土器、弥生時代の土器、築造後の遺物に、中世時の瓦質土器、土師質土器、輸入陶磁器の破片等がある。

須恵器、土師器は周溝内から、埴輪は畑地の耕作土にも小破片が混っていたが、大破片は殆んどが周溝内から出土したものである。玉は排土中から偶然発見された。

須恵器は内部主体に伴ったものが周溝内に落ちこんだものか、本来供献用として周溝内に配置されたものかは不明である。土師の甕は、西側に設けられた土橋右側周溝内より発見された。埴輪は、大半が周溝内から出土したが、殆んどが墳丘上から転り込み、横倒しとなったといった状況で出土した。大破片が主で、円筒状を保っているものも多く、それらの筒内には、小礫が詰められていた。墳丘上に配列した際、安定を求めて詰めたものであろう。

江田船山古墳や、当古墳をはじめとする清原古墳群が所在する清原台地は、清原遺跡として登録される縄文後晩期の遺跡でもある。従って、縄文土器小片が所在地からも10数点出土したが、粗製土器の小片が多い。弥生土器片も同様、若干の出土を見る。中世時には、京塚古墳周辺に中世の小集落が所在した様で、瓦質土器をはじめ外来陶磁器片等の日用雑器や、碾白片の出土を見る。また、京塚南側から発見された近世初頭の墓墳のなかからは、埋土に混って近世陶器片が出土している。

いずれにしても畑地造成の削平により、過去に墳丘が消失している古墳であり、遺物は周溝内に落ち込んでいたものが偶然に残った状況で、その点数は少ない。

## [2] 須 恵 器

須恵器の場合も殆んど破片で出土した。これらの破片を分類接着した結果、現在確認され得る器種と点数は以下のとおりである。

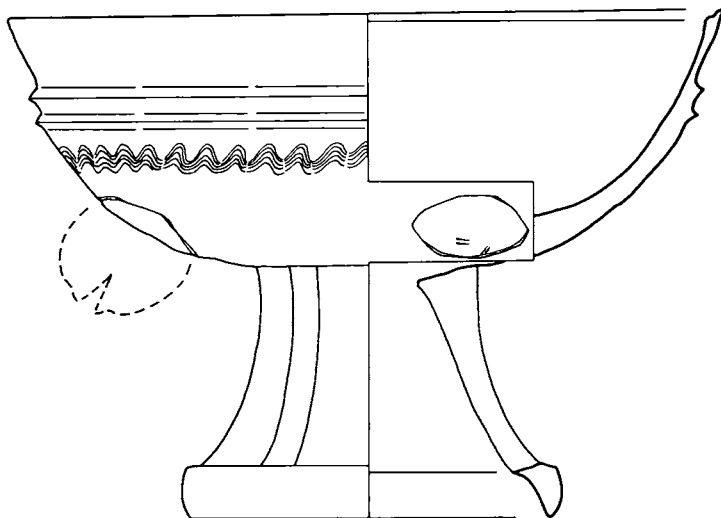
### (ア) 鈴付高坏(I)

脚部の大部分を失っているが、口縁部から脚部末端まで揃っているため、器高、口径等を知ることができる(第12図 No-1)。器高は13.2cmで、内坏部が12.3cm、脚部が6.4cm、口径は18.7cmである。坏部は内弯するゆるやかな弧を描きながら立ち上り、腹部を走る2条の細い突帯を過ぎた所からやや外反し、口縁部を形成する。口唇部は、外唇部より1段低い内唇部を設け段差をつくり、口唇部の飾りと強化を図っている。坏外面には以下の装飾が見られる。まず、坏部外面の装飾としては、腰部に3個の鈴が取り付けられていたらしく、欠落の跡が3か所に残

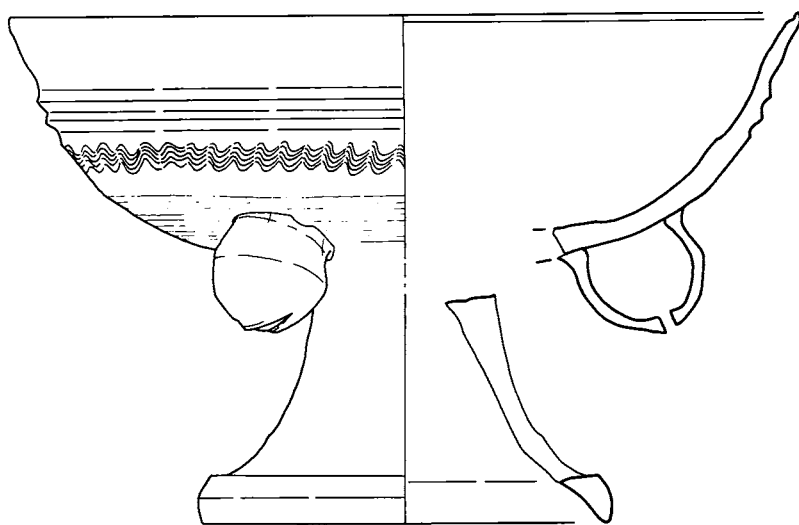
### 須恵器

器種・器形	点数	寸法・法量			現 状	備 考
		高さ	口径			
鈴付高坏(I)	1点	13.2cm	18.7cm		3個の鈴欠落、脚部の一部欠損	
鈴付高坏(II)	1点	13.3cm	20.8cm		坏部の一部と一個の鈴残存	
子持ち壺	1点				現在は全体の1/3弱	
甗	1点				頸部を欠く	
中形甗	1点				破片27点接着で現在9点となる	
壺	1点				破片1点残存	
高坏(I)	1点				坏部分のみ 脚部欠損	
高坏(II)	1点				坏部脚部破片数点	
高坏(III)	1点				〃	

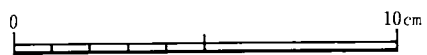
No-1



No-2

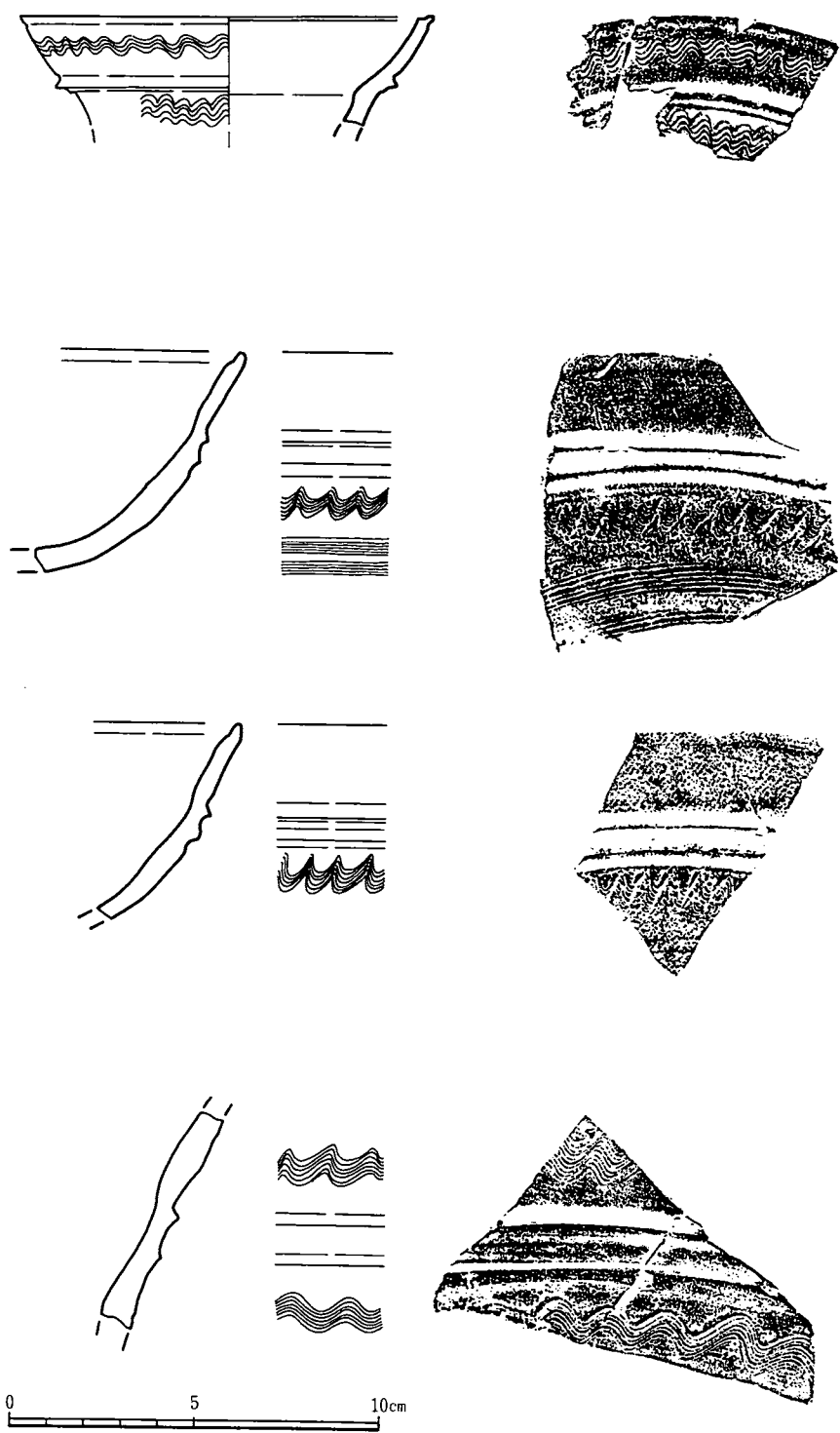


註 No-2の坏部が破片不足のため、脚部との  
接着は不可能であるが、同一個体の脚部である  
ことは間違いない。

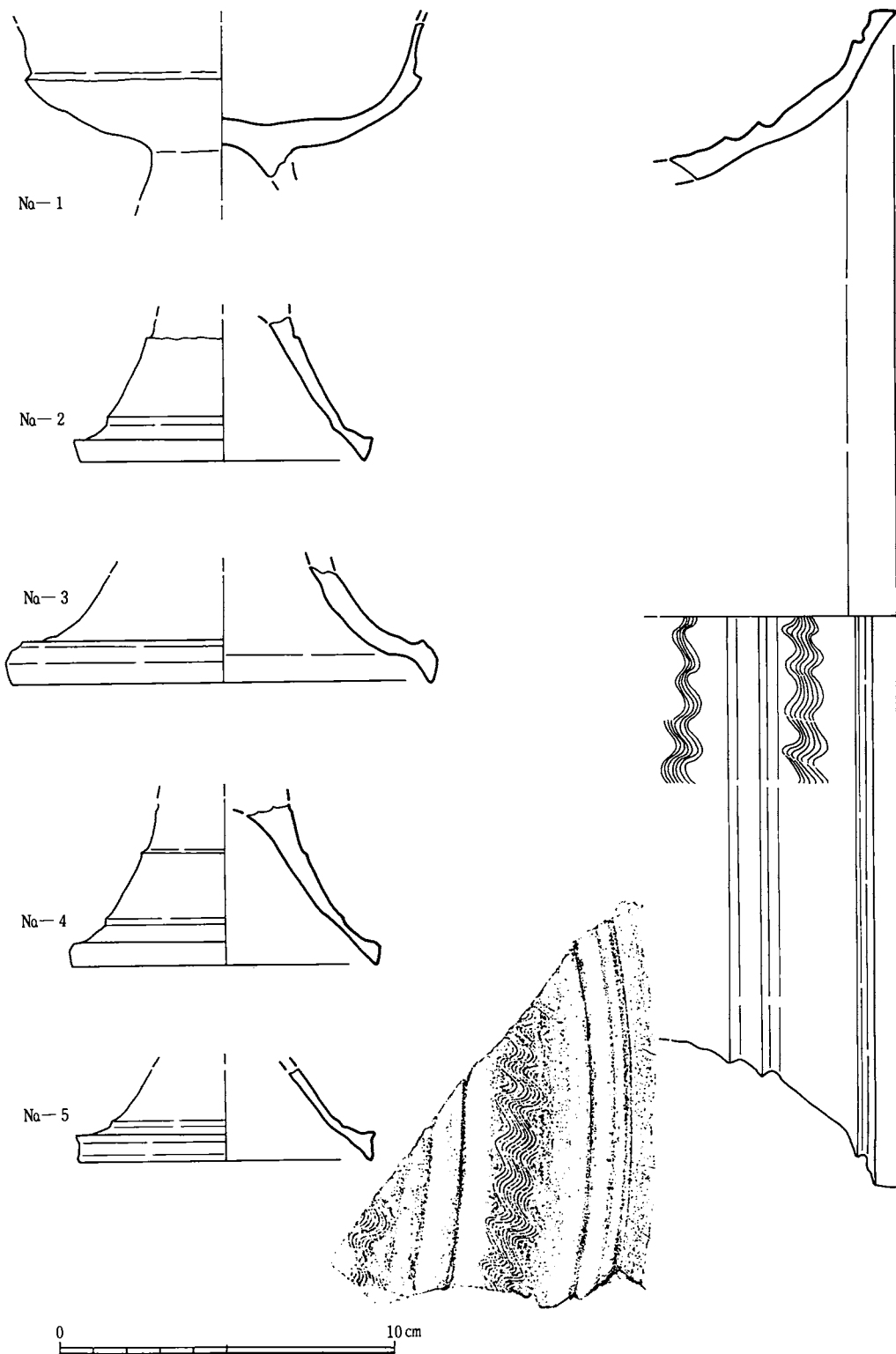


第12図 鈴付き高坏

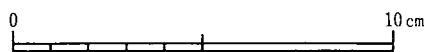
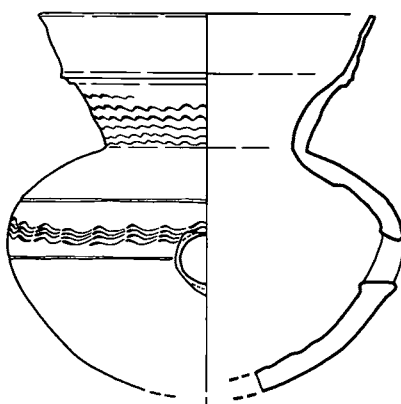
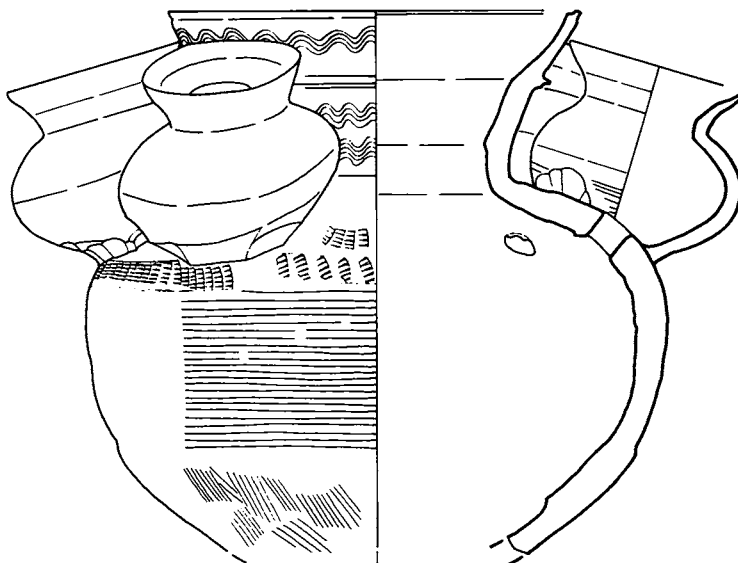




第13図 甕口縁および高坏口縁部



第14図 高坏脚部および甕口縁部



第15図 子持ち壺と甗

る。鈴の取付部直径は、約4.5cmである。鈴付高坏(II)には取付られた鈴が残っているので、本来は根部4.5cm、高さ3.5cmほどの中央に切れ目を施した空洞の鈴が設けられていたであろう。鈴と坏の接着部には本体の坏表面に若干のかすかな沈線が認められるものの特別な刻みや凹凸等の工夫は見られない。本体部の轆轤成形の後、手捏の鈴を貼り付けたものと思われる。これが、現在見られるような三個全部の欠落に繋がったものであろう。鈴の上部には、鈴の取り付け部をかすめるように、6条の櫛歯波状文が胴部を巡る。さらにその上を、幅0.2cm、高0.2cm前後の2条の突帯が走る。坏内部には文様等は見られないが、内部の底に直径8.4cm、幅0.5cmのドーナツ状をなす円の痕跡が残る。窯での焼成時についた重ね焼の跡か、後に高坏上にさらに別の器種を載せた痕跡か判らない。この円は坏中央部よりややずれて残る。

脚部は、坏底部に取り付けられ、下方にラッパ状に開く。脚末端部は、幅1.3cmの中高の突帯を巡らす。脚部の3か所に、上下に伸びる細長い台形状の透しが設けられる。上部末端の幅が1cm、下部末端が1.8cm（推定）である。その外に装飾は見られない。

このような腰部に3個の鈴を持つ器形は、日常雑器として使用するには誠に不便で、儀式に伴う儀器として用いられたものであり、いわば供献用須恵器を代表するものであろう。調査者の管見では、現在までこのような器形の出土を知らない。

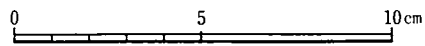
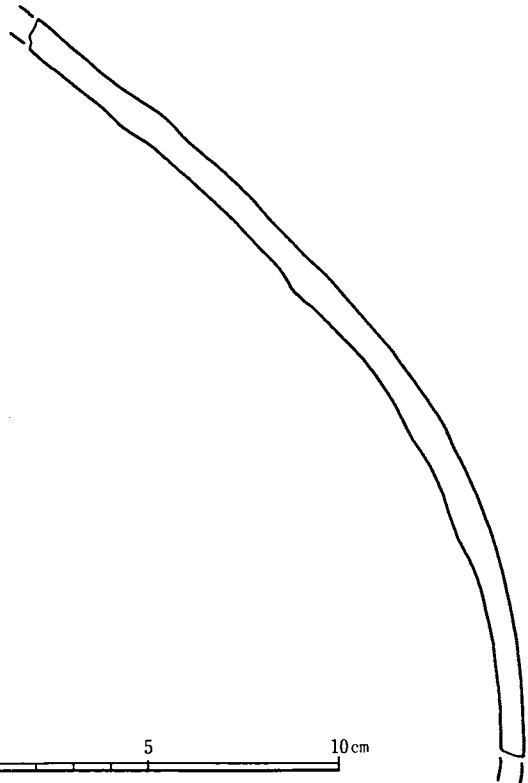
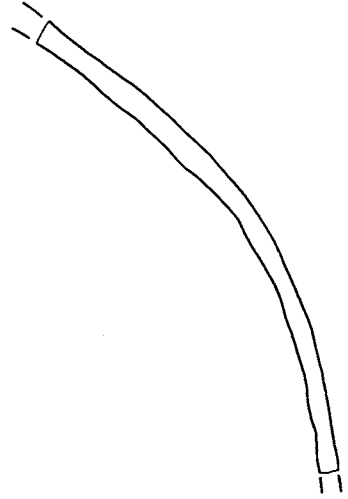
#### (イ) 鈴付高坏(III)

現存するのは坏部の一部のみであるが、腰部に直径3.5cm、高さ2.5cmの半円形をなす中空の鈴が残存している（第12図 No-2）。手捏の鈴の中央部には、長さ2.8cm、幅0.4cmの鈴の特色を示す切れ目が施される。坏部の口径は、(I)より2cmほど大きいのが、器形、器高、肌合い等、鈴付高坏(I)と寸分違わないもので、(I)と対をなして同時に製作されたものであろう。坏内部にも、鈴付高坏(I)と同様、ドーナツ状の直径約10.4cmの痕跡が認められる。

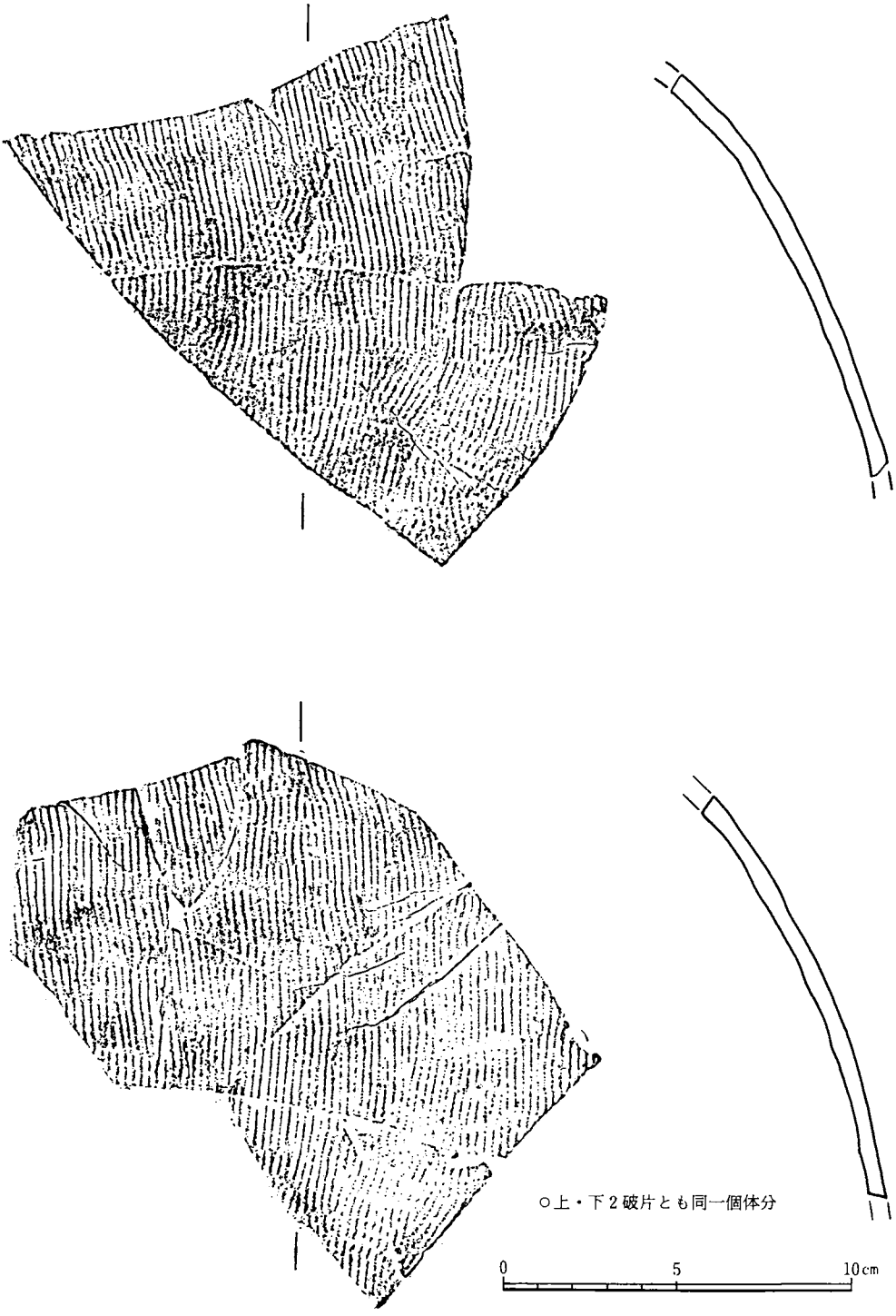
(I)と異なる点は、櫛歯波状文が7条となっていること、鈴取付時の篋調整がなされていないため轆轤成形時の地肌の条痕がそのまま残っていることなどであろう。

#### (ウ) 子持壺（第15図）

現存は全体の約 $\frac{1}{3}$ 程度なので、脚台付子持壺か、単なる子持壺であるか不明である。口径（内径）10.2cm、器高は現存部で14.8cmである。底部が丸味をおびる壺の肩部と、頸部間の緩傾斜部に、6個の子壺をとり付けている。現存するのは2個で、1個は半壊している。他は欠落しているが、本来6個並んでいたことは明らかである。外に開く口縁部の口唇は水平にカットされる。口縁直下に櫛歯波状文、1条の突帯をへだてて、その下にも同文を巡らす。肩部の張り出し部分には帯状に叩き目が見られる。内部には見られない。子壺の方は器高が約5.2cm、内頸部の高さが1.4cm、口径（内径）は4.5cmを計る。子壺の底には、約0.7cm前後の小孔が設けられ、本体の壺内部へと通じている。子持ち壺を有し、脚付かもしくは器台を併用したであろうこの種の須恵器は、供献用須恵器を代表する器形であり、県下の古墳からの出土は初例である。



第16图 壺破片



第17図 甕破片

製作時期は、頸部が短く、外に開きながら立上り途中でさらに大きく外開きとなり、内弯しながら口縁部をまとめ上げている手法や、文様に波状文が施されている点などから、5世紀中頃と推定される。このような古い時期の装飾壺の出土例は近隣県にも少なく、宮崎県佐土原町の横穴出土の子持壺（註1）も、6世紀末から7世紀初頭頃の新しい時期のものである。

#### (ニ) 甗（第15図）

口縁部と底部を失うが、器高推定11cm（うち頸部高が4.2cm、胴部高が6.8cm）頸部内径が4.6cm、器厚が0.5cm前後の甗である。頸部と肩部に櫛歯波状文を施す。頸部が約11条、肩部は、2本の沈線にはさまれて4条の櫛歯波状文を巡らす。肩部の最大張出し部分に直径1.3cmの篋竹を差す円孔を穿つ。円孔は、器外面と内面とで傾斜を有し、篋竹を斜めに差したことが判る。口頸部に比して胴部が大きく、肩の張りが上部にあることや、欠損した口頸部の高さが低く外に大きく開くことが推定されることなどから、5世紀代の製作と思われる。

#### (オ) 中形甗（第14・16・17図）

約33点の破片となって出土したが、接着の結果7ブロックほどにまとまった。図上復元すると器高50cm、口径が38cm、口頸部の立ち上り部が約14cm程度の甗であったことが推定される。口頸部外面には口縁部直下に突帯が巡り、その下方に10条の櫛歯波状文、さらに2条の突帯を挟んで7条の波状文を巡らす。口頸部は外へ反りかえりながら立上り、口縁直下3cm程の所でさらに外反し口縁部を形成する。長い口頸部と口径約38cmと大きく開く口縁部などが特色として挙げられよう。器外面には、平行直線文の叩き目が施されるが、内面には認められない。しかし、内面に若干の凹凸が見られるので、轆轤調整時に内部の同心円文を消した可能性もある。

器厚は部分によって異なるが、薄い所で0.4cm、厚い所で0.8cm程度で、一般的に薄手の甗である。断面に見られる胎土は淡紫色である。

#### (カ) 壺破片

7.7cm×6.0cmの破片（2片）で壺破片と思われる。外面に叩き目は見られず、自然釉と思われる暗褐色の釉が認められる。裏面は淡小豆色で凹凸が多く、僅かに叩き目が残る。器肌の色が他の破片と異なっており、一個体の壺が所在したことは明らかである。復元不能で器形等は不明である。

#### (キ) 高 坏（第14図）

No. 1、坏の口縁部の一部と、脚部の大半を欠く。坏部の高さが3.5cm、脚部は1.9cmを残して下部を失っているので、現存部の器高は5.4cmである。口径は12.7cmで、外面に文様等は見られないが、口縁部より1.7cmほど下に0.2cm弱の段がまわり、この部分よりやや直立して口縁部を形成する。篋による横ナデの痕が周囲に残る。全体的に白っぽく、須恵器本来の色ではなく、瓦質に近く、全面に鉄錆様の付着が認められる。

高坏はNo. 1の外に3個体程の埋納があったことが、出土破片等で知られる。



No-2、脚部破片1、坏部2点であるが、脚の高さが約4.4cm、脚の下部の推定径は9.0cm、坏部は復元不可能である。器高11cm未満の小形高坏と思われる。No-1の高坏と同様、器面は白っぽく焼成が悪い。

No-3、脚部のみ破片である。残存部の高さは3.5cm、胴部径は12.5cmである。

No-4、脚下部が2点出土、脚部下部末端の復元径は10.4cmである。前者に比べると須恵器本来の色をなしており、焼成も堅緻、器肌に鉄錆様の付着が認められる。

No-5、脚部の一部が1点出土、脚の下部の径は7.4cm、器肌は白っぽく、焼成が悪い。器高10cm前後の小形の高坏と思われる。

坏部分の破片は少ないが、いずれも口縁部から2cmほど下方の胴部に、幅0.2cm程の切り込みによる段をめぐらし、装飾とした坏である。この切り込みからの器の立上りは直立に近くなり、やや外反し、胎土を薄くしながら口縁部を形成する。蓋坏の破片と思われるものも一片混る。

### [3] 土 師 器

土師器で器種、形状が確認できるのは周溝内より出土した盃と、入口部右手周溝より出土した甕の2点である。甕は周溝底より出土し古墳築造時の遺物と推定される（第18図）。

土師盃 高さ57.8cm、口径（内径）は14.4cm、器厚は平均0.5cm前後、色は褐色で、内外面ともに小ヒビが走り一部には表面の剝離も見える。6つの破片となっており、口縁の一部を欠損  
土師器

器 種	点数	寸 法 ・ 法 量		現 状	備 考
		高 さ	口 径 (内径)		
土 師 (盃)	1	57.8cm	14.4cm	口縁の一部を若干欠ぐ	焼きは悪く吸水性大、表面に小ヒビが走り部分的に表面剝離
土 師 (甕)	1	21.6cm	19.0cm	一部欠損	特色は外反する口縁部と、ほぼ球体をなす胴部

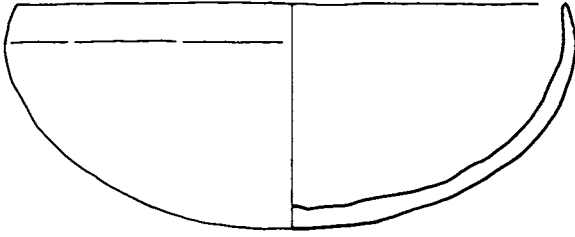
する。吸水性は大で全般的に脆弱なつくりである。周溝底より30cmほど浮いて出土した。

土師甕 この甕は、周溝の西側に設けられた土橋部の墳丘に向けて右手周溝底より出土した。古墳築造時、祭祀供献のために使用されたものであろう。土圧によりひびが走り、一部を欠損し完形ではないが、その出土状況から、現位置を保っているものと思われる。

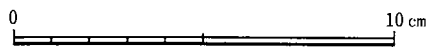
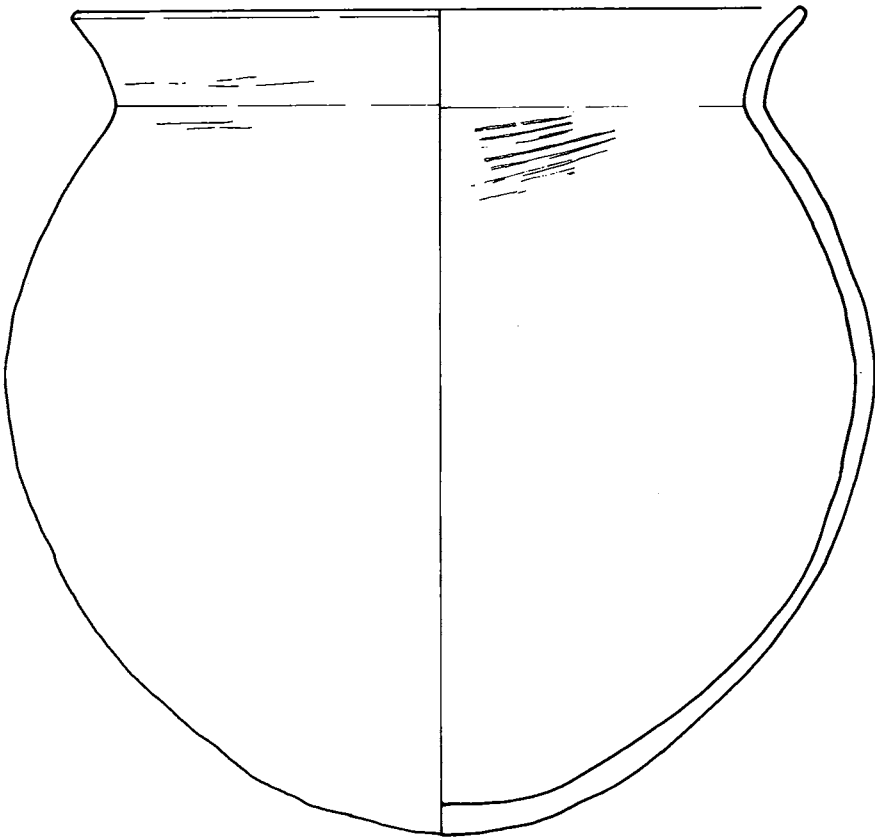
器高は21.6cm、内口径が19.0cm、頸部内径が16cmでほぼ球体の胴部をもち、頸部のくびれには、稜線による上（口縁）、下（胴）の区別がなく、断面上では曲線上をなす。口縁部はくびれ部より外傾しつつ口縁部なかほどから外反する。全体的にややいびつな形状をなす。

器壁は、丸底の部分は幾分厚手となっているが、全体的には薄手で脆い。特に、胴部中央よりやや下の部分は、極めて薄いので破損も激しい。

No-1 盃



No-2 甕



第18図 周溝底出土の土師器 (盃と甕)

胎土には長石、石英を主体とする砂粒を多く含み焼成は極めて悪い。色調は赤褐色（標準土色帖 Hve2.5YR による）を呈するが、一部には火の通っていない暗赤灰色の部分が認められる。

内外面共に風化が著しく、技法の確認はほとんどできないが、僅かに内面くびれ部の下に、篋でやや斜め上方に掻き上げたような痕跡が認められる。

この甕の製作年代であるが、塚原古墳群出土の膨大な量の土師器を分類した「土師器分類表」（註1）が参考となる。塚原の場合、この種の土器を甕形土器とし、I類、II類、III類と三種に分類している。

器形から見ると、球形をなす胴部と頸部から外反して立上がる口縁等からIII類にが一番近い。分類ではI類は布留式の特徴を留める早い時期のもので、須恵器の伴わない時期。II類は5C前半に置き、初期須恵器を伴う土師と推定する。III類は5C後半とし、国産の須恵器を共伴する時期として促えている。この編年からすると、この甕もIII類の時期と推定され、5C後半頃と考えて大過なからう。

盃形土器については、塚原からも多数出土しており、形態・技法上の差違によってI類からVII類まで分類されているが、器形も様々で、器形によって製作年代を確定することは不可能のように思われる。

（註1）熊本県教育委員会「塚原」本文編 熊本県文化財調査報告第16集 昭和50年

#### [4] 埴 輪

##### (ア) 埴輪の出土概況

京塚古墳に伴う埴輪小片は、調査以前から当該畑地内に相当量散布しており、容易に表採可能であった。しかもこれらの破片は、隣接する船山古墳出土の埴輪と明らかな相異点が認められ、従来よりすでに消滅した、第5の古墳の存在を推測させる有力な根拠となっていた。50年に菊水町が実施した清原遺跡確認調査により、当該地の試掘坑（SM04-01）から、円筒埴輪の大破片数点が出土するに及んで、船山古墳以外の古墳の实在が当所に残る京塚の地名と相まって確実視されるようになった。

江戸時代中頃、京塚古墳の埴丘は削平され畑地化されたため、古墳所在地を中心に埴輪片は、相当広く散布する。殆んどが耕作等により打ちくだかれたためか、小片として表採される場合が多い。しかし今回、京塚周溝より出土した円筒埴輪は、大破片というより、円筒形を残す形で発見された。

これらの埴輪群の出土地点は、周溝内では11か所（第19図参照）におよぶ。また、試掘時のNo-3、No-15、昭和50年度町調査時の試掘坑出土（SM04-01）等のグループを含めると、ゆ

うに14～15か所の群として把握できる。この他にも、発掘途中で取り上げた単独出土の大破片も数多い。このように周溝内より発見した多数の埴輪の出土状況は、以下のとおりである。まず、周溝内での出土場所であるが、試掘時の出土も加えると、ほぼ万遍なく発見されている。ただ、周溝南西部においては、中近世時の道路と周溝が重なり合っていることや、北側より段下りの畑地となっていたことなどから、周溝自体の残りが悪く、埴輪の出土が少なかった。この部分の埴輪が中世時の道路新設時に移動して出土したのが、SM04-01試掘坑から発見された埴輪片等であろう。

周溝内における埴輪の埋没レベルは、ほぼ周溝底より $\frac{1}{2}$ 位の深さにあり周溝底ではない。この事実は、古墳築造直後の豪雨等による急激な封土の周溝への流入がおさまった後の落ち込みであることを物語っていよう。さらに、墳丘における表土（封土）の流入は、墳丘に並べられた埴輪の露出をまねき、その結果埴輪の周溝内への転落を見たのであろう。落ち込んだ埴輪は殆んどが、円筒状を得ながら横倒しとなった状態の出土が多い。また、円筒状の形状のまま上からの土圧よってつぶされたものも多く、墳丘上で壊れ破片となったものが低い墳裾の周溝に落ち込んだと思われるものは少ない。また、埴輪列が墳丘斜面に幾条巡らされていたかは不明であるが、周溝内落ち込みの埴輪の破損度が少ないことなどから、主として周溝近くの墳裾部の埴輪列が落ち込んだ可能性は強い。

時間と手間をかければ、さらに復元埴輪も多くなるものと思われる。円筒状のまま周溝内に落ち込んだものが多いため、円筒部の内容物を包含したまま出土し、今回内容物が判明した事例は3例を数えた。

3例共に、円筒内に直径1cmないし2cmの小砂利が詰められているのが確認された。墳丘上に埴輪を列した時、倒壊を防ぐ目的で円筒内に小砂利を詰めたものであろうか。

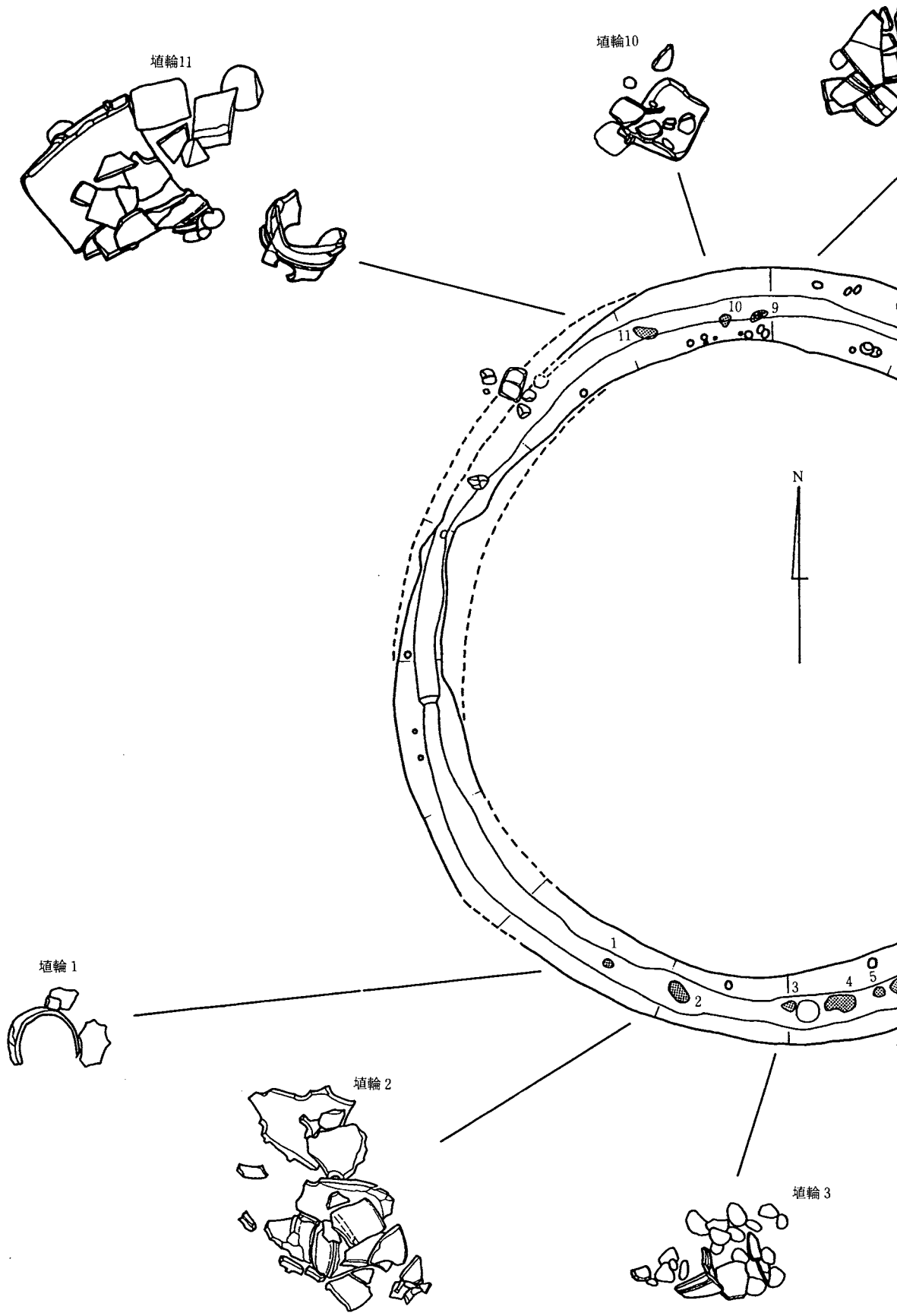
また、近年、埴輪外壁面に文字が刻まれた破片が発見され話題をよんでいるが、当京塚古墳では、外壁面に○と×印が篋で刻まれた埴輪が出土した。「良い」「悪い」の意味か、円筒埴輪の円孔を穿つための目安で刻んだものか。また×印は、埴輪不出来のための印なのか判らない。因みに○印は埴輪円孔の大きさとほぼ同様である。しかし、当時○と×の概念が、今と同様に存在したと考えられる点は興味深い。（桑原）

#### (イ) 埴輪の概況

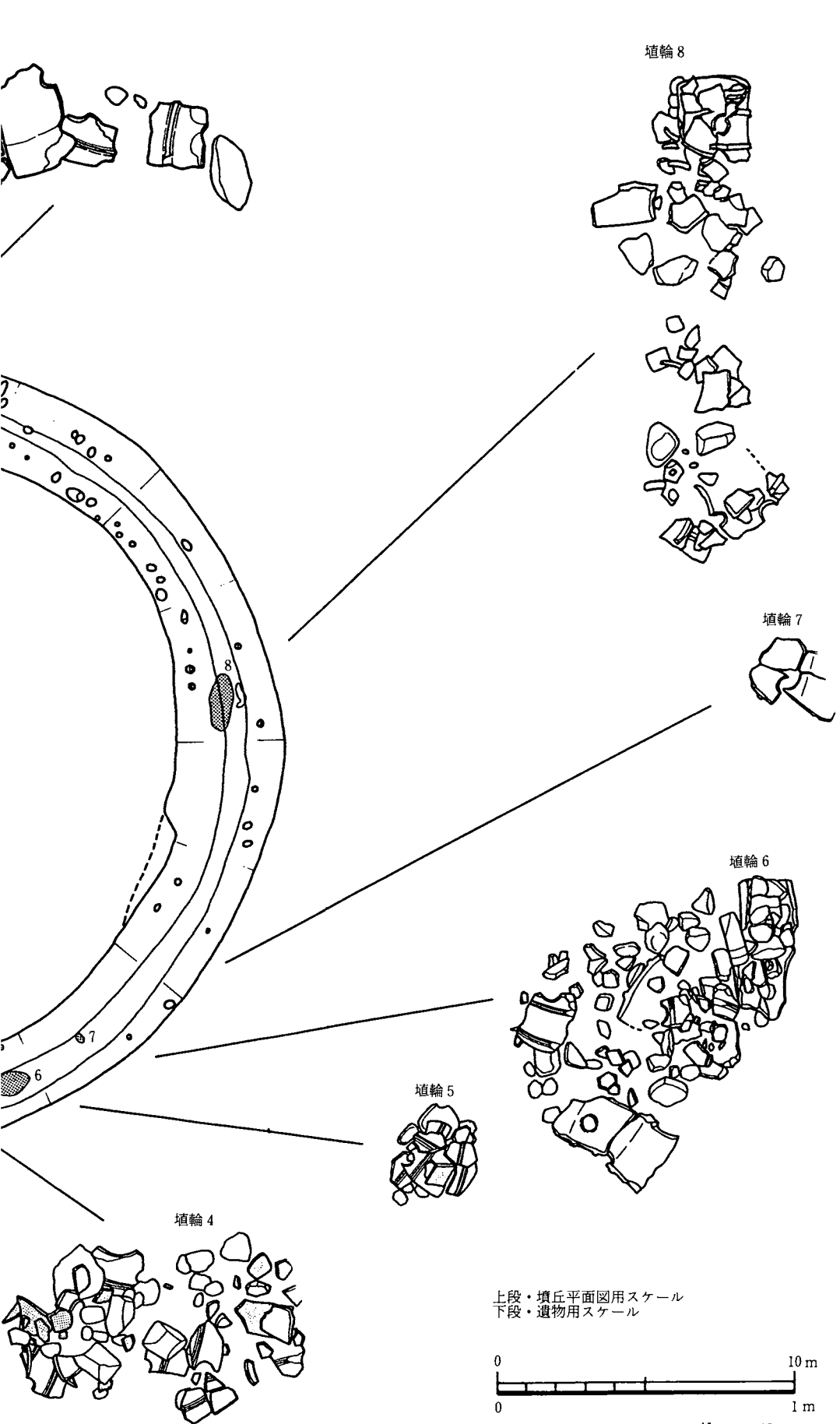
京塚古墳の周溝からは、多量の円筒埴輪が出土した。また、「石人の丘」公園の整地中に形象埴輪片が出土している。これらは、周溝中から出土したものではないが、周囲の状況から京塚古墳に伴う可能性が強いため、加えて記述する。

埴輪各部の呼称は、下から、基底部→第一段タガ→第一段目→第二段タガ→第二段目→第三段タガ→口縁部とした。

円筒埴輪（第23図～第27図）



第19図 周溝内にお



埴輪 8

埴輪 7

埴輪 6

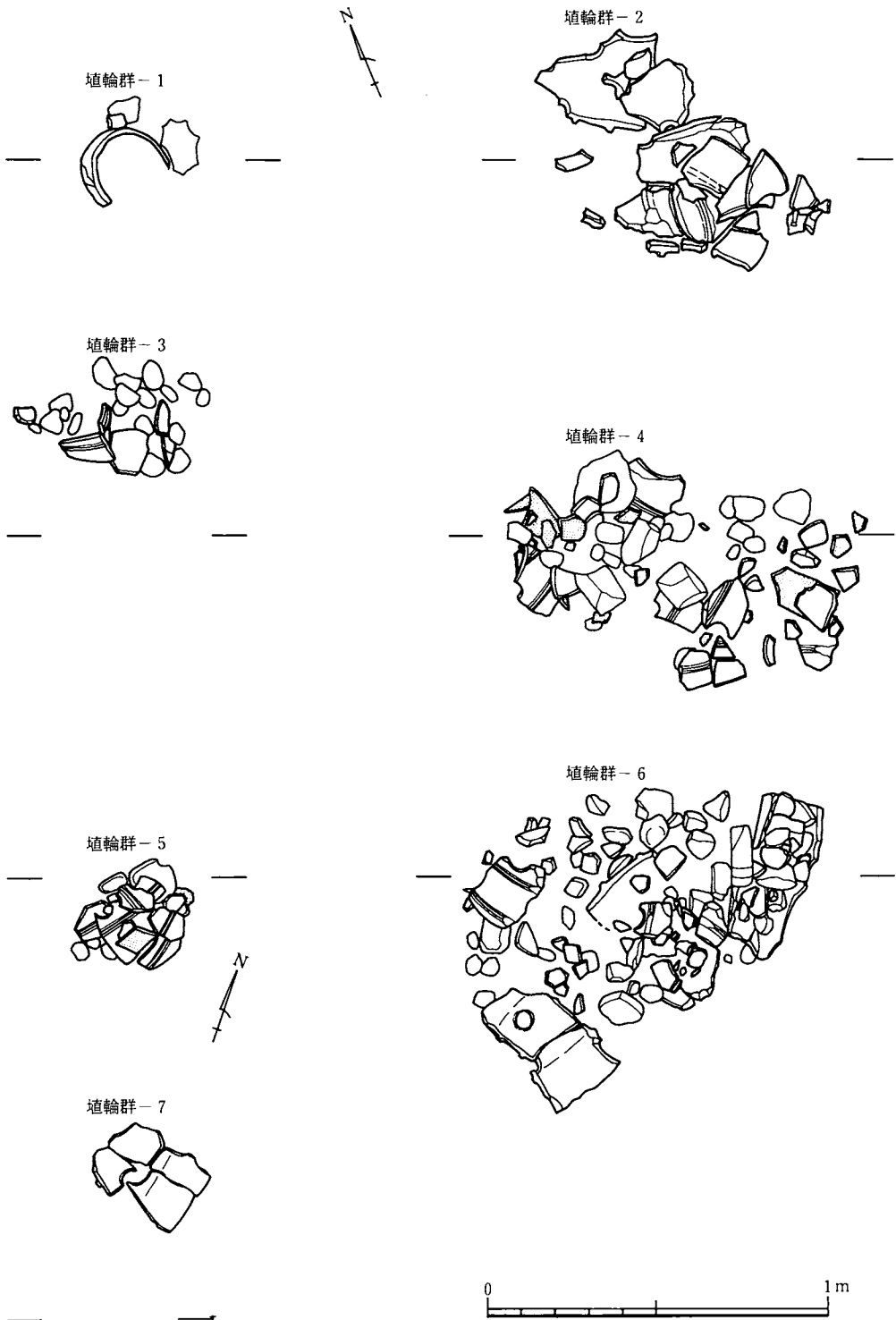
埴輪 5

埴輪 4

上段・墳丘平面図用スケール  
 下段・遺物用スケール



埴輪の出場所



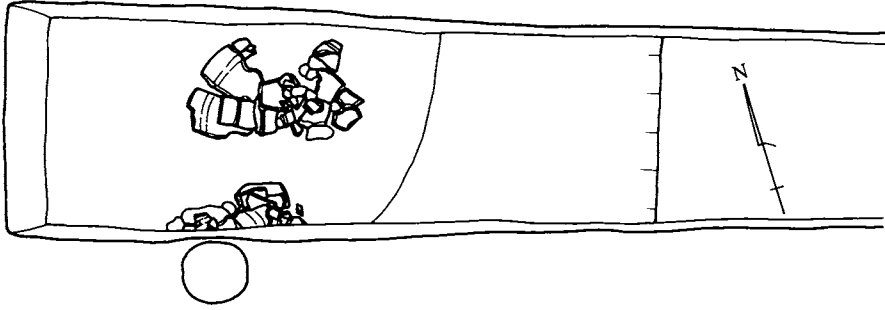
第20図 周溝内各所における円筒埴輪の出土状況 (その1)



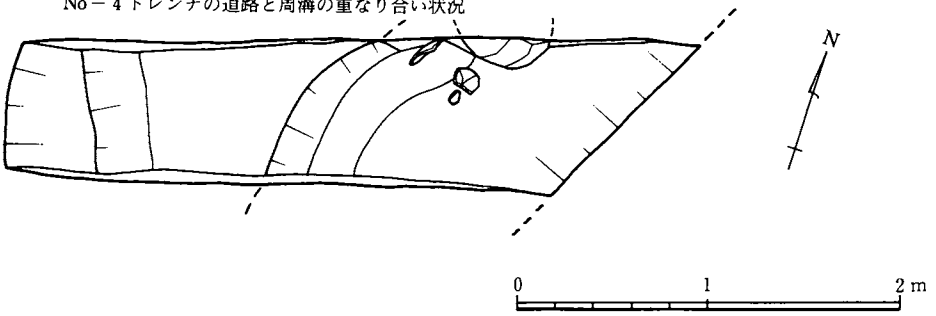
第21図 周溝内各所における円筒埴輪の出土状況 (その2)



No-15トレンチの埴輪出土状況



No-4トレンチの道路と周溝の重なり合い状況



第22図 周溝内各所における円筒埴輪の出土状況（その3）

多量出土したが、復元不可能な小片が多く、ある程度、形の復元ができるものを選別した。

1は、出土中最も遺存部分が多く、基底部から口縁部までのプロポーシオンがわかる。全高46.9cm、口径32.2cm、底径19.0cmを計る。表面の風化が著しい。外面調整は主にタテハケによるが、部分的にナナメハケも認められる。また口縁部上端では、ヨコナデの二次調整が認められる。タガは三段である。第一段タガ（最下段タガ）は剝離し残存しない。この剝離部分の観察によると、タテハケ調整の後、タガを接着する部分の目安となる沈線を一条めぐらし、その後タガ接着を行っている。タガの上下はナデ（ユビ先端をかなり強めに押圧しつつ、タガに沿って一周させている）が認められている。この作業によりタガ接着の強化を図っている。内面調整は指ナデ・オサエが主体で凹凸が著しい。基底部の器壁は肉厚であるが、全体的に器壁は薄い。タガは細身で突出度が高く、器形全体の作りは、繊細な印象を受ける。基底部の途中から、すでに器壁が外傾し、そのまま外傾しつつ口縁部にいたり上端でわずかに外反する。透孔は円形でタガ間にそれぞれ2個ずつ認められる。穿孔は、器面調整後である。ヘラ記号が認められる。その部分の大半を欠失しているが、「×」印と推定される。

2は基底部を欠失している。口縁部以下残高37.5cm、口径27.6cmを計る。外面調整はタテハケで、口縁部先端はヨコナデである。タガの上下はヨコナデによる調整であるが、部分的には強い押圧痕が認められ、指ケズリの手法に近い。タガ部に対応する内壁は隆起しており、外部から強く押圧して接着させたためと思われる。内面調整は、口縁部に、わずかにナナメハケが認められるが、本来は、口縁部内壁全面に施したものであろう。口縁部より下部は、タテ方向のユビナデによる調整である。円形の透孔と「×」印のヘラ記号を有する。両方とも、器面調整の後に施工したものである。表面の風化が著しい。器壁は、わずかに外傾しつつ立ち上がり、さらに口縁部上端で外反している。タガは、かなり均整がとれ、突出度が高くシャープである。

3は、基底部から最下段タガの部分を欠失している。残高34.1cm、口径34.6cmを計る。外面調整は、口縁部については、タテハケによる一次調整後ヨコハケを施している。他は、川西宏幸氏によるB種<sup>注1</sup>ヨコハケの技法を用いている。タガは、ナデによる調整で、タガの上下は、指のヨコナデ圧痕が一周している。内面調整は、指ナデを主体とし、口縁部付近は、ヨコおよびナナメハケによる調整である。「×」印のヘラ記号が認められる。透孔は円形で、タガ間に各2個ずつ配置している。器壁は、ゆるやかに外傾しつつ口縁部にいたり、口縁部上端で外反する。

4は口縁部以下の残高29.2cm、復元口径34.2cmを計る。風化が著しい。外面調整は、下部から一気にかき上げた一連のタテハケによる。表面の風化により部分的に消えてはいるが、本来は全体に施したものである。タガも風化により、本来のシャープさが失われてはいるが、突出度は高い。タガの上下に見られる指ナデなどは、入念である。タガの調整は指ナデによる。「×」印のヘラ記号を有する。内面調整は、口縁部内壁に、浅くヨコハケの痕跡が認められる。これより下部は、斜行の指ナデによる調整痕が著しい。器壁は、わずかに外傾しつつ立ち上り、口

縁上端でさらに外反している。

5は、口縁部以下残高31.9cm、口径34.0cmを計る。風化が著しい。外面調整はタテハケである。口縁部周辺はナデによる二次調整が施され、ハケ目が消されている。タガはタテハケ調整後に貼付け、その上下を指ナデにより調整し接着強化を図っている。内面調整は、やや斜行気味の指ナデ（押圧に近い）を主体としている。口縁部内壁には、わずかにヨコハケが認められている。器壁は、4などに比べ大きく外傾しつつ立ち上り、さらに口縁部上端でわずかに外反している。透孔は円形である。

6は、口縁部以下の残高27.6cmの部分である。復元口径26.2cmを測る。外面調整は一連のタテハケである。風化により全面には認められない。タガはシャープで突出度が高く、その上下は、指ナデを施すことで接着強化を図っている。内面調整は、ほとんど鉛直な指ナデによる。タガ部の内壁は、かなり強い指先の押圧を加えている。全体的に風化が著しいが、器壁は薄く、最上段のタガ（第三段タガ？）の部分でやや張り出し、口縁部はわずかに内傾しつつ、口縁部なかほどから反転外反している。透孔は、タガ間に1個ずつ残存する。

7は、口縁部以下残高26.0cmの部分である。復元口径26.8cmを計る。外面調整は、風化が著しいため十分観察できないが、わずかにタテハケが認められる。タガ上下には指ナデによる接着の強化が図られている。タガの突出度は高い。「×」印のヘラ記号を有する。内面調整は斜行の指ナデによる。器壁は比較的薄く、外傾しつつ立ち上り、口縁部の上端で外反している。全体的な造形は、出土した埴輪の中でもきわめて繊細である。

8は、口縁部以下残高18.9cmで、復元口径29.8cmを計る。外面調整はタテハケを主体とし、口縁部先端付近は、ナデによる。タガの上下はナデ調整でタガの接着強化を図っている。タガ調整もナデによる。「×」印のヘラ記号は、器面調整の最終段階に施している。内面調整は、口縁部内壁にナナメハケ、これより下部は、指先の押圧およびナデによる調整で凹凸が著しい。また粘土積上げ痕が一部に認められる。全体的にもろく、多少の差はあるが、これは他の埴輪と共通する特徴でもある。内面のハケ目の間隔が、外部より密であることから異種の施工工具を使用していることがわかる。胴のやや張る器形となり、口縁部はタガの部分からほぼ垂直に立ち上り、なかほどから大きく外反する。

9は、口縁部以下残高30.0cmの部分で復元口径24.0cmを計る。外面調整はタテハケ主体で、部分的にハケ目が重複している。タガの上下はナデにより接着が強化されている。ヘラ記号は、全体形をとどめないが、「×」印と推定される。タガ先端は、断面 $\triangle$ 形を呈する。内面調整は、口縁部に断続的なヨコハケを施し、口縁部先端付近はナデ、また口縁部より下部はナデである。タガ接着部分の内壁が肥厚する。タガはやや細身で、突出度が高くシャープである。器壁は、わずかに外傾斜しつつ立ち上り、ほぼ直立する口縁部に至り、口縁部上端で大きく外反する。

10は、基底部を完全に欠失してはいるが、口縁部から最下段タガまで残存し、ほぼ全体のプ

ロケーションが推定できる。残高37.5cm、口径32.4cmを計る。外面調整は、タテハケ、および二次調整のナメハケが部分的に認められる。口縁部先端はヨコナデ、タガの上下も押圧気味に施したナデである。内面は、指ナデ・オサエによる整形の後、ハケ調整を施している。内壁のハケ目は荒く不規則に残り、基底部付近にまで見られる。また内壁には、粘土積上げ痕が認められ、凹凸が著しい。器壁は大きく外傾しつつ立ち上り、口縁部のなかほどから外反する。口径が大きく開いた器形となる。10の特徴は、内壁に見られる荒いハケ調整が基底部付近まで施されている点である。しかし、前述の如く、粘土積上げの痕跡がかなり残っており、調整は粗雑と言える。

11は、口縁部上端と最上段タガ以下を欠失する部分で、残高25.5cmを計る。外面調整は、第一段目がヨコハケ、第二段目がタテハケで、口縁部は風化により調整痕の識別ができない。タガの上下は、ヨコナデ、タガ調整もナデである。内面調整はナデで、押圧気味の部分も見られ凹凸が著しい。タガは突出度が高く、シャープである。器壁は外傾しつつ立ち上り、口縁部の欠失部分あたりから外反すると思われる。

12は、かろうじて径を推定できる程度の破片で、焼成は良好である。破片上端は口縁部で、外反する器形と推定される。他と同様、三段タガの埴輪とすれば、第一段目と第二段目の外面調整はヨコハケで口縁部はタテハケとなる。タガ上下はヨコナデ、タガ調整もナデである。内面調整はナデで、粘土積上げ痕が残る。タガの突出度は高い。出土中の埴輪では、最も焼成の良いひとつである。器壁はわずかに外傾して立ち上がっている。

13は、基底部以上の残高16.5cmの部分で、底径19.6cmを計る。外面調整は、基底部がタテハケ、第一段タガが指ナデ、第一段目はヨコハケである。またタガの上下は、指先を強めに押圧しタガに沿って一周させたナデである。内面調整は指ナデおよび基底下部には、幅約6cm程度でヨコ方向の指ケズリが認められる。タガは風化してはいるが、突出度が高く、本来はシャープな出来であったと思われる。ごくわずかに外傾斜して立ち上がっている。器壁の内外面に粘土の積上げの痕跡が認められている。

#### 形象埴輪（第27図）

14は一端がわずかに外反する筒状の形象埴輪で、器種は不明である。外面調整は、ナデ主体で一部にハケ目が認められる。径2cm大の粘土粒の貼付けが見られる。内壁は、なめらかである。外面の風化が著しい。動物（馬など）の脚部とも考えられるが、断定はできない。

15と16は同一個体の破片と推定される。15は、人物埴輪の右肩の部分と思われ、16は脇腹部分の破片であろう。外面調整はハケによる調整後、一部にナデ調整痕が認められる。内壁はナデによる調整である。

17は、沈線を施した帯状の貼付を有し、器種は不明である。15・16と胎土・焼成に類似性が認められ、同一個体である可能性がきわめて高い。一部に明瞭な沈線文が認められる。15が右

肩部、16が脇腹部、17も人物埴輪とすれば、帯を付けた腰部から衣服（下端の沈線部）にかけての部分と推定される。

(ウ) まとめ（円筒埴輪）

まとめとして、平均的に見られる特徴を次にあげた。

－①器形－

器壁がやや外傾して立ち上り、口縁上部で外反する。

－②タガ－

タガは三段である。やや細身で突出度が高い。横断面形は、台形か中凹の台形となる。

－③器壁－

薄手である。細身のタガとともに繊細な印象をうける。

－④器面調整－

<外面調整>

タテハケ主体で、まれにタテハケに重複してナナメハケが認められる。量的には少ないがヨコハケ調整もある。タガ調整はナデ、タガの上下もヨコナデ、この作業でタガ接着の強化を図っている。口縁端部はヨコナデである。

<内面調整>

指ナデ・オサエを主体とする。口縁部内壁は、ヨコ・ナナメハケを施すものが多い。

－⑤透孔－

円形で、タガ間に各2個ずつ施す。器面調整後に穿孔する。

－⑥ヘラ記号－

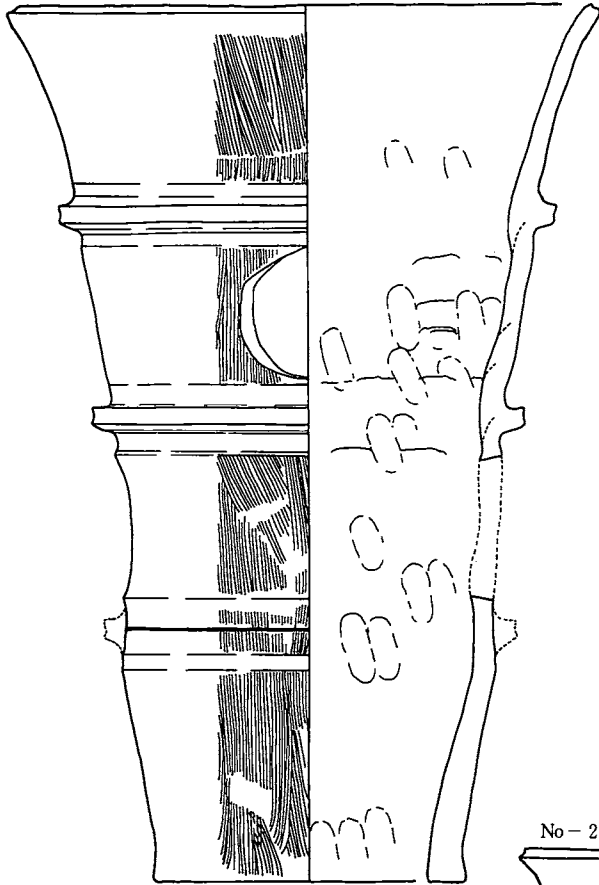
「×」印である。器面調整後に行っている。

以上の特徴を総合すると、技法上では虚空蔵塚古墳に近く、塚坊主古墳の円筒埴輪に見られる最下段タガの押圧技法は無い。さらにタガ形状・突出度の高さや器壁の薄さ等を考慮すると、清原台地上の古墳群中では、繊細かつ丁寧な造形である。

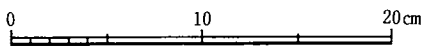
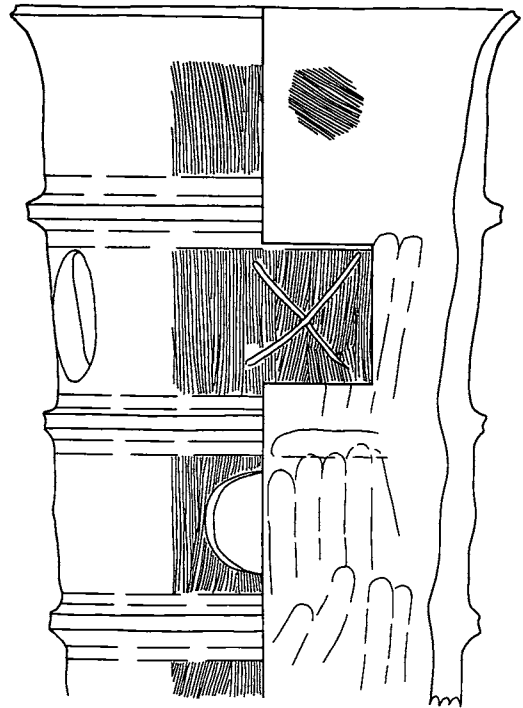
そこで円筒埴輪の時期的位置づけであるが、京塚古墳の埴輪は、船山古墳、塚坊主古墳の埴輪より古い特徴を有し、また、虚空塚古墳の埴輪と比べた場合、大きな時期的隔たりは感じられない。これまでの調査の成果による埴輪の編年は、京塚古墳→虚空蔵塚古墳→船山古墳→塚坊主古墳とされている<sup>ik2</sup>。これは、京塚古墳の資料がきわめて少ない状況下での考察であったが、今回出土した埴輪は、復元不可能な小片が多いうえ、風化が著しいという不利な点を差し引いても、量的に多く、形態比較が可能な程度の資料は提供されたと言えよう。再度、虚空蔵塚古墳の埴輪との比較に戻るが、技法等の点で、明らかに京塚古墳の埴輪が古いとは断言できないと思われる。したがって、虚空蔵塚古墳の埴輪の資料が十分でない現時点では、ほぼ同時期のものとして取扱っておきたい。

（菊水町歴史民俗資料館学芸員 池田道也）

No-1

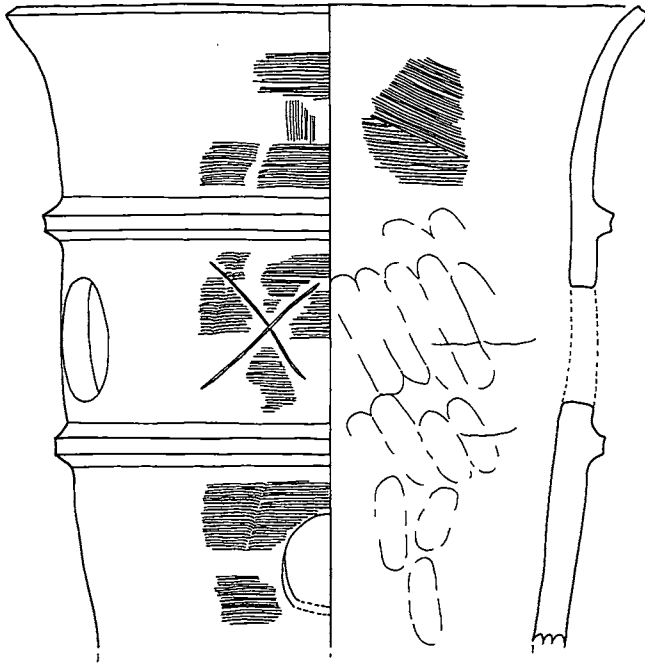


No-2

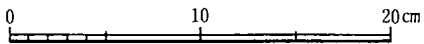
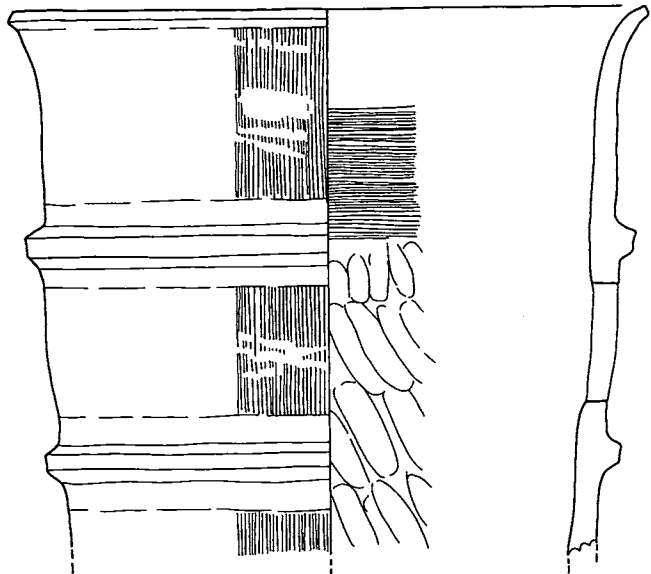


第23図 円筒埴輪実測図（その1）

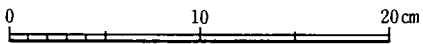
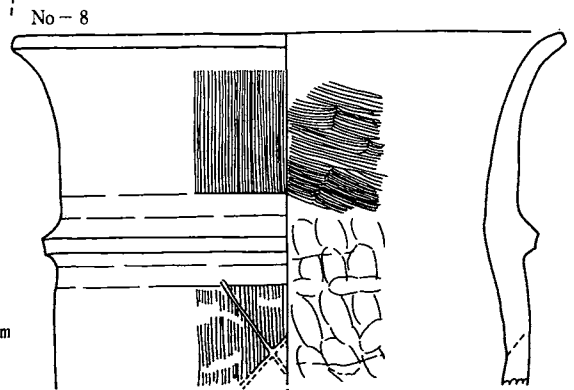
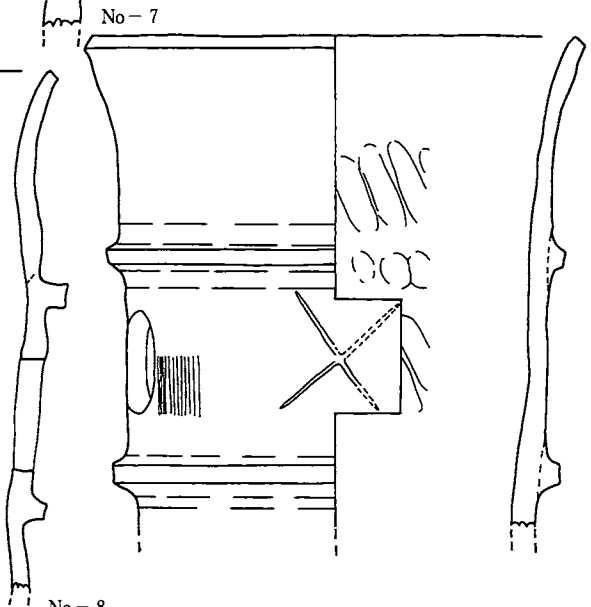
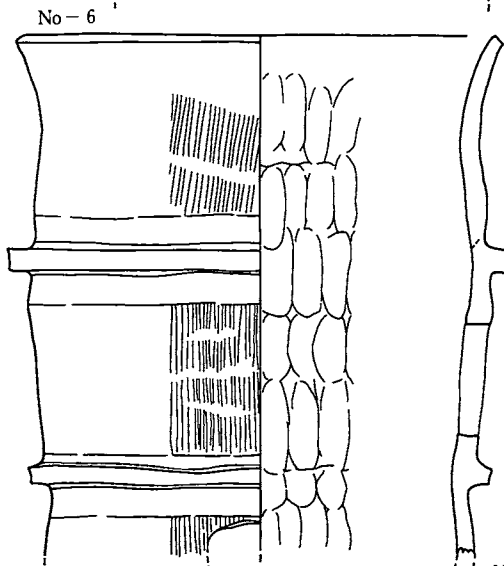
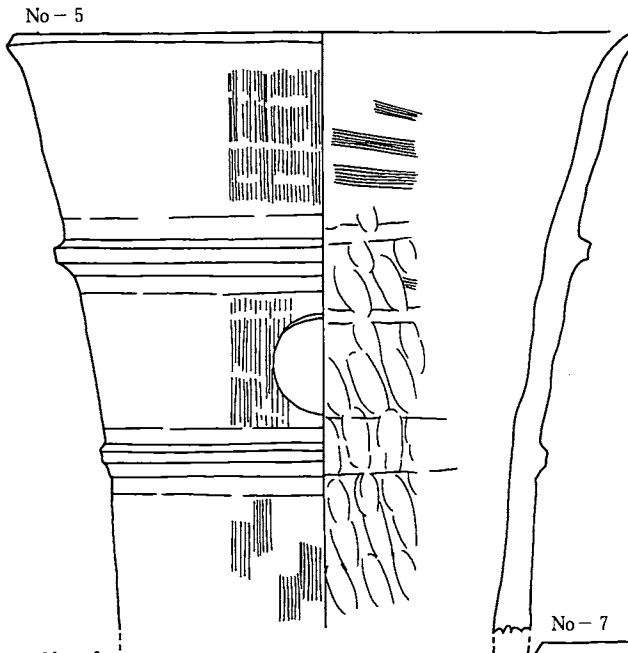
No-3



No-4



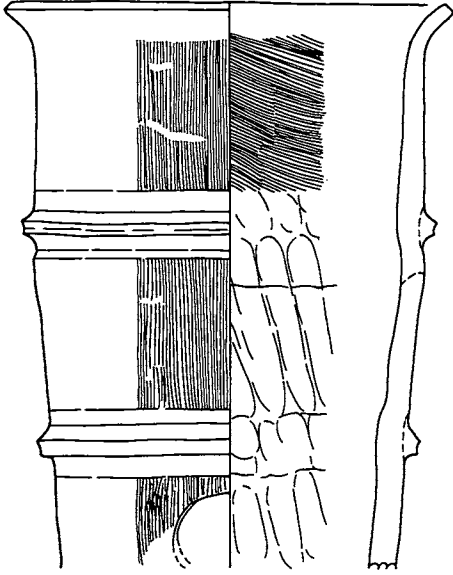
第24図 円筒埴輪実測図（その2）



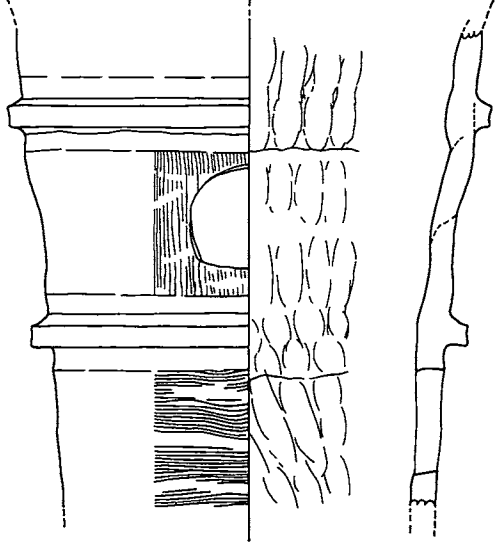
第25図 円筒埴輪実測図 (その3)



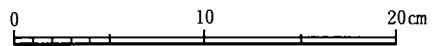
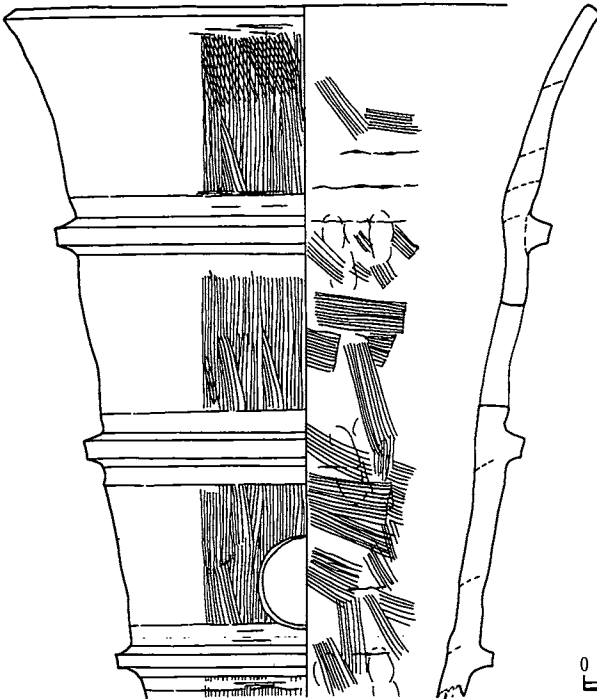
No-9



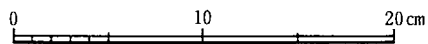
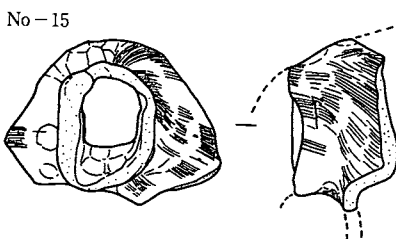
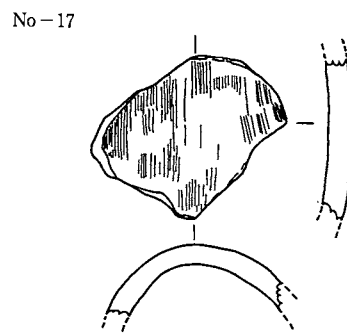
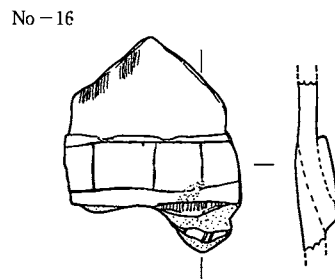
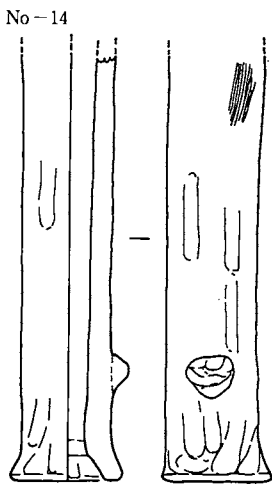
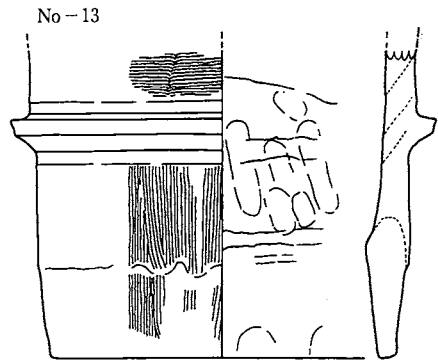
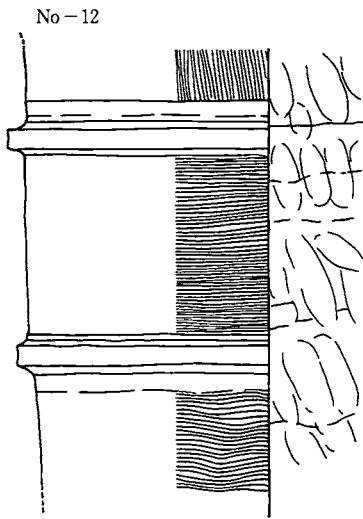
No-11



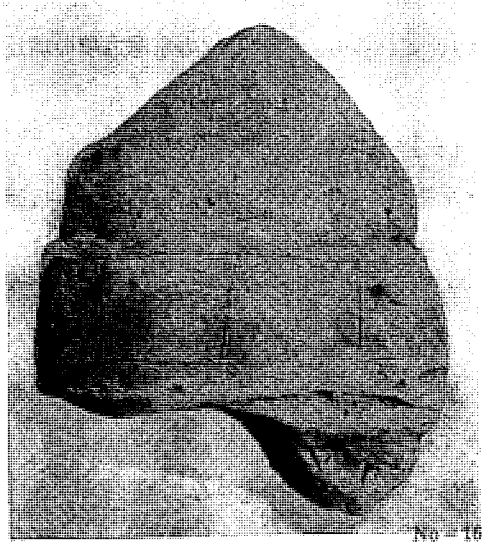
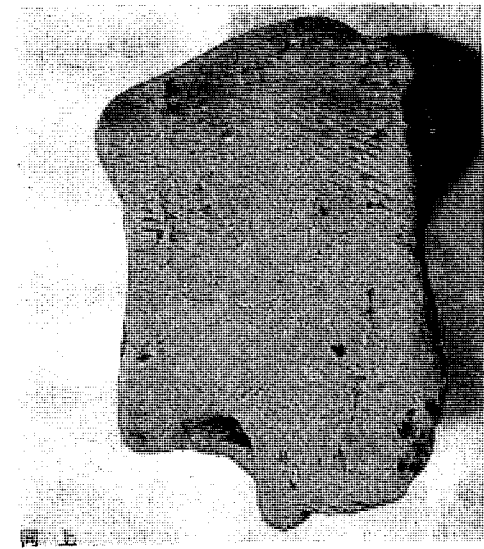
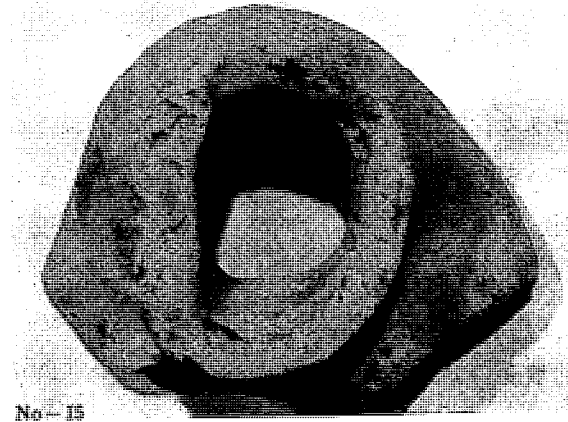
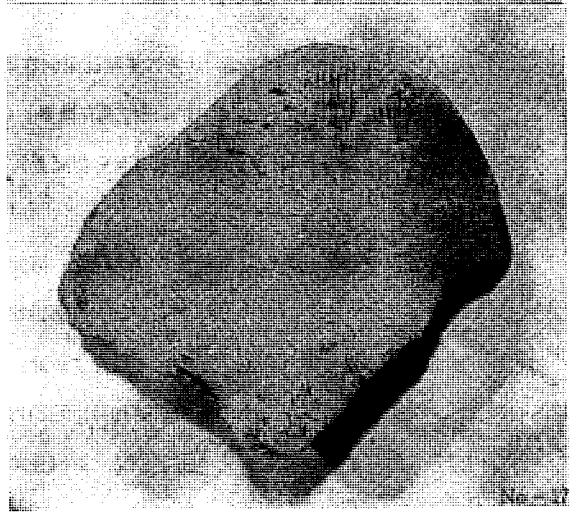
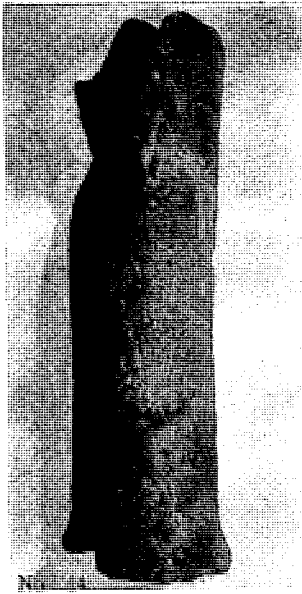
No-10



第26図 円筒埴輪実測図（その4）



第27図 円筒埴輪・形象埴輪実測図（その5）



第27図-2 形象埴輪片 (その6)

※尚、本項に使用した実測図は、池田道也の他、国学院大学生竹田宏司氏の助力を得た。

注1 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号）より。

注2 菊水町教育委員会「清原古墳群周隴調査概要」（『江田船山古墳』所収1980）および熊本県教員委員会「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」（『熊本県文化財調査報告第55集』1982）より

#### <主な参考文献>

- 赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」（『古代学研究』第90号）。
  - 吉田恵二「埴輪生産の復原」（『考古学研究』第19巻第3号 昭和48年）。
  - 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」（『考古学研究』第13巻第3号 昭和42年）。
  - 三木文雄「はにわ」（『日本の美術』第19号 昭和42年）。
  - 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号）。
- 他。

### [5] 装身具

発掘調査中、古墳跡地の排土中より偶然ガラス小玉2個が発見された。青味がかかった緑のガラス玉で、2つの小玉が落花生状に連なっている。製作時の切り離しミスによるものであろう。個々の玉の形状は、玉の直径が0.3cm、穴の径が0.1cmで、正円というより糸穴方向の径が短く、玉の形状も不揃いである。

しかし、京塚古墳跡地からの出土であり、内部主体の舟形石棺に伴う副葬品にガラス玉類が存在したという証しであろう。なお、船山古墳後円墳北側裾部より32mほど離れた通称「船山古墳の水抜き」と呼ばれる一段下った個所からも、嘗てガラス玉の出土が見られたといい（註1）、これらも、江戸時代の京塚古墳の墳丘削平時の地撫しにより移動したものと思われる。

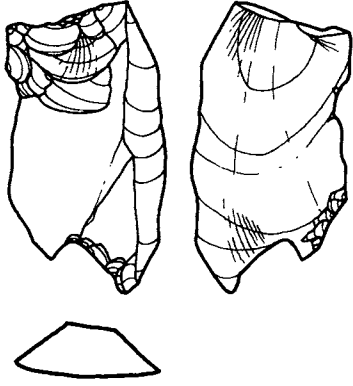
### [6] 古墳築造以前の遺物

京塚古墳の所在する清原台地一帯には、縄文早期の押形文土器をはじめ、後晩期の土器・石器片が散布する。

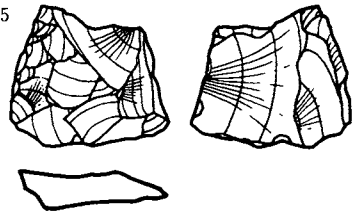
今回の京塚古墳跡地の調査時には、土器片はあまり検出できなかったが、黒曜石の剝片7点ほどが当該地より採集された。

剝片は、清原台地一帯に広く散布するが、船山古墳南側を東西に帯状に延びる畑地には特に多く見られる。この現象は、船山古墳造成とその後の畑地開墾等によって生じた地形と大きな関係がある。この窪地をなす帯状の地形は、古墳造成と後世の客土の狭間であり、この部分には後世の客土がなされていないため遺物の散布が多く見られることが、船山古墳周溝調査時に判明した。

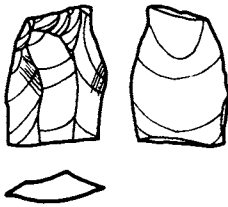
No-1



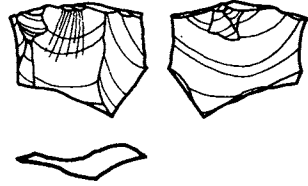
No-5



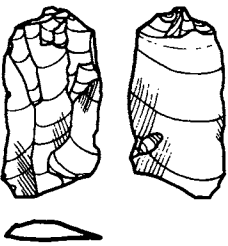
No-2



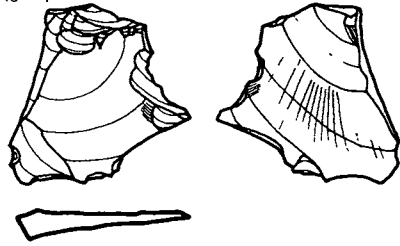
No-6



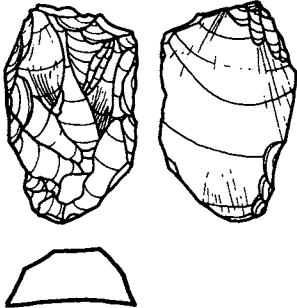
No-3



No-7



No-4



第28图 表面採集黑曜石剝片

第28図の「表面採集黒曜石剝片」の内、No-4の黒曜石には、二次加工の痕跡が認められる。他は剝片である。台地上にこのような剝片が多く見られるのに比して、これらを素材とした製品の散布が殆ど見られないのは不思議な気がする。

## [7] 中世時の遺物

### (ア) 瓦質土器

清原台地の北側の船山古墳周辺一帯には、中世時に小規模の集落が所在していたらしく、過去の調査でも種々の中世陶磁器、瓦質土器片が出土している。

瓦質土器としては、摺鉢・火舎が主体で、その破片の出土は周辺一帯におよぶ。今回の調査でも、船山古墳前方部方面から京塚へ到る掘道の内からと京塚古墳周辺より出土した。底部の小破片で、内部の搔上げ条痕が僅かに残る。昭和56年の調査時にも同様の破片3点が、京塚古墳西側試掘坑より出土している。

### (イ) 土師質土器

京塚跡地より、土師質土器の破片2点を表採した。器種は皿で底部に糸切り離しの手法が認められる。胴部には筥調整の跡が残る。

### (ウ) 礪 白

京塚の東方の畑地より礪白の上部が、周提調査時のNa-2試掘坑内より出土した。他にも礪白の破片が周囲より2～3点出土している。

### (エ) 青磁碗片

京塚古墳の周溝の南側より青磁碗片若干が表面採集されている。

## [8] 近世時の遺物

### (ア) 陶磁器

前回の調査では、黒牟田窯の摺鉢、武雄南部糸の摺鉢片、古伊万里の染付皿、同湯呑、嬉野焼の碗等が出土しており、中世から近世を通じてこの一帯に集落が営まれていたことが判る。

今回の調査で墓墳内より出土した陶磁片も、これら一連のものであろう。

### (イ) 銅 銭

56年の調査で寛永通寶が出土している。隣接する近世時の墓地に伴うものか、集落に関連するものか不明である。

## [9] 遺物から見た台地の変遷

遺物上から見て、当清原台地が人々の生活の場となったのは縄文後晩期頃からと思われる。古い押型文土器破片の出土も若干見られるが、ひとつの集落としての形をなすのは縄文後期末

頃からであろう。次の弥生時代の土器片も出土するが少量であり、相当規模の集落が営まれたとは考え難い。

古墳時代にはいと、当台地は兆域化され、姫塚古墳、京塚古墳、船山古墳、虚空蔵塚古墳、塚坊主古墳等の古墳が築造される。これら古墳から出土する遺物を除いて、同時期の生活遺物の出土は周辺畑地からは少なく、清原台地が居住地となっていた可能性は薄い。弥生と古墳時代は、清原台地上における集落の中断期ということができよう。清原台地の北部一帯に集落が成立し生活の場となるのは、墓域としての意識が大きく崩壊していく中世期からである。中世期の瓦質土器、陶磁器等日用雑器、碾白類の出土が、この間の事情を物語っている。これらの集落は引き続き近世にうけつがれたことが、古伊万里の染付や嬉野焼等日用雑器の出土により知ることができる。寛延3年前後行われた清原台地の開墾も、これら台地上の集落の人々を中心に実施されたものであろう。京塚古墳周溝内に設けられた掘りかけた井戸穴もそれらの生活の営みの証左であろう。台地開墾後、集落は船山古墳周辺からさらに江田川、菊池川に近い台地の西北端に移動し、明治を迎える。そして、この小集落が清原台地を去ったのは明治に到ってからであり、その記憶は今も地元の人々の伝承に残る。

註1 池田道也氏（菊水町歴史民俗資料館学芸員）の談話による。

# 第3章 古墳と周辺の現状

## 1. 古墳の復元

### [1] 復元への経過

今回の調査によって、その所在と位置が確認された京塚古墳については、早急に「菊池川流域風土記の丘整備事業基本計画」のなかに盛り込み、新設の石人の丘と共にこれを生かし復元整備していくことが、調査終了時点での課内会議で決定した。

整備復元の基本的な方針として、新発見の周溝については、現況のまま地下に埋め込み地表標示でもってその所在を示し、その完全保存に努めることとした。墳丘については復元となるため、墳丘部の高さ等についても低く抑え、将来復元墳丘であることが明白に判断できるように配慮することで基本設計にはいることになった。

古墳復元整備に当たっての、基本方針および詳細な復元計画は、以下の項目のとおりである。

### [2] 計画と現況

56年9月「熊本県菊池川流域風土記の丘整備構想」が発表され、区域内に含まれた史跡、遺跡、古墳などの保存・活用をはかると共に、風土記の丘が立地する、各市町の町づくりや、活力ある地域社会の推進にも期待が掛けられた。

この風土記の丘基本構想をうけて、57年9月には計画対象地区（山鹿地区、菊水地区、鹿央地区）ごとの構想が検討され、さらに構想の方向、整備方針など具体的な基本計画が策定された。

風土記の丘の指定をうけている菊水町清原台地一帯（菊水地区）は、江田船山古墳や、虚空蔵古墳、塚坊主古墳などが所在する最も有名な古墳地帯で、町営民家村、資料館などもあり、この一帯の中でも利用の中心をなしているところである。また、京塚古墳においては6月の試掘調査の結果、周溝が発見され中から多数の円筒埴輪や須恵器の破片が出土し、5世紀のものと推定される第5の古墳の所在が確認された。さらにそれ以前には近くから石人、石造物等が発見されており、こういったものの野外展示と共に、今回確認された京塚古墳の復元なども合わせ、基本計画に基づく「石人の丘公園」の整備が急がれることとなった。

### [3] 整備の基本方針

風土記の丘は、文化財を従来のように点としてではなく、面としてとらえ、しかも歴史的環境の中で保存することを目指している。従って石人の丘の景観構成は、遺跡を囲む地形、景観、植生など大規模な造成や不調和な構造物の建設は避け、できるだけ古代にかえり幽玄にして歴



史的な雰囲気をかもし出すことに努めることとした。

全体的な景観構成としては、古代、ロマン、幽玄、静寂などのイメージをもたせるため、張芝、植栽による自然緑地構成を図る。また、大規模な土工は行わないようにしているが、石人の丘造成、展示のため周溝、遺構などに支障がない範囲で最小限の切土、盛土を行い張芝修景を行う。

#### 〔4〕 機能及び展示構成

風土記の丘は、文化財や遺跡の復元保存と共に、資料館の設置や、屋外展示することによって一般に公開される。つまり多くの人々に、遺跡をたずね利用してもらい、古代を知ることによって、祖先や民族の心を後世に伝えようとするものである。

このためには、なるべく史実に近く復元し、古墳や石棺の内部、古墳と石人、石造物との関係など示し、古代の歴史に身を置くことによって、生活・文化の向上を図ろうとするものである。既に菊水町では、隣接して民家村を設け、歴史民俗資料館なども運営している。53年からオープンしているが、歴史探訪、研究、勉学施設としてその効果も高く、さらに内容充実に努めている。

この清原地区には、江田船山古墳など三つの古墳の外、すぐれた出土品も多く、特に石人の丘からは石人、石造物などが出土しているので、古墳の復元やこれらの屋外展示の整備によって、さらにふるさと顕彰や郷土意識の向上などにも役立つ文化施設としての機能を図る。

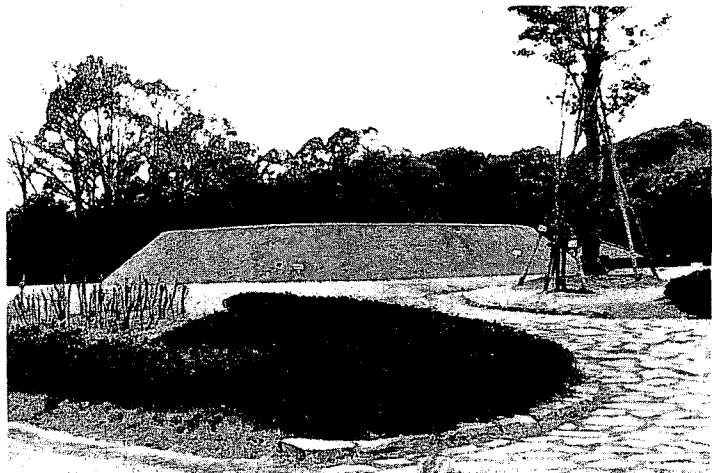
展示には、周遊歩道によって京塚古墳、石人の丘、展望台、催し広場、民家村と回遊できるコースを設定し、石人の丘から展望所一帯には、17基の石人・石造物のレプリカを展示する。

#### 〔5〕 京塚古墳復元計画

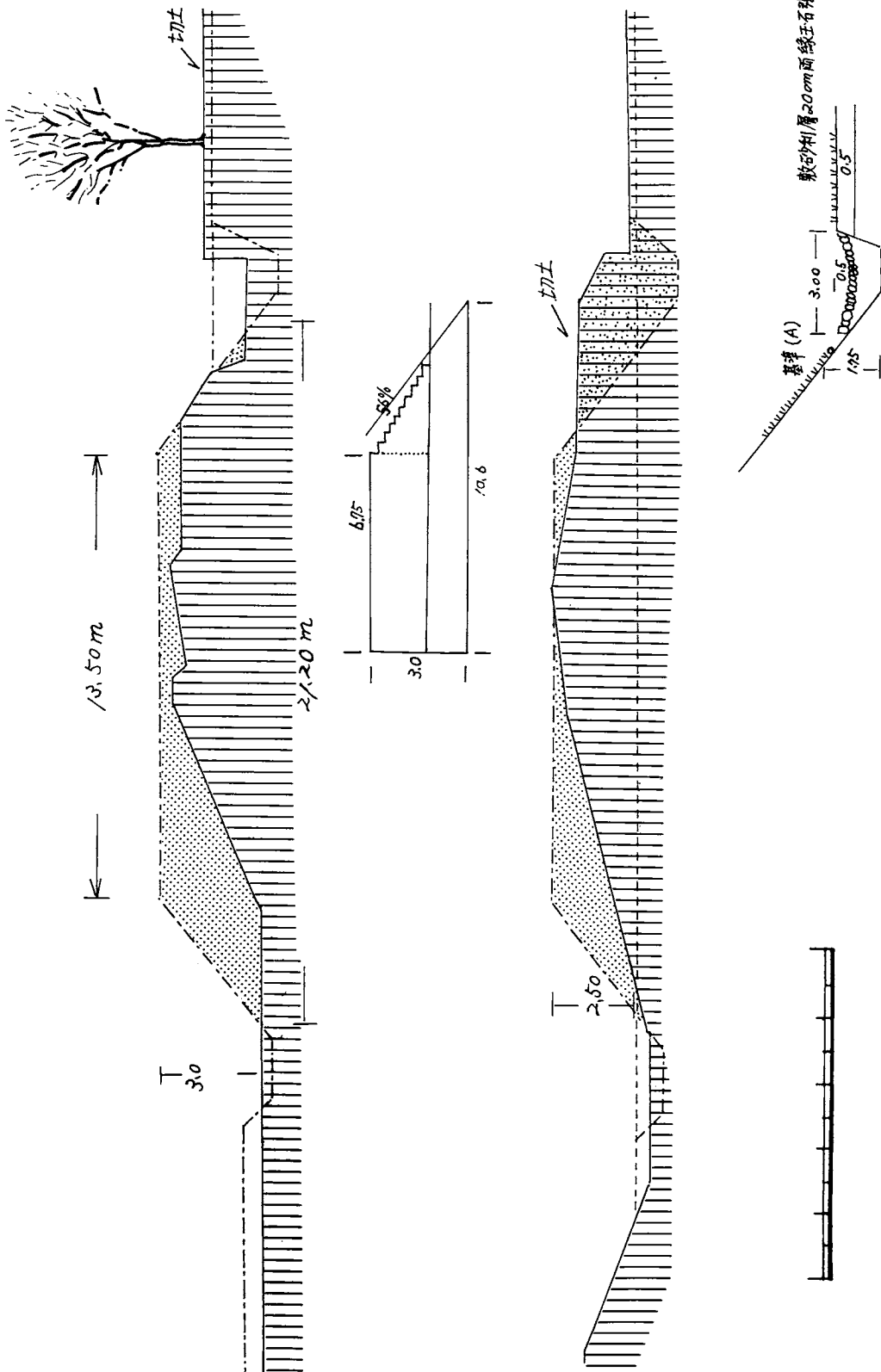
##### (ア) 盛土計画

①形……京塚古墳は発掘調査の結果、直径22mの周溝が確認されたことから復元の形は円墳とする。

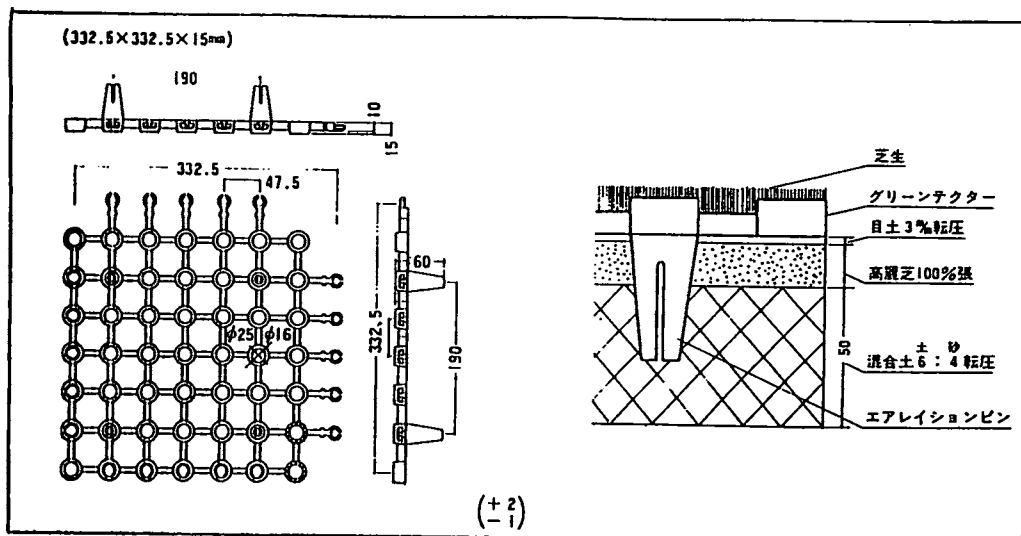
②土……盛土の土は（試掘坑の土色が赤褐色）周囲の残土赤土を使用する。不



第29図 復元整備された京塚古墳



第30図 京塚古墳墳丘復元計画断面図



第31図 墳頂部芝生保護体図

(大揮環境施設計画事務所石人の  
丘基本設計報告書より)

足土は、周辺畑から購入し同色、同等の土を使用する。盛土は30cm毎に転圧を行い、土砂流出を防ぐため表土全面に厚さ10cmの粘土（赤土）をはり地固めを行う。

- ③姿……盛土した円墳が規準点からの高さ5mの場合、石人の丘展望台より1.5m高い。石人の丘地点からの眺めは、船山古墳、虚空蔵古墳とのかね合いでは大きくうつり、近くの計画園路からは見あげる形となる。従って規準点南側で2.5m、北側で2.0mの高さに抑える。

(イ) 修景計画

- ①墳丘および法面……京塚古墳の墳丘復元造成は、30cm盛るごとに平らに地均しを行い、ローラー転圧を加える。法面は叩き仕上げとし、全面野芝による張芝仕上げとする。
- ②墳頂部……京塚古墳は、完全なる文化財の復元としてではなく、考古学上の推定復元による模造品と考える。従って墳頂部には舟形石棺残欠展示を行い、階段を設け登頂できるものとする。階段は石張階段とし、頂上部は土足による荒廃を防ぐためグリーンテクター（網）（第31図）等による芝生面保護を心がける。
- ③周溝……周溝部は、原形のままにすると雨水排水により穿掘の恐れがある。厚さの30～40cmは盛土被覆を行い、表面は幅40～50cm、両縁玉石、中砂利により側溝の機能を持たせる。
- ④階段……周溝の土橋部分に墳頂部に至る入口部を設ける。幅は1m、高さは2.5mで、17段の石張り階段とする。

## 2. 石人の丘

熊本県教育委員会では昭和54年以来、「菊池川流域風土記の丘」（仮称）の建設を計画し、山鹿市、鹿央町、菊水町の三地区を核として昭和58年度から事業に着手している。現在「石人の丘」（菊水町）、「古代の森」（山鹿市）など整備が完了し、ひきつづき他の整備事業も進行中である。

### 〔1〕 風土記の丘整備計画の概要

「風土記の丘設置要項」（文化庁昭和44年）によると、「歴史的、風土的特性をあらわす古墳、城跡などの遺跡等が多く存在する地域の広域保存と環境整備」をはかるもので、原則として面積165,000㎡以上の土地を公有化し、整備することになっている。

本県の場合、三地区合計68万㎡で、うち21万㎡を公有化する計画で、主な整備計画は第3表に示すとおりである。

菊池川流域は県下で最も遺跡の密集する地域の1つで、特に装飾古墳の多いところである。62年1月末現在県下に183基（石棺・石室67、横穴墓116）の装飾古墳があり、うち110基（同13基、同97基）が菊池川流域に存在し、風土記の丘内にはチブサン古墳、オブサン古墳、塚坊主古墳の3基と岩原横穴群（131基のうち8基）、鍋田横穴群（60基のうち16基）の合計29基が含まれる。また、このほか銘文大刀や鏡、冠、沓など多量の副葬品が出土した江田船山古墳や九州でも最も原形を保つ双子塚古墳を主墳とする岩原古墳群（9基）などは、風土記の丘の中心となるものである。これらの遺跡群を広域的に保存し、三地区を江戸時代の舟運が盛んであった菊池川や幹線道路の南関道（豊前街道）で関連づけ、県道を主道としてサイクリングロードや散策道などで有機的に結びつけようというものである。

### 〔2〕 石人の丘の整備

昭和59年度に完成した「石人の丘」の由来は、江田船山古墳の西側から石人、家形石製品（石殿）、腰掛（または俎）など3点の石製品が発見されたことにある。石人というのは、古墳時代後期の5世紀後半～6世紀前半ごろ、凝灰岩を彫刻して人物・馬・武具・祭器などを作り、墳丘上に立てたもので、これらを総称して「石人・石馬」と呼んでいる。県内では第2表のとおり12ヵ所から20余点（第4表）が見つかっており、この中から展示可能な17点を選び、実測図と写真に基づいて一部を復元して展示したものである。

日本書紀によると、継体天皇二十一年（527年）筑紫国造磐井が新羅と通じて、筑紫・火・豊の兵力を動員して乱を起こし、朝廷の百濟救済軍の渡海を妨害したため、磐井はその翌年討伐され、生前に造った古墳に立っていた石人・石馬などが朝廷軍によって破壊されたという記事

が記されている。磐井の墓は江戸時代以来の研究により岩戸山古墳（福岡県八女市）であると推定されている。この岩戸山古墳からは、武装石人・裸形石人・馬・猪・鶏・水鳥・鬘・蓋・鞆・盾・刀・埴など出土し、国指定重要文化財として八女市歴史民俗資料館に展示されている。



第32図 新設された石人の丘

磐井に従った火は火国

（肥前・肥後）、豊は豊国（豊前・豊後）である。石人・石馬の分布は福岡県、熊本県、大分県で、最近佐賀県からも見つかったことが報じられているが、ごく限られた地域の特殊な文化圏である。これらの分布はまさに磐井の勢力範囲と一致し、磐井文化圏そのものであるといえる。

以上のような特異な文化ということ、および江田船山古墳に近隣する地域（おそらく京塚古墳に関連が深いものであろう）から三点の石製品が出土していることから、菊水地区の整備の一環として「石人の丘」構想が生まれたわけである。

石製品の実測図は石人石馬研究会（代表九州大学岡崎敬氏）による図面を利用し、チブサン石人と富ノ尾石人については東京国立博物館の御配慮を得て、文化課文化財保護主事松本健郎氏、同嘱託故河北毅氏がおこない、その他の補足も松本氏が行った。実測図および写真に基づく可能な範囲での復元図は文化課参事桑原憲彰氏と隈が行い、大揮環境施設計画事務所（代表平嶋孝氏）が基本設計報告書を作成した。

石製品の複製は高木石材株式会社（代表高木光政氏）が行い、直接の彫刻は吉井講二氏及び佐藤弘徳氏が当たった。なお、整備事業の概要は下記のとおりである。（隈 昭志）

第3表 風土記の丘整備計画

○国指定 □県指定 △市町指定

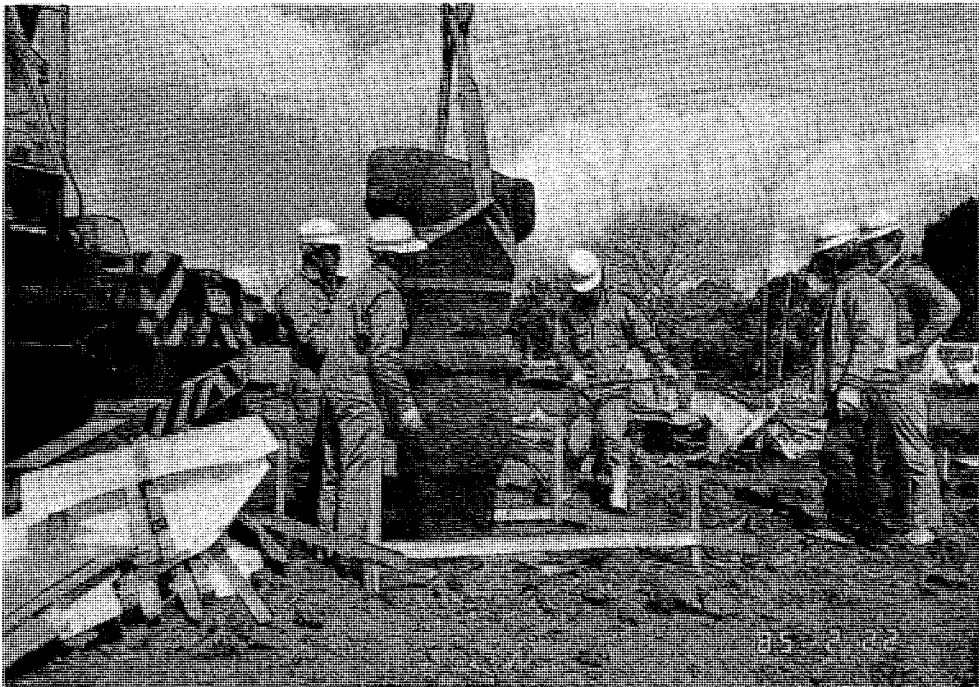
地区名	整備計画 (完成年度)	既に整備・設置されているもの
山 鹿	□オブサン古墳 (60年度) 古代の森 (60) 石棺の森  西福寺磨崖仏 駐車場2ヵ所 (1ヵ所(61))	山鹿市立博物館 サイクリングターミナル ○鍋田横穴群 (鍋田いこいの森) ○チブサン古墳 駐車場1ヵ所
鹿 央	○岩原古墳群 □岩原横穴群 資料館 駐車場2ヵ所 (2ヵ所(60))	
菊 水	○江田船山古墳 付塚坊主古墳・虚空蔵塚古墳 石人の丘 (59) △若園貝塚 展望所 駐車場1ヵ所 (61)	菊水町立歴史民族資料館 ○境家住宅 △民家村  駐車場

第4表 熊本県下の石製品出土地

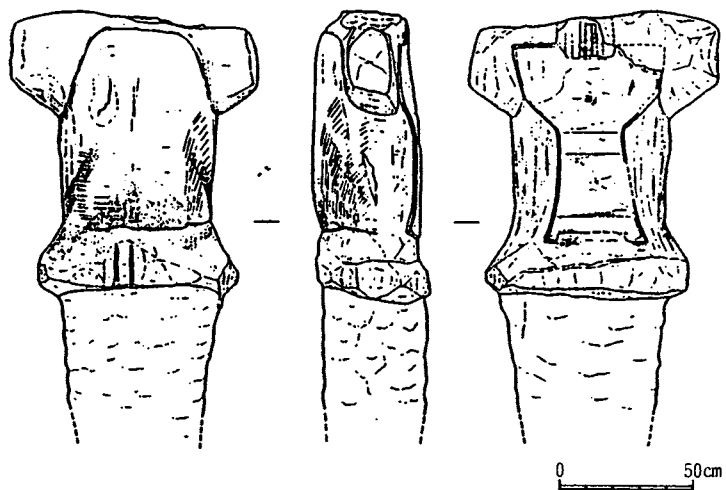
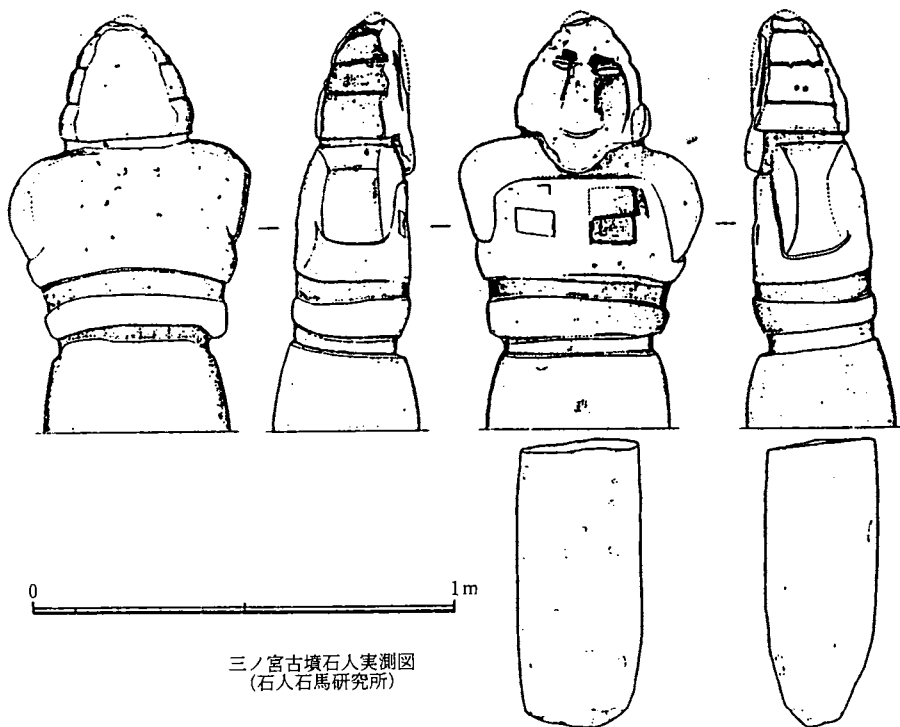
	遺 跡 名	所 在 地	品 名	復原 展示
1	三の宮神社古墳	荒尾市下井手三宮	武装石人	○
2	京塚古墳?	玉名郡菊水町清原	武装石人・石殿・腰掛(俎)	○3
3	チブサン古墳	山鹿市城西福寺	人 物	○
4	臼塚古墳	山鹿市石	武装石人	○
5	袈裟尾高塚古墳	菊池市袈裟尾	靱	○
6	フタツカサン古墳	菊池市木柑子	人 物	○
7	富ノ尾古墳群	熊本市池田町富尾	人 物	○
8	石ノ室古墳	下益城郡城南町塚原	蓋の柄?	
9	〃	同 上	靱(盾)	
10	今城大塚古墳	上益城郡御船町今城	石 函	
11	姫の城古墳	八代郡竜北町大野	翳・蓋・靱	翳4 蓋2 靱1
12	天堤古墳	同 上	蓋	○

第5表 事業概要 (主要文化財等)

区 分	概 要
石人・石製品等	凝灰岩による複製品製作17点、説明板等18点、高さ1m～1.5m 1. 県重要文化財 (木柑子石人、臼塚石人、清原石人等5点) 2. 重要美術品 (武装石人1点) 3. 東京国立博物館所蔵 (チブサン石人・富ノ尾石人2点) 4. その他 (ゆぎ・きぬがさ・さしば等9点)
京塚古墳	1. 昭和59年度確認調査 円墳 2. 直径約22m (周溝を含んで28m) 3. 内部主体は舟形石棺と推定される。周溝内からは多数の円筒埴輪が出土した。 4. 復元にあたっては、周溝を保存するため一部埋め戻し、地上高2.5mで整備復元した。
アズマヤ等	1. アズマヤ 木造平屋建 25㎡、1棟 2. パーゴラ 石柱 (白みかげ石6本) 21㎡ 1棟
植 栽 等	1. 高木65本、低木張芝等 2. ベンチ14基 3. 石張園路、シュタイン舗装園路、階段 4. 水のみ場 1基



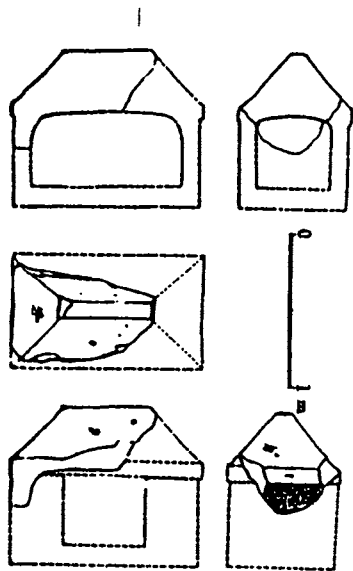
第33図 石人据付け工事風景



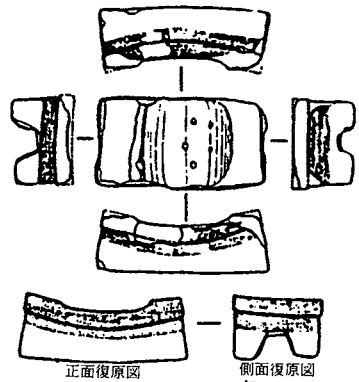
白塚古墳石人実測図

第34図 菊池川流域所在石人(その1)

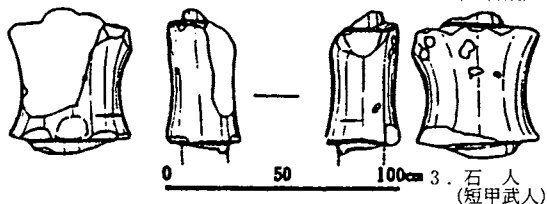




1. 家形石棺?  
(or石殿)

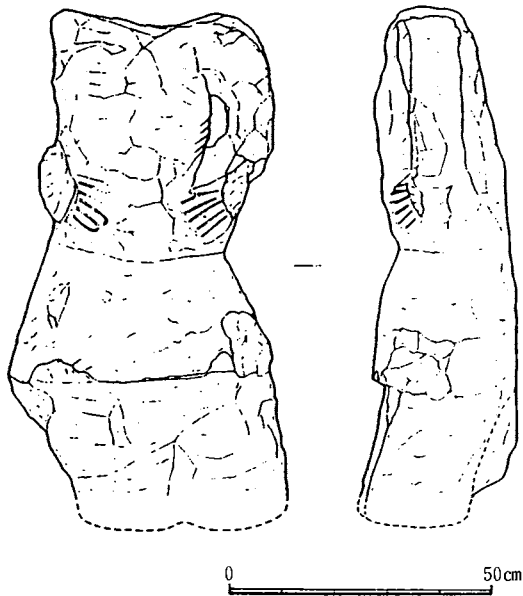


2. 石製腰掛  
(or石殿)

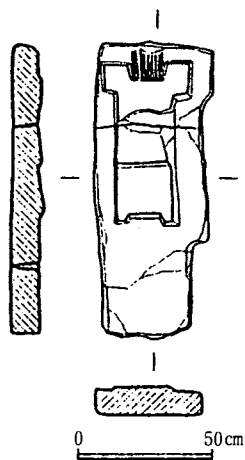


3. 石人  
(短甲武人)

木柑子石人 (フタツカサン古墳石人)



袈裟尾高塚古墳の韌



第35図 菊池川流域所在石人 (その2)

## 「石人の丘」説明板内容

**石人** 5世紀後半～6世紀前半頃、古墳に立てられたもので、人の形をしたものを石人といい、馬・鞆ゆぎ きぬがさ さしば・蓋・翳などをかたどったものを石製品という。一般には、石人・石馬と呼んでいる。これらは、福岡・熊本・大分の三県に分布する。熊本県での石人は、三の宮古墳（荒尾市）・臼塚古墳（山鹿市）・チブサン古墳（同市）・フタツカサン古墳（菊池市）・富ノ尾（熊本市）と清原古墳群せいばる（菊水町）から発見されている。また、石製品は姫ノ城古墳ひめのじょう（竜北町）から10余点、清原古墳群から石殿・腰掛が見つかったほか、袈裟尾高塚古墳けきお（菊池市）・天堤古墳あまつみ（竜北町）・石ノ室古墳（城南町）などからも発見されている。

このような石人・石馬は、筑紫国造磐井つくしのくにのみやつこいらいの墓とされる福岡県岩戸山古墳では、甲冑・鞆・楯・刀・鳥・壺など多数が見られ、熊本地方が磐井の文化圏と深い関連を持っていたことがうかがわれる。

**翳（さしば）** 絹や鳥毛で、うちわ形をつくり、長柄をつけて左右から貴人の前方にさしかける儀式用具である。

**蓋（きぬがさ）** 翳が貴人の前方にさしかけるのに対し、蓋は貴人の上を覆う傘形のもので、儀式の用具である。

**鞆（ゆぎ）** 矢を入れて背に負う武道の一つである。「ゆぎ」は「矢筈やげ」から転じたものといわれる。

**清原石人付石製品一括** この周辺から、これらの石製品が発見されたので、この一帯を石人の丘として県内の主要石製品を含めて整備したものである。この地から出土した石製品は、石殿（家形）、石人、腰掛（または俎）の三点である。

## 第4章 総括

### 1. 京塚古墳の概況

京塚古墳は、玉名郡菊水町大字江田の清原台地上に位置する。この台地上からは、嘗て「大久保石棺」や、「清水原石棺」等数基の石棺が発見されており、現在も国指定史跡の江田船山古墳をはじめ虚空蔵古墳、塚坊主古墳等墳丘を持つ古墳が現存する。この外、今迄に消滅した古墳を含めると、清原台地上には、少なくとも五基以上の古墳が存在したと考えられる。当京塚古墳も、その消滅した古墳のひとつである。

調査時には、すでに墳丘はなく、その所存場所さえ確認できない状況であった。ただ、幸いなことに、船山古墳の北西一帯の麦畑に「京塚」の地名が残ることや、周辺から船山古墳や虚空蔵古墳出土のものとは異なる埴輪片の出土を見ることなどが、第5の古墳の存在を僅かに暗示していた。

第一次調査の試掘坑設定により、現在も古墳の周溝部が存在することが確認され、古墳所在場所の確定を見た。所在場所は、350番地と355-1番地で、船山古墳墳丘のくびれ部墳裾線より西方に32.50mの所である。

続く第二次調査の周溝部全掘により、墳形の平面プランが確認された。周溝部がほぼ完全に残存しており、西側では、周溝を横切る土橋部の状況も把握できた。土橋の両脇は、周囲に露頭する花崗岩を野面積にし固められていた。

また、北側の周溝両斜面に掘り込まれた方形をなす柱穴群は、当古墳に伴う儀式の挙行を推測せしめた。周溝内には、埴輪片をはじめとする遺物が落ち込んでおり、古墳の築造時期を推定する目安となった。

周溝の完掘によって確認された当古墳の規模・形状は、以下のとおりである。平面プラン上における墳丘基底部の直径は、東西21.40m、南北22.30m、周溝幅は3m（最大3.70m、最小2.10m）前後、周溝断面は逆台形状に近く、底部に幅0.5m程の平坦面がある。深さは、もっとも原形を留めると思われる北側で、約2m前後を計る。

墳丘は、畑地に削平されて消滅しているが、墳丘基底部の直径は22m、墳裾に掘られた幅3mの周溝を含めると、直径28mの規模を持つ古墳（第36図）であったことが判かる。畑地造成されているため墳丘の高さ、形状等は不明であるが、350番地と355-1番地境を東西に走る土手の段差は、かつての墳丘を均した際の名残とも見える。

周溝間直径が22mほどで、内部主体が舟形石棺であったことなどから、墳丘は6m程度の截頭形の円墳であったことが推定される。また墳丘には葺石が施され、円筒埴輪が立て巡らされていたことも周溝内に転落した円筒埴輪から推定できる。落ち込んだ葺石の量は少ないので、

第6表 墳丘の規模と形態

	調査時点数値	補正数値	備考
墳形	円墳		
墳丘基底部直径	東西21.40m、南北22.30m	22m	
墳丘総直径	東西28m、南北27m	28m	周溝を含めた数値
周溝の深さ	約2m(調査時表土より)		北側部分数値
周溝の幅	約3m(最大3.70m、最小2.10m)		
土橋(入口部)	有、墳丘のほぼ西方		両脇に花崗岩石積みあり
墳丘の高さ	調査時点では認められず、消滅	5m~6m(推定)	
墳丘頂部の形	截頭形古墳(推定)		
葺石・埴輪	葺石、円筒埴輪・有り		形象埴輪もあり
内部主体	舟形石棺		棺身の一部が残存

墳丘に施された量も少なかったものと思われる。

当古墳の内部主体は舟形石棺であったと推定される。以前は、舟形石棺の棺材が近くの墓地の樁の根元に放置されていたが、戦前は京塚古墳墳丘中央部の畦部の茶樹の根元にこの石材が積まれてあったという。この舟形石棺が当古墳の内部主体であったことは明らかで、江戸時代の開墾時に出土し、破却されたものと思われる。他にも石棺の縄掛突起が周辺より出土しており、墳丘内に数基の石棺が存在した可能性は強い。

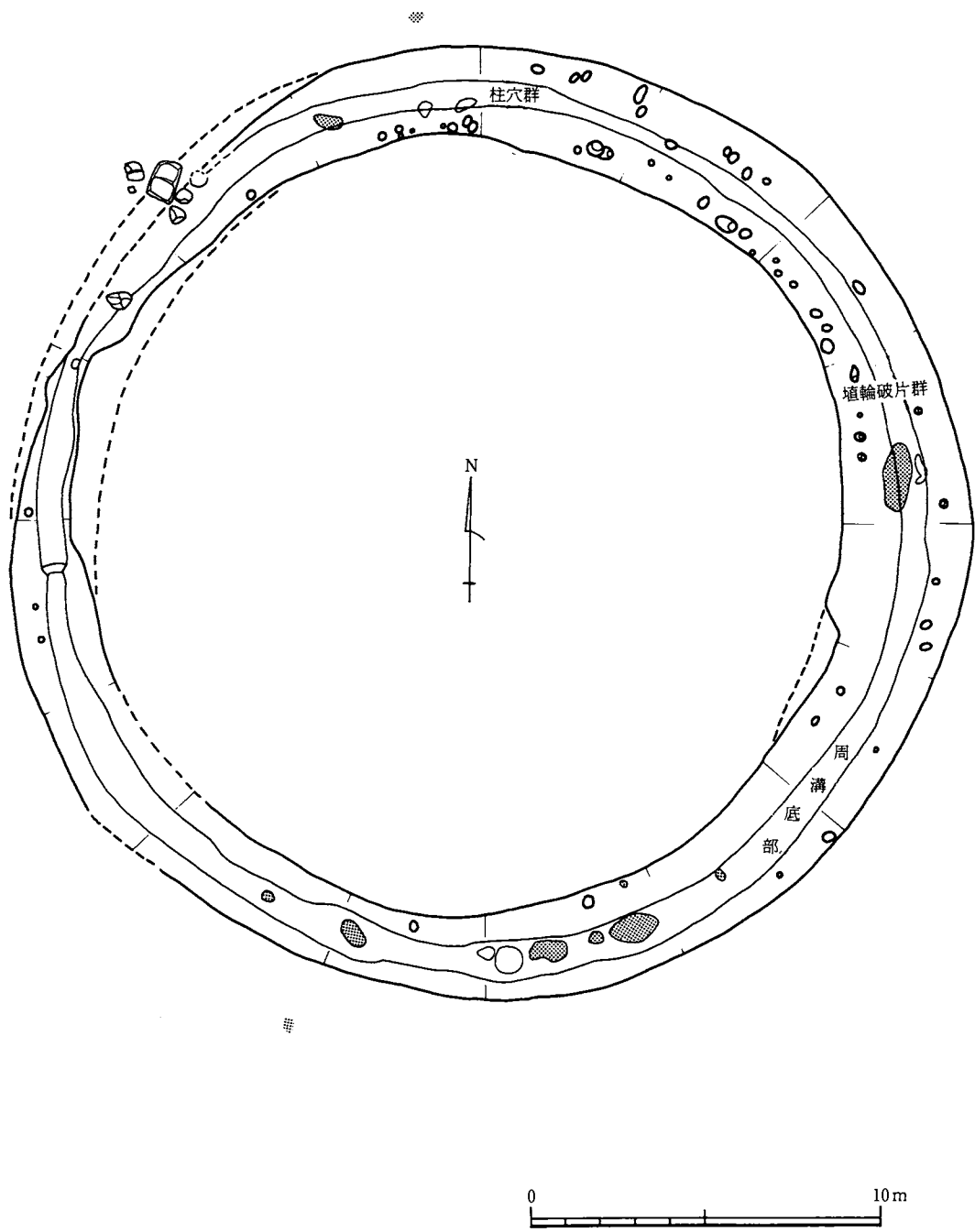
古墳築造後の中・近世の遺構としては、道路跡、土壇墓、井戸等がある。道路跡は南の虚空蔵塚古墳横から京塚古墳方向に走るN-23°-E方向に進路をとる道路で、近世初期頃までの陶磁器片が、掘り込まれた道路面より出土している。中世から近世中頃まで存在した道路と推定した。京塚古墳北側の微高地一帯に存在した、4~5戸からなる小集落に至る道路だったようである。廃棄されたのは、清原台地の大開墾が行われた寛延年間(1748-51)のことと思われる。その際、京塚古墳墳丘と運命を共にしたのであろう。

京塚古墳南側のこの道路の左右路肩から、5基の土壇墓が発見された。120cm×90cm前後の長方形の土壇墓で、墓標や出土遺物は見られなかった。埋土中に混入していた陶磁器片等から、埋葬年代は近世初頭と推定した。

また、この道路沿いの京塚古墳の南周溝底部より井戸跡が発見された。直径80cmの素掘りの井戸で、小集落に関連する遺構と思われる。約4.5m排土したが、スコップが使えず危険であるため作業を中止した。

京塚古墳跡地から出土した遺物は、古墳築造以前の縄文・弥生時代の遺物と、当古墳に伴う遺物、築造後の遺物等に分けられる。

中世時の遺物は、瓦質土器、土師質土器、青磁器、その他の遺物が出土した。瓦質土器は摺



第36図 京塚古墳の周溝全体図

鉢、火舎が主で、土師質土器は糸切り離しの燈明皿、青磁器は碗の破片、その他礫白片等が出土している。近世遺物は、佐賀で焼かれた陶磁器片で、銅銭なども出土している。これらの遺物は、中世から近世にかけて所在した小集落に伴う遺物であろう

古墳に伴う遺物としては須恵器、土師器、埴輪、玉類等がある。なかでも、先述の大形柱穴群と共に注目されたのは、周溝内から出土した須恵の鈴付き高坏である。腰の部分に3個の鈴を持つ高坏で、本邦初出土と思われる。鈴は鎮魂の道具で、祭祀に使用されたものである。他に、当地方では出土例の少ない子持ち壺も出土しており、墓前での儀式の施行を想定させ得るものである。

また、古墳の周溝を跨いで残る柱穴から推定される4.5㎡程の建物は、これらの儀式に伴う遺構と思われ、殯に伴う喪屋、祭壇等であった可能性が高い。

須恵器としては他に、中形甕、壺、高坏（三個体分）等があり、土師器には盃と甕がある。装身具としては、緑の小玉が排土中より発見された。京塚に伴う埴輪小片は、調査以前から当該畑地内に散布しており、第5の古墳の存在を推定せしめる有力な根拠となっていた。今回の調査では、周溝内の11か所から、墳丘より転落した円筒埴輪群が発見された。大破片というより円筒形を遺す形での出土が、周溝内で万遍なく見られた。円筒形をのこす埴輪のなかには、円筒内に直径1cm～2cmの小砂利を詰めたまま落ち込んだものが3例ほど認められた。これらは、埴輪を墳丘に配置した際に、倒壊防止の目的で詰められたものと推定した。また、埴輪の外壁面に、○や×印が刻まれたものがあり、○×の概念が現在同様存在したと考えられる点興味深い。

京塚古墳の築造年代であるが、その推定の手掛かりとなるのは、周溝より出土した土師器、須恵器類であろう。土師器は、盃および甕の二点であるが、両方共に、周溝の底部近くより出土したもので、古墳築造時のものと思われる。甕は、胴部が球形をなし、口縁は外反し、器形は「塚原古墳群出土土師器分類表」によると、「甕形土器のⅢ類」に酷似するものである。口唇部の外側への尖りが若干異なるが、製作者の個人差と考えてよいと思う。この器形の頃から、塚原では土師器に国産製の須恵器（陶邑編年のⅠ型式）を伴うことになり、5世紀後半頃のものとして推定している。

京塚古墳出土の須恵器については、国産か外国産か意見が分かれ確定できないが、鈴付き高坏、子持ち壺等の形状手法等から、5世紀中頃の製作と思われる。従って古墳築造年代もこの時期と見てよいのではなかろうか。

隣接する船山古墳から出土した須恵器類を陶邑産とし、陶邑編年のⅠ型式の3段階として捉えることが可能であれば、京塚古墳もほぼ同時期であろう。そして、内部主体が船山古墳の場合横口式家形石棺であり、京塚古墳の場合舟形石棺である点などから、時期的には船山古墳より当古墳の築造を若干古く、5世紀中頃に持っていつてもよいのではなかろうか。

## 2. 京塚古墳の終焉

京塚がその墳丘を失ったのは、それほど古い時期のことではない。それは、現在でも京塚古墳所在地一帯の下げ名に、京塚の名を留めることから推測される。また戦前まで、350番地と355-1番地との畑境いの茶株の横には、舟形石棺の残存物およびその部分石材が積まれてあったという。それはかつての京塚古墳の墳丘が所在した場所の中央付近に当たる。戦後は、さらに西北の30mほど離れた、椿の木立に囲まれた江戸期の墓地の一隅に移転、放置されていた。従って、この舟形石棺の残骸は、京塚古墳の内部主体のひとつであったことは明白である。

さて、この京塚古墳の墳丘が壊され、舟形石棺が残骸を晒すに到った時期は、いつの頃だったのであろうか。それを解明する史実が、今ここに2つある。第1は、昭和59年に実施した京塚古墳の試掘調査の結果である。その時、現虚空蔵塚古墳方向から登って来る1本の道路跡が発見された。この道は、京塚古墳周溝の手前12



第37図 台地開墾の記念碑

m位のところから、地山面に掘り込みを残しながらN-23°-Eに進路をとり、古墳周溝内に入ると、古墳墳丘部にさえぎられ、N-5°-W方向に進路を変え、同古墳周溝と重なり合いながら、弧を描き再び周溝から北方へ抜ける。つまりこの道は、その進路を古墳墳丘部によって遮られたため、意図的に進路をかえ、当時窪みを残していた周溝部内をとおり、後、西側周溝の外周壁を突き破って外へ抜けているのである。

この掘り道の底部からは、江戸初期頃の陶磁器碗片数点が出土しており、当時まで道路として使用されていたことが判る。また、この道路を挟んで土壇墓5基が発見されたが、そのうちの1基の埋土中から江戸中期頃の陶磁器片が出土しており、同時期の墓であることが確認できた。この5基の土壇墓は、いずれも道路を意識して道の左、右路傍に設けられており、道路と土壇墓との間に切合い関係がないので、同時期に存在したことは明らかである。従って、この道路の存在した、遅くとも江戸中期頃までは、京塚古墳の墳丘と同周溝は存在していたことが判る。

第2は、清原台地内に残る江戸期の石塔の記録である。現在この2基の石塔は、石人の丘左



第38図 先亡五人塚碑

手の椿群の根元に所在し、四人塚、五人塚として親しまれているが、風土記の丘の整備時に移転、復元されたもので、元位置を保っているものではない。

双方とも、江戸期によく見られる墓石の形態をとるが、正面の刻名が普通の墓石銘と異なる。

四人塚の方の銘は、右から「寛延三年・先亡四人塚・

三月廿日」と三行に亘って刻まれ、五人塚の方も同様「寛延三年天、先亡五人塚、三月六日」とある。

これら2基の記銘の「先亡四人塚」の亡が凶と見えるため、永らく「先凶四人塚」と読み、地元では処刑された悪人の墓ではとの付会の説もあった。ここで起る疑問は、2基の石塔が何故に寛延3年に、しかも1基は3月6日、1基は3月20日と、同年同月にしかも相次いで建立されたかという点にある。先亡四人塚にしろ五人塚にしろ、先に亡くなった四人の塚、五人の塚の意味であろうし、特定される名称を持つ人の墓ではないようである。正面以外の記銘はないので建立者名も不明であるが、特定の人の墓ではないので、建立者も個人ではないのかもしれない。

石塔の建立された寛延3年は、西暦1750年で江戸中期、8代将軍吉宗の享保の改革の15年後に当たる。吉宗は農村対策として、定免制の実施などにより年貢収納を強化、新田開発や甘薯などの新作物の栽培と増産を全国的に奨励し、米価の安定等を計っている。また寛延3年を7年遡る寛保3年（1743）2月には菜種栽培を奨励している。ここで全国の田畑面積の推移を見ると、慶長年間（1596～1614）が約160万町歩、約100年後の享保年間（1716～1735）が約290万町歩で約1.8倍の伸びとなっている。それから150年後の明治7年（1874）では約300万町歩で江戸後期の伸びは少ない。つまり、享保期頃には全国的に新田畑開発は最高潮に達していたことになる。

このような当時の情勢下から考えると、以下のような推測も成り立つのではなかろうか。「寛延3年3月6日、折しも地元農民による清原台地の開墾、いわゆる野開きが進行中であった。起伏の多い台地上を削り畑地造成を進めているとき、その内の小山（古墳墳丘）のひとつから、石棺が発見された。（石棺は数基であったかも知れない。）いずれにせよ内部より人骨5



体が出土、このため祟りを恐れた地元民は人骨を邪魔にならない他所に改葬し(註2)、事業を進めた。続いて14日後の3月20日にも再び人骨4体分が出土し、これも先の場所の隣に並べて改葬、その後、人骨を納めた土壌の上に先亡五人塚、先亡四人塚の石塔を建て村の先祖の墓として厚く供養した。」

以上のような経過を想定する時、これら寛延3年記銘の2基の石塔を、当清原台地開墾の記念碑と見ることも可能ではなかろうか。そしてこの時点が、清原台地の古代の奥つ城(墓所)という概念からの訣別であり、京塚古墳の終焉であったと思われる。

註1. 池田知義氏(同町在住)によると、舟形石棺の所在個所は、かつては自宅の所有地であったため、よく訪れており、記憶に間違いはないという。

註2. 昭和56年菊水町が実施した「清原遺跡確認調査」時に石塔下の土壌を発掘、改葬したと推定される人骨の存在が確認された。

## 付録 関連文献抄

# [ 1 ] 菊水町文化財調査報告書第 1 集「船山」(玉名郡菊水町清原遺跡確認調査)・昭和51年発行「27、34、35ページより抜萃」

## 古墳伝承地の調査

石棺が出土したり、伝承的に塚があったとされている地は三箇所ある。(イ)京塚、(ロ)首塚、(ハ)オクボサンの墓。

①京塚(21、22図参照) 現状は段々畑の内の一枚の畑となっている。出土した石棺は舟形(32図参照)。

第1トレンチ(SMO 4-01)に溝があった。埴輪(17図33~35参照)に混じって近世磁器、礫等があった。石墓の溝。但し、埴輪の焼成は本台地中の最高級品。土管状の口縁部と底部の差がないもので、タガは高く調整は入念である。船山古墳以外の古墳が埋没していることは確実。

第2トレンチの最北東端に30cm弱の段と溝があった。(22図(2)参照)一枚の畑をおいて次の畑をボーリングした結果、溝らしきものがあつた。古墳の隍か。

第3トレンチにも隍があつた。(21図、22図(3)参照)船山古墳の隍と接しても存在し、第4トレンチにもあつた。隍の断面形状よりみて古墳隍に近い。しかし、土壤観察の結果を主観的に記すと非古墳である。

5・6トレンチの隍は土壤上は古墳隍に近いが、全形を知ることは出来なかつた。遺物の出土もなかつた。1トレンチ・4トレンチには近世家屋址があり、近代初期以前の土製オハジキ(弁財天?)が出土した。

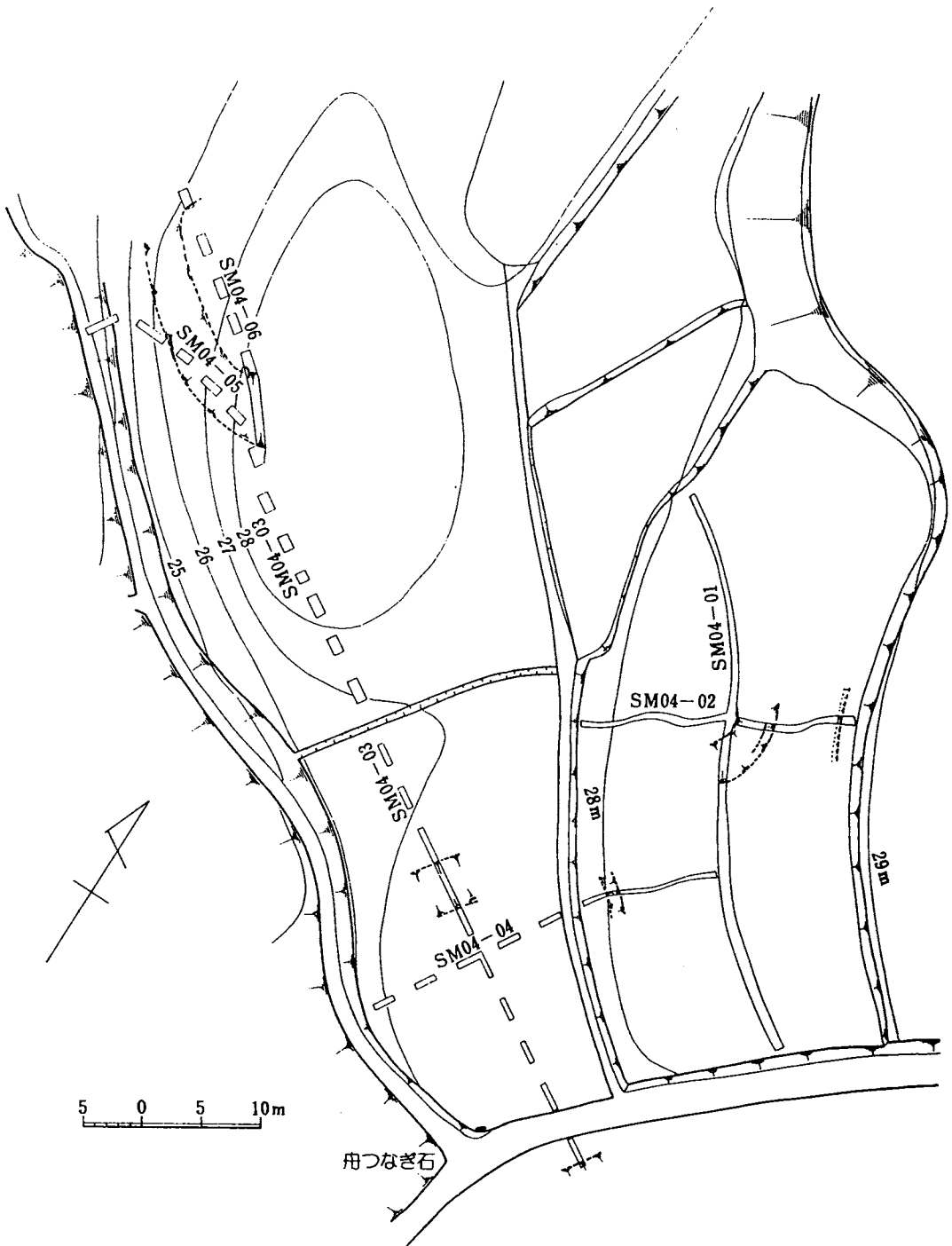
②首塚(2図参照) 伝承は2~3mの小円丘と礫の山があつたということである。掘削の結果は、近世初頭の性格不明の凹地であつた。

③オクボサンの墓(25、26図参照) 現在県道になっている所から家形石棺が出土している。(32図参照)

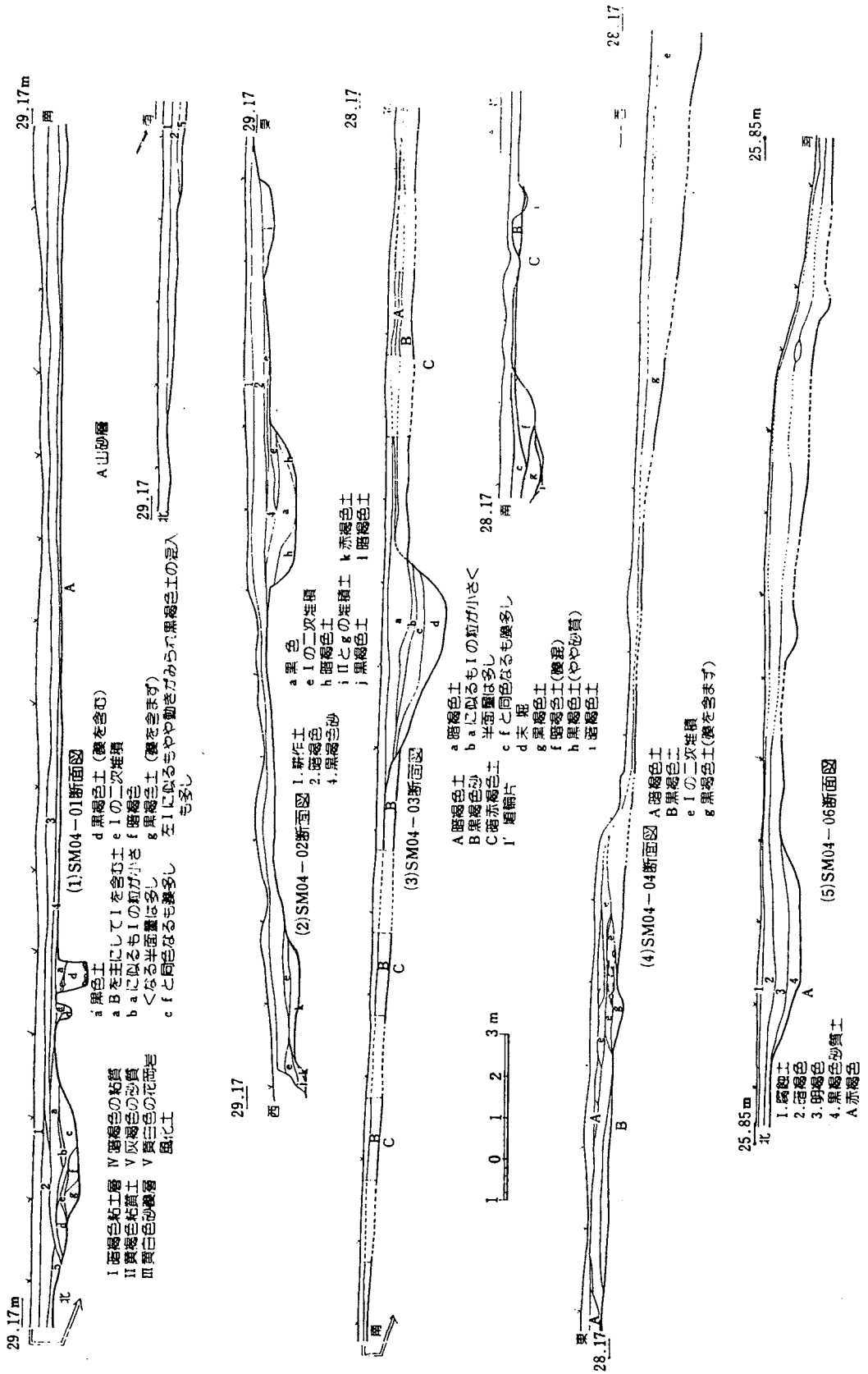
IIIトレンチのa, c, mの各区より埋没溝。a区のそれは、古代以降、他は時期不詳。

IVトレンチのa, b, g区より埋没溝、何れも時期不明。b区は新しいか。SOO 3-d区より壺棺出土。(25、28図参照写真P.10参照)調査の下手際によって土壤把握が不十分。時期は船山古墳よりも若干古いものである。

尚、III・IVトレンチ中「オクボサンの墓」標柱近辺の地山が最も比高が高い。この周辺に時期不明とは言え、溝が走っていることは古墳存在を疑わせるに足る。(SOO 3-m区の最北端の溝はVトレンチの溝に連結するか。)(西田道世)



第21図 京塚(伝)周辺トレンチ位置図



29.17 m

29.17 m

(1) SM04-01 断面図

- a 黒色土
- b Aを主としてIを含む土
- c Aに似るもIの粒が小さく半面層は多し
- d 黒褐色土 (礫を含み)
- e Iの二次堆積
- f 暗褐色土
- g 黒褐色土 (礫を含み)

- I 暗褐色粘土層
- II 黄褐色粘質土
- III 黄白色砂礫層
- IV 暗褐色の粘質土
- V 暗褐色の砂質土
- VI 黄白色の花崗岩風化土

A 山砂礫

29.17

左Iに似るもやや動きがかられ黒褐色土の混入も多し

29.17

(2) SM04-02 断面図

- a 黒色
- b Iの二次堆積
- c 暗褐色土
- d IIとgの堆積土
- e 黒褐色土

29.17

- 1. 耕作土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 黒褐色土

28.17

(3) SM04-03 断面図

- a 暗褐色土
- b aに似るもIの粒が小さく半面層は多し
- c 暗赤褐色土
- d 未肥
- e 暗褐色土
- f 暗褐色土 (礫混)
- g 暗褐色土 (やや砂質)
- h 暗褐色土
- i 暗褐色土

28.17

- A 暗褐色土
- B 黒褐色土
- C 暗赤褐色土
- I 腐植片

28.17

(4) SM04-04 断面図

- A 暗褐色土
- B 黒褐色土
- c Iの二次堆積
- d 黒褐色土 (礫を含み)

28.17

28.17

25.85 m

25.85 m

(5) SM04-06 断面図

- 1. 腐植土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 黒褐色土質土
- A 暗褐色土

第22図 京塚(伝)トレンチ位置図

## [ 2 ] 熊本県文化財調査報告書第55集「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」(昭和57年 熊本県教育委員会発行)より抜萃

### キョウツカ 京塚 (伝) 古墳周辺 (第15～17図)

50年度調査で確認された消滅古墳の一つ京塚古墳については、今回は調査し得なかった。

1・2号トレンチでは10cm前後の耕作土の下は地山面であるが、遺構は全く検出されなかった。段々畑を1枚に均らすためにかなりの削平を受けたとの事である。

3～6号トレンチは50年度調査で性格不明の溝と報告された地点に設定したものである。今回3～5号トレンチを拡張完掘したが、溝とは考えにくい。南北方向で10.35m、東西方向で6.7mを測るL字形の土壇状を呈する。土壇内からは黒曜石剝片の他に縄文時代中期の土器底部が床直上に出土しており、上層の瓦器・陶器片を出土する堆積土とは明らかに古い時期と考える。

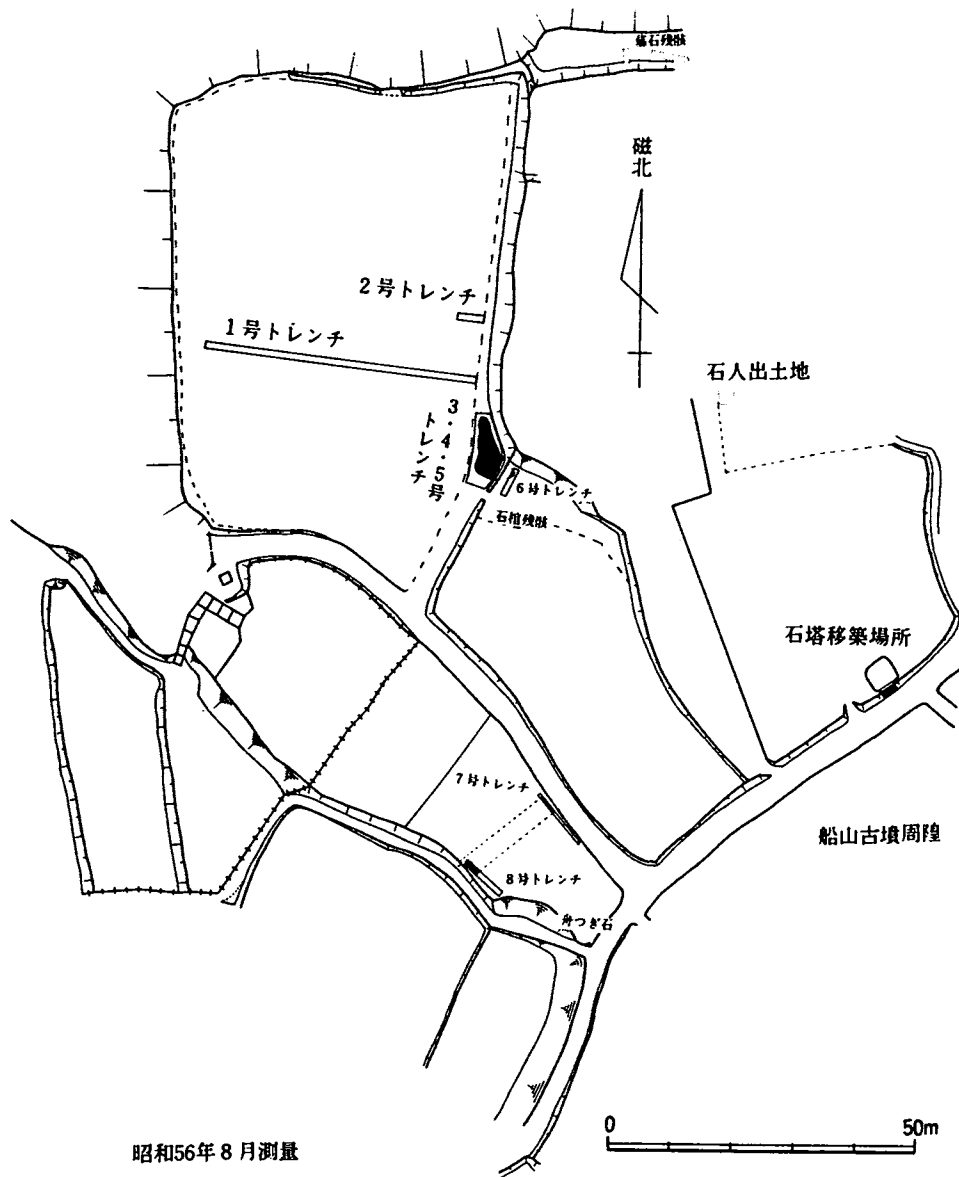
7・8号トレンチで確認した溝状遺構は北東―南西に走る同一溝であろう。7号トレンチ確認の断面形状は南東側が緩やかに、北西側がやや急に立ち上がっており古墳周溝に似るが、古墳時代遺物が全く出土しておらず、周溝とは考え難い。確認面より上の堆積土からは近世陶器片が出土しているが、溝覆土の出土遺物が無く時期は不明である。

出土遺物 (第18図) 今回設定したトレンチでは古墳時代遺構を検出できず、出土遺物も古墳時代のものは皆無であった。出土遺物は、縄文式土器・瓦器・陶磁・石器・古銭である。

1・2は縄文式土器である。1は深鉢形土器の底部で、底径10.9cm、底部厚さ1.6～1.9cmを測る。焼成やや不良で摩耗し、調整不明である。色調はにぶい褐色～暗褐色を呈す。中期か後期のものであろう。2は高坏形土器の脚部で、復原底径7.3cm、あげ底の厚さ3.2cmを測る。焼成やや不良で風化著しく、調整不明である。色調は赤褐色を呈す。晩期のものである。

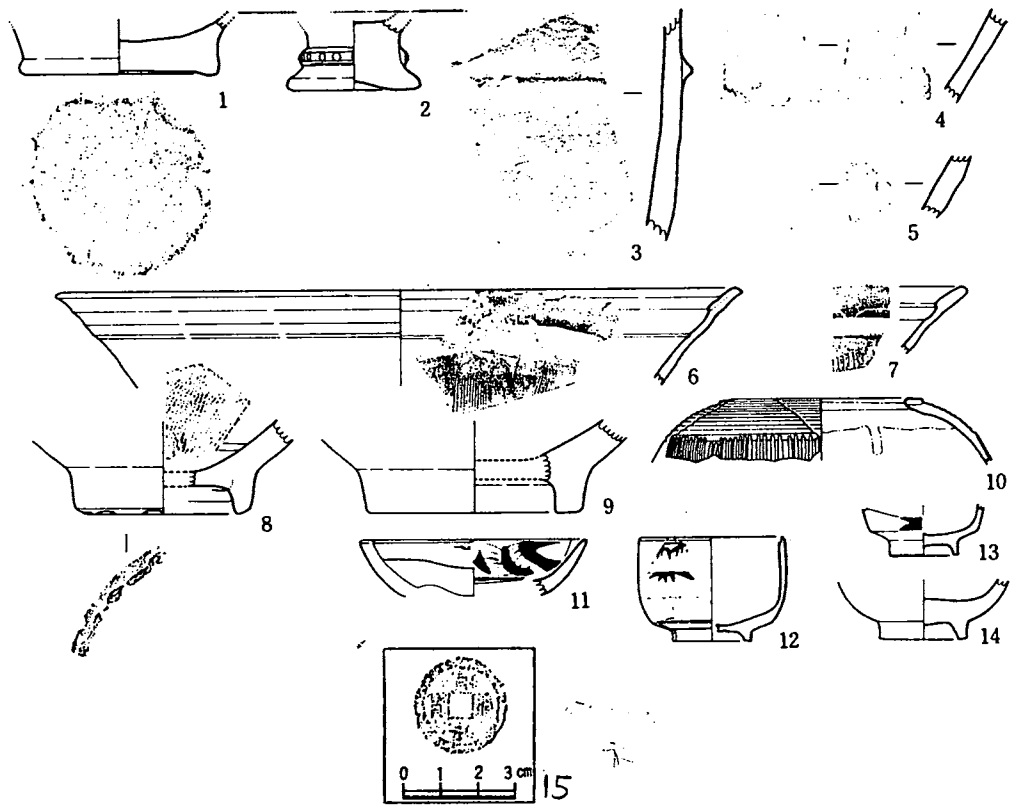
3～5は瓦器である。3は火舎で、突帯の上に鈍い円弧を重ねた文様のスタンプが捺されている。内面は摩耗して不明だが、外面はヨコナデを施している。4・5は播鉢破片で、ともに内面に条線が残っている。焼成良好で、色調は灰白色～褐色を呈す。

6～14は陶磁器である。6・7は黒牟田窯の播鉢で、ともに焼成良好、胎土赤褐色を呈し、内側へ折り返した口縁部内外に暗赤褐色の釉薬がかけられている。6の復原口径37.6cm。8は武雄南部系の鉢底部である。焼成良好、胎土は赤褐色を呈する。畳付きを除く内外面に暗赤褐色の釉薬がかけられている。内面には重ね焼きの痕の砂粒帯が残っている。復原底径11.9cm。9は武雄南部系の播鉢底部である。焼成良好、胎土は赤褐色を呈する。内面の条線は10本単位である。高台内側端付近を除く内外面に灰褐色の釉薬がかけられている。内面と畳付きに重ね焼の痕がみられ、内面に砂粒帯がめぐり、畳付きに剥がれた粘土が付着している。復原底径9.6cm。10は黒牟田窯の香立である。外面上位に横位凹線9条と中位に縦位の凹線が施されている。



第15図 京塚（伝）古墳周辺平面図

復原口径9.4cm。焼成良好で、胎土は暗赤褐色を呈する。外全面と内面上位に暗赤褐色～黒褐の釉薬がかけられている。11は古伊万里染付皿で、復原口径12.5cmを測る。胎土は白色を呈し、全面に薄白色の釉薬がかけられている。染付の横線は暗緑灰色、文様は暗青灰色であり、文様はややくずれているようである。12は古伊万里染付湯呑である。復原口径8.0cm、高さ5.6cm、底径4.3cmを測る。胎土は灰白色を呈し、全面に薄青灰色の釉薬がかけられている。染付は暗青灰色で竹文を描いている。畳付きに重ね焼きの痕がみられる。13も古伊万里染付湯呑である。復原底径3.8cm。胎土は白色を呈し、全面に薄白色の釉薬がかけられている。染付は暗青色で濃



1-3-4号トレンチ, 2・14-5号トレンチ, 8-13-6号トレンチ  
3・5-7号トレンチ, 4・6・7 -8号トレンチ

第18図 京塚（伝）古墳周辺出土遺物実測図

淡があり、文様は不明である。14は嬉野焼の碗で、高台は削り出しである。胎土は浅黄灰色を呈し、高台内外面を除く他の内外に灰釉がかけられている。底径4.8cm。

15は直径25mm、縁の厚さ1mmを測る寛永通宝で、8号トレンチから出土した。

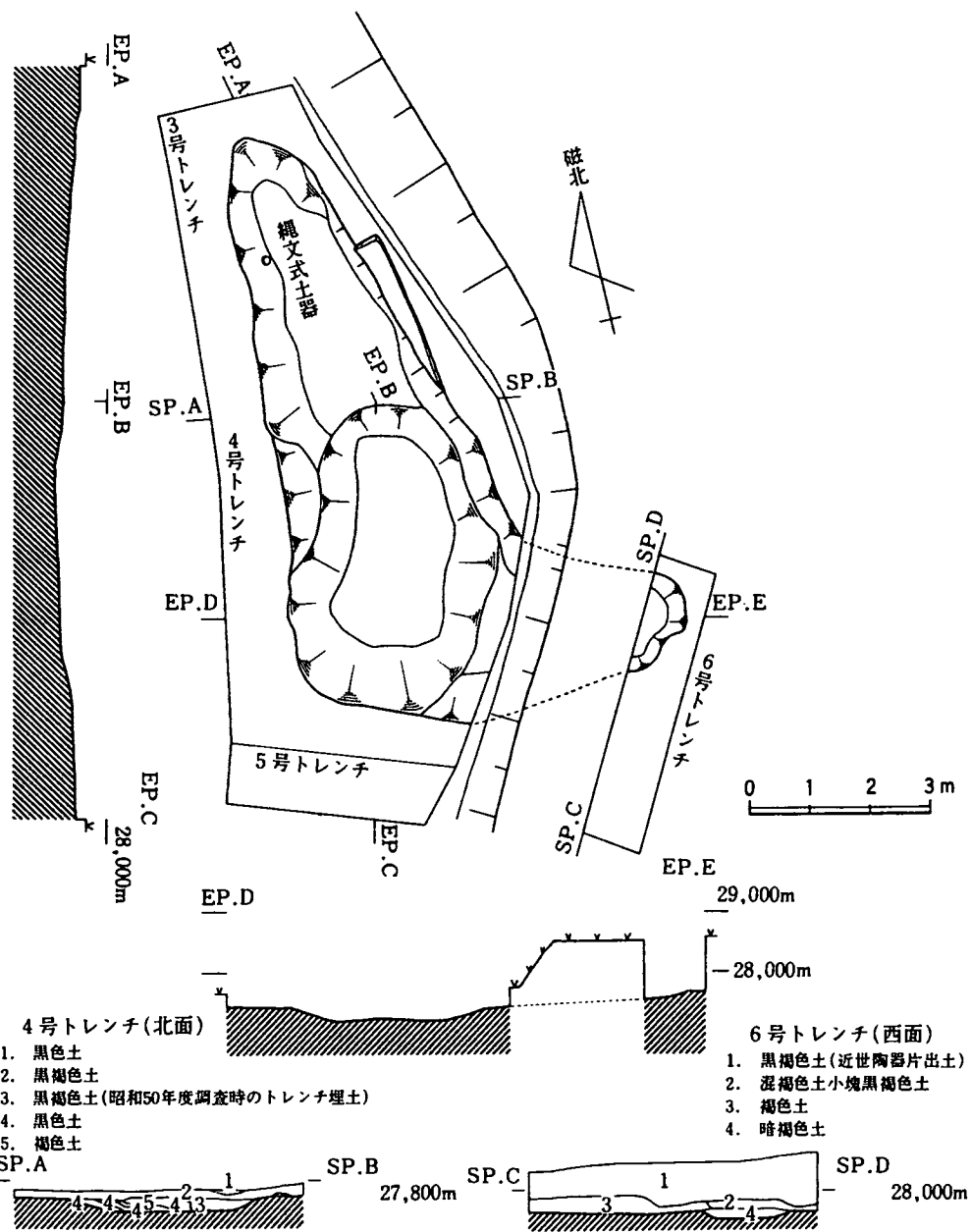
#### (4) 清原地区調査のまとめ

清原台地における遺跡確認調査は菊水町教育委員会による昭和50年度調査に次いで今回が2度目であった。今回の調査所見も50年度調査所見との比較および再評価として述べなければならない。

出土遺物では、縄文時代晩期までは確実に遡れようが、あるいは京塚（伝）周辺3～5号トレンチ出土の底部は中期に比定し得る可能性も考えられる。これは、当台地北方、江田川の対岸に所在する若園貝塚が中期後葉～後期を主体とする点と考え合わせられよう。弥生時代遺物は今回は皆無であったが、50年度調査では後期における単期間の居住を確認されている。

古墳時代においては当台地は確実に墓域化（聖地化）していた。前期末に比定される複合口縁壺を出土した姫塚に続き、京塚（伝）古墳の舟形石棺・大久保の家形石棺（俗称オクボサン



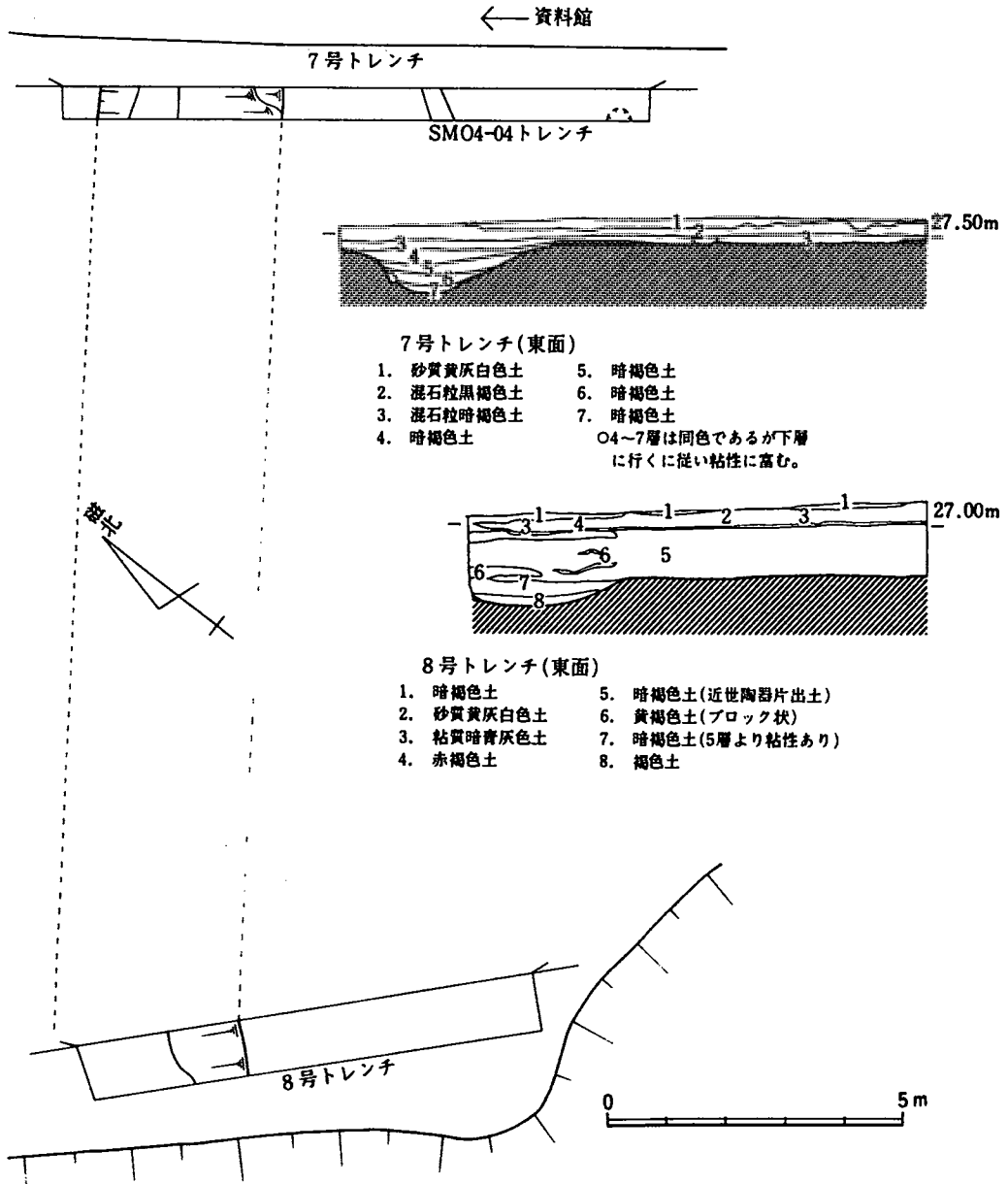


第16図 京塚(伝)古墳周辺3～6号トレンチ確認遺構平面図・土層断面図

の墓)・清水原の家形石棺など石棺の使用が顕著である。さらに船山古墳の妻入の横口式家形石棺や塚坊主古墳の横穴式石室の平入の横口式家形石棺状を呈す石屋形などへの変遷が窺える。

当台地の墓域としての意識が大きく崩壊したのは中世期であり、墳丘の削平も行ったと考えられる。以後近世をも通じて居住地として生活が営まれている。

今回調査した虚空蔵塚・塚坊主両古墳について考えてみる。50年度調査の所見では、出土須恵器の形式からみた時間的流れは船山→塚坊主→虚空蔵塚とされながらも、出土埴輪では虚空蔵塚→船山→塚坊主とされ、虚空蔵・塚坊主の相対関係が須恵器・埴輪では逆になり、問題点が提起されていた。今回の調査でも埴輪は虚空蔵→塚坊主の相対関係を示した。ところが今回虚空蔵塚古墳から、塚坊主古墳出土の須恵器と同時期のものが出土しており、虚空蔵塚古墳の



第17図 京塚(伝)古墳周辺7・8号トレンチ確認遺構平面図・土層断面図

上限を最低塚坊主古墳の時期まで遡らせ得る。これに築造時あるいは初葬時に埋納されたことを前提とする出土埴輪を考え合わせるならば、虚空蔵塚古墳は塚坊主古墳より古い時期の築造とすることも可能かと考える。尚、船山古墳・京塚（伝）古墳を加えた4古墳を考えると、虚空蔵塚古墳出土の埴輪は京塚・船山両古墳の間に位置付けられることが50年度調査で確認されている。虚空蔵塚古墳の埋葬施設は不明であるが、京塚（伝）古墳は舟形石棺、船山古墳は横口式家形石棺、塚坊主古墳は装飾を有する横穴式石室であり、京塚・船山両古墳の間に位置付けられる虚空蔵塚古墳の埋葬施設は舟形・家形何れかの石棺が考えられる。更に石棺の出土遺物では、現在のところ舟形石棺に須恵器が伴った例はなく、その点からすると須恵器を有する虚空蔵塚古墳の埋葬施設は家形石棺の可能性が強いであろう。（森山）

注 「船山」菊水町教育委員会文化財調査報告書第Ⅰ集（1976、熊本県玉名郡菊水町教育委員会）では、埴輪出土地4か所の各々の時期順を、京塚→船山古墳→塚坊主古墳→虚空蔵塚古墳とされていたが、「清原古墳群周隍調査概要」玉名郡菊水町教育委員会（『江田船山古墳』所収1980）では、京塚→虚空蔵塚古墳→船山古墳→塚坊主古墳と訂正されている。

# 卷末 凶版



試掘によって全貌を現した京塚古墳





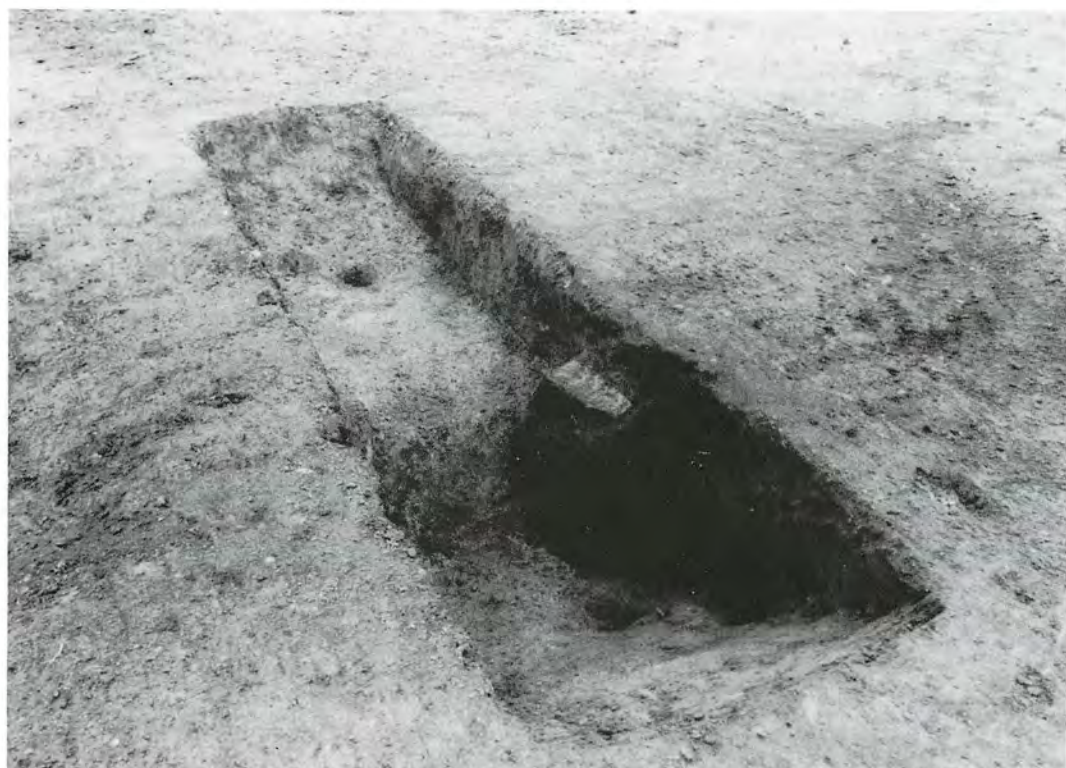
調査前の京塚古墳一帯（南方より）



京塚の地名が残る同所一帯（東方より）



No. 1 試掘坑東断面



No. 2 試掘坑 (道路と周溝)





豪雨で雨水の溜った東側周溝（北方より）



No. 5（手前）とNo. 1 試掘坑（南方より）





南側周溝内に落ち込んだ円筒埴輪群



北側周溝と巨大柱穴群





東側周溝内に落ち込んだ円筒埴輪群



同上円筒埴輪拡大写真（埴輪8）





南側周溝落ち込み円筒埴輪（埴輪2）



北側周溝落ち込み円筒埴輪（埴輪11）





No. 6 試掘坑の埴輪片の出土状況

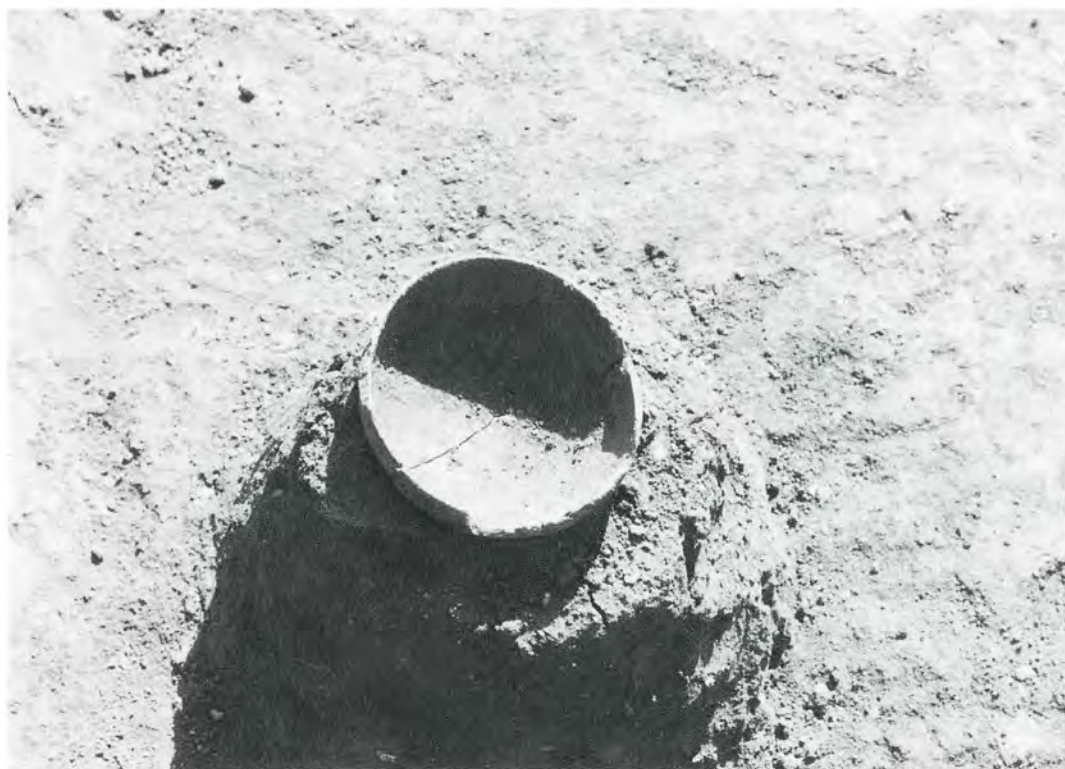


同上拡大写真





東北側周溝内巨大柱穴群（手前は土師盃）



同上出土の土師盃拡大写真





北側周溝斜面に掘り込まれた巨大柱穴群（西方より）



同上巨大柱穴拡大写真（東方より）





方形の巨大柱穴



同 上





No. 4 試掘坑出土の円筒埴輪



同上埴輪拡大写真





西側周溝の状況



同上通路脇（土橋）を固めていた割石群





排土前の南側周溝部（北方より）



完掘のなった同上周溝部（南方より）





5号土墳墓内に落ち込んだ割石群



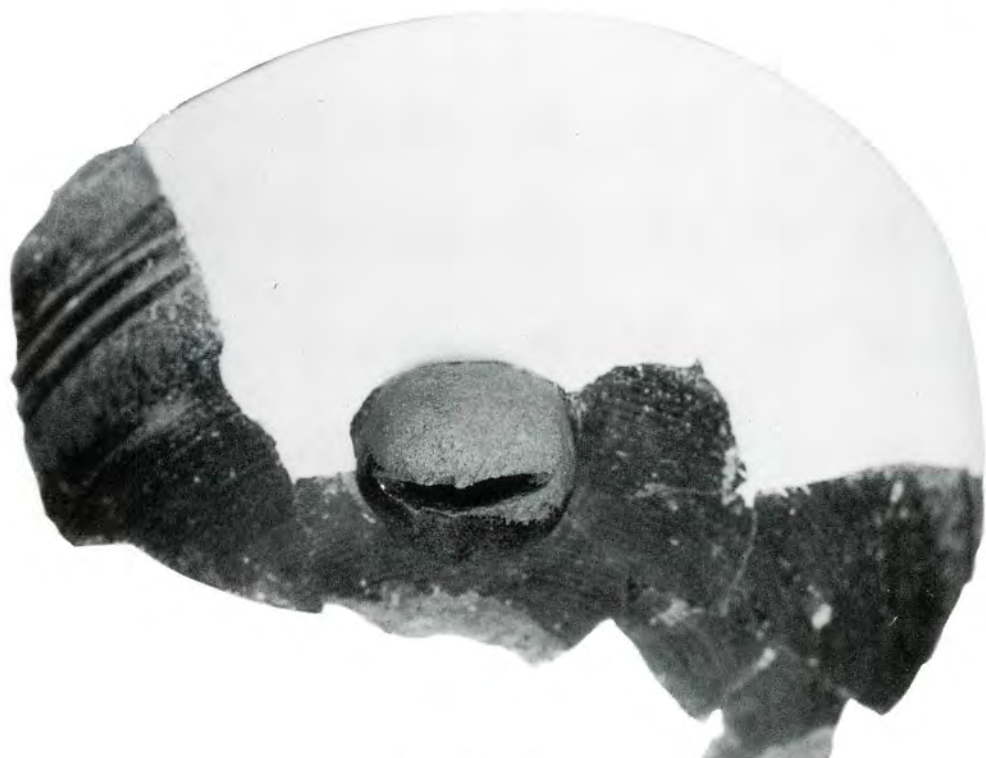
完掘のなった5号土墳墓



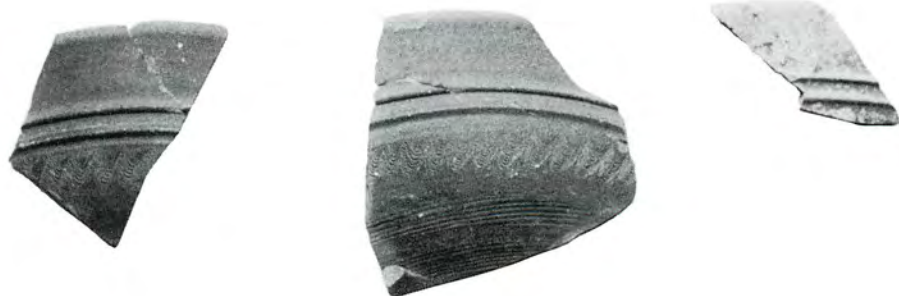
鈴付き高坏I (3鈴共に欠落)



鈴付き高坏II (3鈴中2鈴欠落)



鈴付き高坏の部分拡大



同坏部破片





高坏 I



同上裏面部



甕破片



同上の内面部

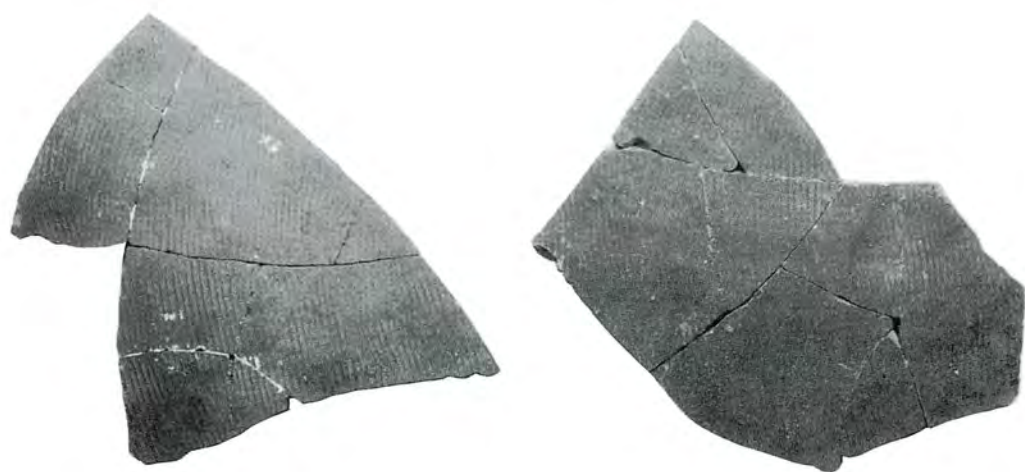


甕破片 (同一個体)



同上の裏面





甕破片



高环脚部破片



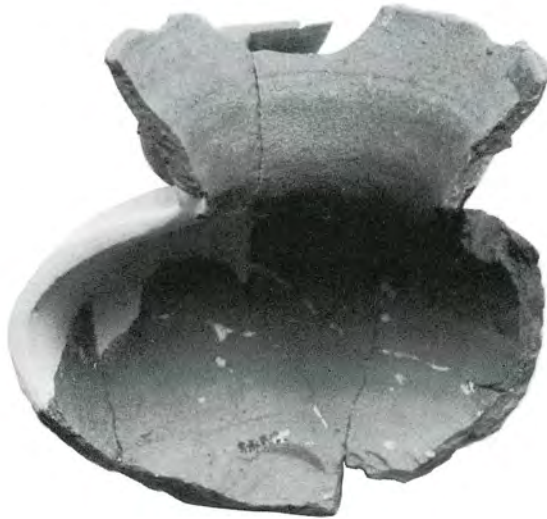
子持ち壺



同上を上面から望む



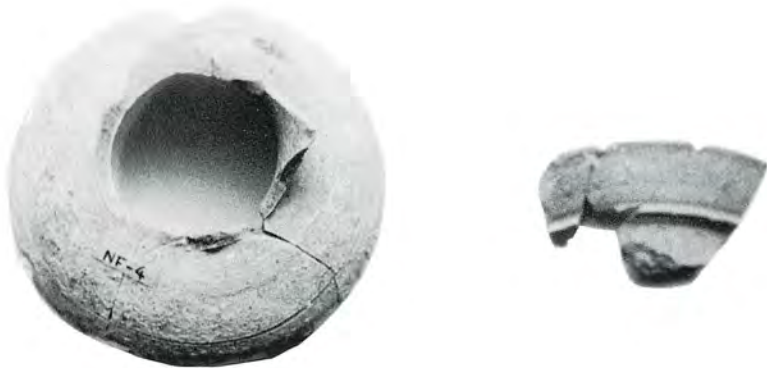
子持ち壺 (下方より)



同上内面の状況



甕



同上俯瞰図（右は口縁部）



土師盃



土師甕





同筒埴輪破片



同上裏面の状況



土師質土器破片



同上底部

1



3



4



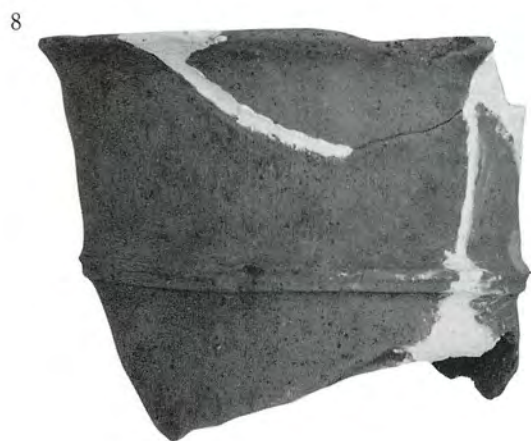
2



5







11



15-1



12



15-2



16



14



17



## — おわりに —

今回の調査で「果して、京塚古墳跡地の確認が可能であろうか」と一抹の不安を抱きながら、麦刈り直後の麦稈の散乱する発掘当該地に佇んだのは、昭和59年6月中旬のことであった。調査は、一次と二次に分けて実施したが、6月から7月にかけて行った所在地確認を主眼とする一次調査では、丁度梅雨期と重ったため、連日が降雨と炎天下の吹き出す汗に濡れての調査となった。

また、周溝の全掘に終始した二次調査では早天が続き、基盤の花崗岩粉末と粘土が作用して、コンクリート状を呈したのではと思われる程周溝内落込み土が堅くなり、踏み込むスコップも唐鍬もはじき返す程で、完掘するのに苦労した。

しかし、後半は穏やかな秋晴に恵まれ、調査も順調に進み、秋風がやや冷たく感じられ始める11月初旬、一応の調査を終了することができた。

苦労の多い調査ではあったが、振り返ってみると、消滅した幻の古墳を再び、姿あるものとして把握できたという喜びと共に、一緒に調査に励んだ人達の顔が目に浮び、懐しくも感じられる。故人となられた仲島実明氏のこともしきりと思い出されてならない。

さて、発掘調査から早3年の月日が過ぎた。記憶の確かなうちに報告書をとっていたが、次々とはいる調査に追われ、上梓が遅れてしまったことを関係者各位にお詫び致しておきたい。

また、期日に追われ、関係資料の収集、資料の吟味、考察等まで力が及ばず、報告書として不完全の謗りを免がれないことについても、併せておことわり申し上げたい。

(桑原 憲彰)

熊本県文化財調査報告書第86集

京 塚 古 墳

---

昭和62年3月31日

編集発行 熊本県教育委員会  
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 (資)下田印刷熊本支店  
〒860 熊本市南熊本3丁目1-3

---

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 86 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：京塚古墳

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日